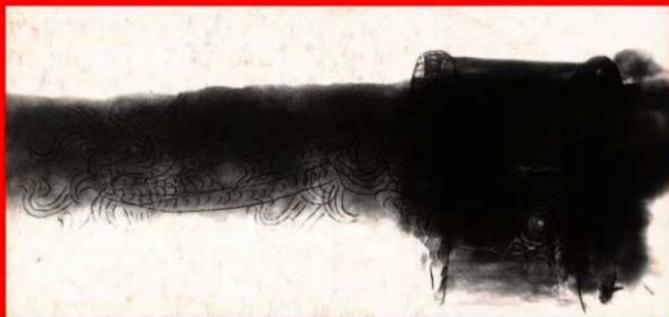


えびの市埋蔵文化財調査報告書 第50集

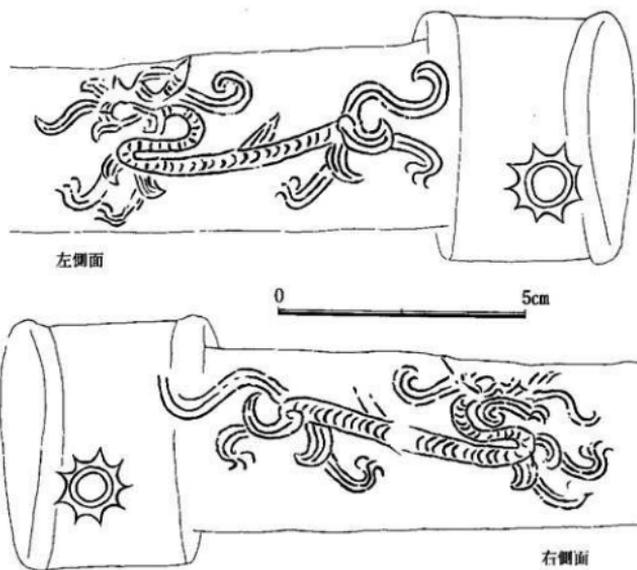
# 島内地下式横穴墓群Ⅲ 岡元遺跡

66kV大霧えびの線新設並びに関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

宮崎県えびの市教育委員会



第41圖 ST-114 出土大刀 象嵌 実測圖

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第50集

# 島内地下式横穴墓群Ⅲ

## 岡元遺跡

66kv大霧えびの線新設並びに関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

宮崎県えびの市教育委員会



SI-03 全景 横穴式石室系板石積石室墓

玄門は西へ倒されている。石室内は丹塗り。奥壁2枚は大きい板石。  
北側に崩落・廃棄された板材を内面を表にして並べている。



ST-114 出土大刀 象嵌 左側面 (研出前段階)

吉田生物研究所提供



同 上 右側面 (研出前段階)

吉田生物研究所提供

## 序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたる、南九州の要であります。北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。古代の官道も通り、古くから交通や物流の要所として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特の地域であります。

本市の西部、島内から岡元地区にかけて走る送電線の鉄塔建替並びに新設に伴う埋蔵文化財の遺構確認調査を実施したところ、島内地下式横穴墓群内のNo80地点と岡元地区のNo68地点の2ヶ所について、本調査の必要性があると判断いたしました。

本書は、平成19年度に実施した、島内地下式横穴墓群と岡元遺跡の発掘調査報告書であります。島内では11基の地下式横穴墓と馬墓1基・板石積石室墓1基を検出し、冑や刀剣類、骨鏃などの武具や武器が多数出土しました。岡元遺跡では竪穴住居1棟のほか、縄文時代前期の陥し穴や早期の炉跡などが発見されました。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力頂いた諸先生方、調査に対してご理解・ご協力頂いた地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成21年11月

えびの市教育委員会

教育長 萩原和範

## 例 言

1. 本書は、平成19年度に実施した、66kv大霧えびの線新設並びに関連工事に伴う島内地下式横穴墓群No80地点と岡元遺跡No68地点発掘調査の報告書である。前者の報告書としては3冊目でありⅢを付している。
2. 調査は、九州電力株式会社の委託を受け、えびの市教育委員会が主体となり、平成20年2月1日～3月27日にかけて実施した。
3. 遺跡の航空写真は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
4. 島内地下式横穴墓群の遺構番号は、発見された順の通し番号を付しており、当地点では113号から124号までで、うち116号墓は調査の途中で別地点で陥没の通報があり、欠番になっている。
5. 出土人骨の実測～取り上げ～分析は、鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に委託し、玉稿を賜った。
6. 耳環と有機物の科学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、その結果報告を付篇で掲載する。
7. 114号墓出土大刀の鞘口金具の蛍光X線分析は株式会社古田生物研究所のご協力により、玉稿を賜った。また、X線写真は、平成21年度の保存処理事業の作業過程での象嵌の発見による、同社からの提供によるものです。お礼申し上げます。
8. 巻頭図版2の象嵌の写真は、平成21年8月末段階の状態であり、古田生物研究所の提供によるものです。重ねてお礼申し上げます。
9. 遺構および出土遺物の写真撮影は中野が担当した。
10. 本書の執筆と編集は、中野が担当した。
11. 調査の関連資料や出土遺物は、えびの市歴史民俗資料館に保管している。

## 凡 例

1. 掲載の遺構は、SA：堅穴住居、SD：溝状遺構、SI：板石積石室墓、SK：土坑・土壙墓、SS：集石遺構、ST：地下式横穴墓として略している。
2. 遺構断面図の閉塞材は、斜線は石を、格子目はアカホヤ塊を示す。
3. 鉄器・鉄製品の実測図と写真は、保存処理前のものである。
4. 写真図版の個別遺構および壁面のピンボールの長さは、1mである。

## 調 査 組 織

**特別調査員** 鹿児島女子短期大学 教授 竹 中 正 巳

**調査主体** えびの市教育委員会 教育長 萩 原 和 範

社会教育課長 白 坂 良 二

文化係長 岩 下 百 年

主査 西 正 利

主任技師 中 野 和 浩

技師 東 真 一 (事務・連絡調整、平成19年度)

平成19年度

**発掘作業員** 有馬セツ、大木場登美子、岡田俊昭、上熊須さとみ、上別府政子、狩集憲子、假屋千代子、木原典子、里岡カズ子、新原敏子、新屋勝子、瀧山志保子、田代亜希子、豊永ヨシ子、永田美智子、原内るり子、東田幸子、東田政子、福重真諭美、星指利江子、松ドヤエ子、宮原ミヨ、本坊福子、山口敏郎、山崎フジ子、山下勝弘、横手マツエ、吉岡知美子

平成21年度

**整理作業員** 有木美穂、入木和代、大田山美子、櫛木たか子、橋爪真美

なお、銀象嵌大刀の年代推定については、平成21年11月16日、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也准教授と福島大学行政政策学類の菊池芳郎准教授に写真と実測図を見て頂き、6世紀前半（第1四半期）の大王級の所持品（一級品）という年代観・評価を頂いた。

# 目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	1
第3章 島内地下式横穴墓群No80地点の調査	
第1節 はじめに	6
第2節 基本的層序	6
第3節 発掘調査	
1. 遺構面の状況と遺構の分布状態	6
2. S T -113	7
3. S T -114	12
4. S T -115	18
5. S T -117	30
6. S T -118	34
7. S T -119	41
8. S T -120	42
9. S T -121	46
10. S T -122	46
11. S T -123	50
12. S T -124	55
13. S K -03	57
14. S D -01	57
15. S I -03	62
第4節 まとめ	64
第4章 岡元遺跡	
第1節 はじめに	67
第2節 基本的層序	67
第3節 発掘調査	
1. 縄文時代前期以降	68
2. 縄文時代早期	73
第4節 まとめ	76
付篇 自然科学的分析	
1. 島内地下式横穴墓群における蛍光X線分析	191
2. 島内地下式横穴墓群出土刀装具の成分分析調査	197

## 挿 図 目 次

### 島内地下式横穴墓群

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡位置図..... 2	第31図	S T - 123出土遺物実測図 (2) .....50
第2図	島内地下式横穴墓群 分布図..... 3・4	第32図	S T - 124遺構実測図.....51・52
第3図	遺構分布図..... 7	第33図	S T - 124出土遺物実測図 (1) .....53
第4図	S T - 113遺構実測図..... 9・10	第34図	S T - 124出土遺物実測図 (2) .....54
第5図	S T - 113出土遺物実測図 (1) .....11	第35図	S K - 03遺構実測図.....55
第6図	S T - 113出土遺物実測図 (2) .....12	第36図	S K - 03出土遺物実測図.....56
第7図	S T - 114遺構実測図.....13・14	第37図	S D - 01出土遺物実測図.....58
第8図	S T - 114出土遺物実測図 (1) .....15	第38図	S I - 03遺構実測図.....59・60
第9図	S T - 114出土遺物実測図 (2) .....16	第39図	S I - 03出土遺物実測図 (1) .....61
第10図	S T - 114出土遺物実測図 (3) .....17	第40図	S I - 03出土遺物実測図 (2) .....62
第11図	S T - 115遺構実測図.....19・20	第41図	S T - 114出土人刀象嵌実測図.....65
第12図	S T - 115出土遺物実測図 (1) .....21		
第13図	S T - 115出土遺物実測図 (2) .....22	<b>岡元遺跡</b>	
第14図	S T - 115出土遺物実測図 (3) -1・23	第1図	調査地点と周辺の地形.....67
第15図	S T - 115出土遺物実測図 (3) -2・24	第2図	東壁層序図.....68
第16図	S T - 115出土遺物実測図 (3) -3・25	第3図	I ~ III層出土遺物実測図.....69
第17図	S T - 115出土遺物実測図 (4) .....26	第4図	IV a層上面遺構分布図.....69
第18図	S T - 117遺構実測図.....27・28	第5図	S A - 01遺構実測図.....70
第19図	S T - 117出土遺物実測図.....29	第6図	S A - 01出土遺物実測図.....71
第20図	S T - 118遺構実測図.....31・32	第7図	S K - 01、IV a1・a2層出土遺物実測図 .....72
第21図	S T - 118出土遺物実測図.....33	第8図	VI層出土遺物実測図.....73
第22図	S T - 119遺構実測図.....35・36	第9図	VII a・b層上面遺構分布図.....73
第23図	S T - 119出土遺物実測図 (1) .....37	第10図	S K - 01~03、S S - 01遺構実測図.....74
第24図	S T - 119出土遺物実測図 (2) .....38	第11図	S K - 04遺構実測図.....75
第25図	S T - 120遺構実測図.....39・40	第12図	S K - 04出土遺物実測図.....76
第26図	S T - 121遺構実測図..... 41	第13図	VII a・b層出土遺物実測図.....77
第27図	S T - 122遺構実測図.....43・44		
第28図	S T - 120~122出土遺物実測図.....45		
第29図	S T - 123遺構実測図.....47・48		
第30図	S T - 123出土遺物実測図 (1) .....49		

# 表 目 次

## 島内地下式横穴墓群

表1	ST-113出土遺物計測表……………8	表14	ST-122出土遺物計測表……………50
表2	ST-114出土遺物計測表(1)……………18	表15	ST-123出土遺物計測表(1)……………55
表3	ST-114出土遺物計測表(2)……………18	表16	ST-123出土遺物計測表(2)……………55
表4	ST-115出土遺物計測表(1)……………30	表17	ST-124出土遺物計測表……………57
表5	ST-115出土遺物計測表(2)……………30	表18	SD-01出土須恵器観察表……………62
表6	ST-117出土遺物計測表(1)……………34	表19	SI-03出土遺物観察表……………63
表7	ST-117出土遺物計測表(2)……………34	表20	SI-03出土遺物計測表……………63
表8	ST-118出土遺物計測表(1)……………34	表21	地下式横穴墓被葬者一覧……………66
表9	ST-118出土遺物計測表(2)……………34		
表10	ST-119出土遺物計測表……………42		
表11	ST-120出土遺物計測表(1)……………46		
表12	ST-120出土遺物計測表(2)……………46		
表13	ST-121出土遺物計測表……………46		

		岡元遺跡	
表1	縄文土器観察表(1)……………78		
表2	縄文土器観察表(2)……………79		
表3	石器観察表……………79		

# 写 真 図 版 目 次

## 島内地下式横穴墓群

図版1	調査地遠景(南東から、平成10年12月撮影、白丸が調査地)、調査地俯瞰
図版2	調査区近景(南から)
図版3	調査区俯瞰(右が北)
図版4	ST-113羨門板石閉塞状態(南西から)、閉塞石除去(南から)、竪坑横断面(北から)、南壁ステップ掘込状況(北から)
図版5	ST-113竪坑完掘全景(南から)、羨道中程出土銅鈴
図版6	ST-113 1~4号人骨上半、1~3号人骨・1号人骨の右に剣
図版7	ST-113 1~4号人骨上半、下肢と副葬品
図版8	ST-113 1~4号人骨除去・鉄剣と鏃子、5号人骨上半、下半・骨鏃1点
図版9	ST-114竪坑半截断面層序(西から)、羨門閉塞状態(南から)、完掘状態、南壁上部ステップ(北から)
図版10	ST-114玄室内右半・1~3号人骨と副葬品、頭部~上半身と副葬品
図版11	ST-114 1~3号人骨下肢と副葬品、足先鉄鏃束、人骨除去
図版12	ST-114 1・2号人骨副葬品接写、左半4・5号人骨と副葬品

- 図版13 ST-114 4・5号人骨上半身、下肢と朱玉
- 図版14 ST-115竪坑断面層序（南西から）、羨門閉塞状態（南から）
- 図版15 ST-115閉塞石除去完掘状態（南西から）、竪坑西～南壁のステップ（北東から）
- 図版16 ST-115玄室内左側1～4号人骨と副葬品、上半身と副葬品
- 図版17 ST-115 3・4号人骨胸部～膝付近と副葬品、3号人骨下肢と副葬品・左奥の轡・辻金具と冑
- 図版18 ST-115 2号人骨下肢と副葬品・奥の轡と辻金具・冑、轡と漆膜・冑
- 図版19 ST-115 1～4号人骨除去・貝銅・刀子2点・大刀・短剣・4号人骨の耳環1対（竹中節）、刀子～貝銅部分接写
- 図版20 ST-115玄室右側5号人骨と副葬品、ST-117竪坑断面層序（南西から）
- 図版21 ST-117羨門アカホヤ塊閉塞状態（南から）、（東から）
- 図版22 ST-117竪坑完掘（南から、羨門の天井が一部崩落）、竪坑西壁のステップ（南東から）
- 図版23 ST-117 1～3号人骨（南東から）、1・2号人骨（南東から）
- 図版24 ST-117 2号人骨と右肘部の刀子（右下）（南東から）、2号人骨足先の鉄鎌
- 図版25 ST-117 2～4号人骨と副葬品（南から）、1号人骨と副葬品（南西から）
- 図版26 ST-117 3・4号人骨下肢と副葬品・糞石（南から）、3号人骨の糞石（南から）
- 図版27 ST-117 1号人骨除去・鉄鎌と矢柄・刀子（東から）、3・4号人骨除去、蛇行剣と耳環（南から）
- 図版28 ST-118竪坑断面層序（南から）、羨門アカホヤ塊閉塞状態（南西から）
- 図版29 ST-118竪坑完掘（南西から）、南側のステップ（東から）
- 図版30 ST-118 1号人骨と2号人骨半身（北西から）、1・2号人骨上半身（北西から）
- 図版31 ST-118 1号人骨の着装貝銅（北西から）、2号人骨と副葬品（南西から）
- 図版32 ST-118 2号人骨下肢周辺（南から）、3号人骨（南東から）
- 図版33 ST-118 3号人骨上半身と刀子（北東から）、下半身（北東から）
- 図版34 ST-119竪坑検出状態（南から）、竪坑断面層序（南から）・閉塞石は崩落、完掘（南西から）
- 図版35 ST-119玄室左半1・2号人骨と副葬品（南から）、右半2・3号人骨と副葬品
- 図版36 ST-119 1・2号人骨と副葬品（南から）、1号人骨上半と副葬品（南から）
- 図版37 ST-119 1号人骨右足部の漆膜（南東から）、2号人骨胸部～下肢（南東から）
- 図版38 ST-119 2号人骨下肢周辺の副葬品（南から）、玄室左奥と2号人骨左下肢部の副葬品（南西から）
- 図版39 ST-119左奥壁部の副葬品（南から）、3号人骨と副葬品（北から）、寛骨～足先（北から）
- 図版40 ST-120竪坑断面層序（南から）、羨門アカホヤ塊閉塞状態（南西から）

- 図版41 S T-120 竪坑完掘（南西から）、1号人骨と着装貝鋼（西から）
- 図版42 S T-120 1号人骨下肢（北から）、頭骨と着装貝鋼（北から）
- 図版43 S T-120 1号人骨左腕の貝鋼（北から）、2号人骨と副葬品（東から）、頭骨周辺と副葬品（東から）
- 図版44 S T-121 竪坑断面層序（南から）、羨門板石閉塞状態（南東から）
- 図版45 S T-121 羨門板石閉塞状態（南から）、完掘・玄室内（南西から）
- 図版46 S T-121 玄室（南西から）、1号人骨と副葬品（南西から）
- 図版47 S T-122 竪坑断面層序（西から）、羨門閉塞状態（南東から）
- 図版48 S T-122 羨門閉塞状態接写（南西から）、竪坑完掘（南から）
- 図版49 S T-122 1号人骨と3号人骨の足先（東から）、1号人骨上半と副葬品（東から）
- 図版50 S T-122 1号人骨下半と3号人骨足先（南から）、2・3号人骨と1号人骨足先（南から）
- 図版51 S T-122 2・3号人骨上半（南西から）、1～3号人骨の下肢～足先（南から）
- 図版52 S T-123 竪坑断面層序（西から）、羨門閉塞状態（北西から）
- 図版53 S T-123 羨門閉塞状態接写（北西から）、竪坑完掘（北西から）
- 図版54 S T-123 1・2号人骨（南から）、上半（南から）
- 図版55 S T-123 1・2号人骨下肢（南から）、2号人骨右足先の鉄鏃1本と骨鏃の束（西から）
- 図版56 S T-123 鉄鏃1本と骨鏃の束接写（西から）、3・4号人骨頭骨と副葬品（南東から）
- 図版57 S T-124 竪坑断面層序（西から）、羨門閉塞状態（南西から、右上は左上部にあった崩落板石）
- 図版58 S T-123（右）と124羨門閉塞状態（南西から）、S T-124 竪坑完掘（南西から）
- 図版59 S T-124 1号人骨と2号人骨の下肢（南西から）、1号人骨上半と副葬品（西から）
- 図版60 S T-124 2号人骨上半と副葬品（南東から）、右腕部接写（南東から）
- 図版61 S T-124 1・2号人骨下肢と副葬品（南から）、玄室中央付近の有機物（西から）
- 図版62 S K-03 検出状態（南西から）、断面層序（南から）
- 図版63 S K-03 完掘・譽出土状態（南西から）、（北西から）
- 図版64 S D-01 遺物出土状態（西から、左上はS T-114の竪坑）、S I-03 検出状態（東から）
- 図版65 S I-03 掘り下げ・板石片出土状態（北東から）、（南東から）
- 図版66 S I-03 遺物出土状態（北東から）、（北西から）
- 図版67 S I-03 遺物出土状態（東から）、（西から）
- 図版68 S I-03 奥壁と天蓋の板石（南から、内面に丹塗り）、東側壁（西から）、西側壁（東から）
- 図版69 S I-03 倒れた玄門と南壁（北から）、西南隅の掘形（南西から）
- 図版70 S T-113 出土遺物
- 図版71 S T-114 出土遺物（1）
- 図版72 S T-114 出土大刀把部、接写

- 図版73 ST-114出土大刀 (69) のX線写真 (1/1)
- 図版74 ST-114大刀 (69) の鹿角製鞘尻、ST-114出土遺物 (2)、(3)
- 図版75 ST-115出土遺物 (1)
- 図版76 ST-115出土遺物 (2)、84の把部展開
- 図版77 ST-115出土遺物 (3)
- 図版78 85右側面、内面
- 図版79 85右側面鍍の革覆輪と紐、左側面
- 図版80 ST-115出土遺物 (4) 轡、(5) 錫製耳環
- 図版81 ST-115出土遺物 (6) 辻金具ほか、(7) 貝銅
- 図版82 ST-117出土遺物 (1)、(2)、ST-118出土遺物 (1)
- 図版83 ST-118出土遺物 (2)、ST-119出土遺物 (1)、144の基部・ハエ蛹殻
- 図版84 ST-119出土遺物 (2)、ST-120出土遺物、ST-121出土遺物
- 図版85 ST-122出土遺物 (1)、(2)
- 図版86 ST-123出土遺物 (1)、(2)、(3) 錫製耳環
- 図版87 ST-124出土遺物 (1)、205基部布接写、(2)
- 図版88 233の柄部布接写、ST-124出土遺物 (3) 232・236以外は一括
- 図版89 SK-03出土轡
- 図版90 SD-01出土遺物 (1)、(2)、ST-117・I層出土遺物、SD-01出土遺物 (3)・  
SI-03出土遺物 (1) (右下3点) 外面
- 図版91 SI-03出土遺物 (1) 内面、(2)
- 図版92 SI-03出土遺物 (3)

## 岡元遺跡

- 図版1 調査地近景 (南東から)
- 図版2 調査地近景 (北東から)
- 図版3 IVa層上面SA-01検出状態 (西から)、遺物出土状態 (西から)
- 図版4 SΛ-01断面層序 (西から)、土坑内遺物出土状態 (南から)、完掘状態 (西から)
- 図版5 IVa層遺物出土状態 (南東から)、南半部・手前中央にSK-01
- 図版6 SK-01断面層序 (北西から)、完掘、SK-02完掘 (北西から)
- 図版7 VI層遺物出土状態 (北東から)、(北西から)、SS-01検出状態 (北東から)
- 図版8 SS-01断面層序 (西から)、石組・周辺遺物出土状態 (北東から)、(南西から)
- 図版9 北西部VI~VII層遺物出土状態 (南東から)、北東部VI~VII層遺物出土状態 (南西から)
- 図版10 SK-04遺物出土状態 (西から)、南半部
- 図版11 SK-04断面A (北東から)、断面B (北東から)、断面C (北東から)

図版12 SK-03完掘・東壁層序（北西から）、SK-02断面層序（北西から）

図版13 東壁層序（北から）、東南部

図版14 I層・SA-01出土縄文土器 外面、内面、IVa1・a2層出土縄文土器 外面、内面

図版15 VI層出土縄文土器 外面、内面、VII層出土縄文土器 外面、内面、VIIb層出土縄文土器 外面、内面

図版16 SK-04出土縄文土器 外面、内面、I～III区出土石器

図版17 SA-01出土石器、IVa1・a2層出土石器、VI層出土石器、SK-04・VIIa～b層出土石器

## 第1章 はじめに

平成19年2月、九州電力株式会社より、送電線鉄塔の新設並びに建替に伴う遺跡の照会を受けた。氾濫源を除く全ての地点（No68～81）において、遺跡の包蔵が予想されたため、平成19年5月18～28日と翌年1月28日～2月7日にかけて試掘調査を実施し、No68と80地点において遺構・遺物を確認した。<sup>40</sup>

No80地点は、5世紀後半の鉄器・鉄製品等豊富な副葬品を保有し、保存状態も極めて良好な地下式横穴墓群の分布範囲に位置する。また、約13m四方の範囲において、3～4基の分布は容易に推定されることから鉄塔の位置の計画変更を求めたが、変更不可能という回答を得たことから全面調査になった。表土剥ぎと遺構検出を終え、113号と114号の堅坑を掘り込んでいる時に、南～東側の畑も借用して表土を剥いでシラスを入れて工事作業地とし、南からも農道脇にシラスを積んで拡幅して大型車が入れるようにするという計画を知り、急遽、作業用地607㎡の表土剥ぎを実施した。加えて農道拡幅用地の排土置き場になる地点で、数年前から耕作の方から「トラクターの刃が石に当たる」と言われていた所の表土を剥ぐと板石積石室墓が検出された。板石積石室墓は昭和46年に2基破壊されているらしく、今回の検出遺構を03号とした。

No68地点の岡元遺跡については、試掘の第1層（耕作土）からも縄文土器や黒曜石の剥片等、多くの遺物が出土したため、表土剥ぎは重機を使用せず、人力で頑張ってもらい、多くの遺物を採取した。出土遺物が多い理由は、トレンチャー（ゴボウ播種のために幅20cm程・深さ1mの溝を40～50cm間隔で掘る）が縦横に攪乱しているためである。

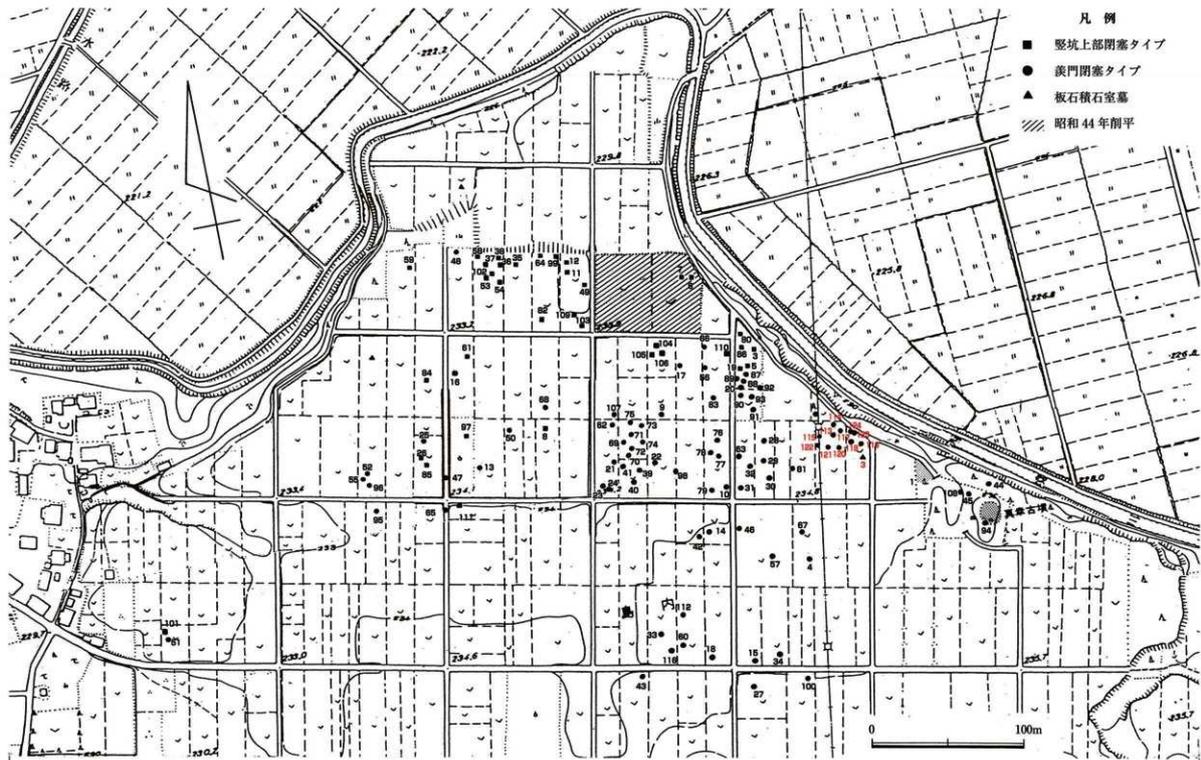
## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境（第1図）

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松・杉ノ原に所在、本市の西寄り、盆地中央を西流する川内川の左岸、氾濫原との比高8m、標高233～235mの低位段丘に立地する。昭和60年の県文化課による『えびの市遺跡詳細分布調査報告書』の刊行により、平松地下式古墳とか平松古墳と呼称されていた名称を島内地下式横穴墓群として周知された。明治38（1905）年に甲冑が出土して以来、昭和30年代の開墾、昭和46年の段丘礫屑の掘削採取等、様々な危機にみまわれながらも、良好な保存状態を保ってきた。昭和8年12月に、墳丘の遺存していた12基が県指定されたが、後の開墾によって1号墳以外は削平されてしまった。平成に入り、陥没の通報が増加し、平成6年の少雨は4基の自然陥没や農業機械の重圧で37基も陥没し、調査数を増大させた。有機物の良好な遺存状態は注目され、平成10年度には鹿児島大学による学術調査が、11年度には地中レーダー探査を県文化課と一部合同で実施し、分布範囲の絞り込みを行い、東西650m・南北350m程に分布することが判明した。平成12年度には、101号墓までと、未指定の墳丘（1号墓）周辺の調査や地中レーダー探査の成果を纏めた報告書を刊行した。<sup>41</sup>以来、今回の調査までに10件以上の陥没の通報があり、112



- 1: 島内地下式横穴墓群 ■: 調査地 2: 岡元遺跡 3: 赤花城跡(消滅) 4: 天神免遺跡 5: 岡松遺跡  
 6: 下鶯遺跡 7: 昌明寺遺跡 8: 杉尾城跡 9: 松尾城跡 10: 丸ノ尾城跡 11: 風戸遺跡 12: 内小野遺跡  
 13: 東福城跡 14: 新城跡 15: 徳調城跡 16: 妙見遺跡 17: 内牧遺跡 18: 古屋敷遺跡 19: 岡田城跡(消滅)  
 20: 加久藤城跡 21: 小城跡 22: 草刈田遺跡 23: 稻荷城跡 24: 官道跡 25: 灰塚地下式横穴墓群 26: 溝園城跡  
 27: 役所田遺跡 28: 小路下遺跡 29: 小屋敷城跡 30: 畑田城跡 31: 馬場田遺跡 32: 浜川原遺跡  
 33: 大溝原遺跡 34: 島内遺跡 35: 柿ヶ迫経塚 36: 三吉城跡 37: 西矢倉城跡 38: 池山城跡 39: 中浦遺跡  
 40: 徳永牟田遺跡 41: 古城跡 42: 猿ヶ城跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図(1:50,000)



第2図 島内地下式横穴墓群 遺構分布図

号まで調査していた。<sup>31)</sup>

川内川の左岸には、同規模の地下式横穴墓群が約2km間隔に4ヶ所：島内(1)、灰塚(25)、小木原、建山と、小規模のもの2ヶ所(遠目塚・杉水流)に加え、松山遺跡において小型形式の地下式横穴墓<sup>32)</sup>1基を検出している。右岸では、1ヶ所(苧畑<sup>33)</sup>)と、内小野遺跡(12)で1基<sup>34)</sup>、天神免遺跡(4)で、27基、岡松遺跡(5)で2基<sup>35)</sup>の小型形式の地下式横穴墓を検出している。このうち、島内・灰塚・小木原・苧畑の4ヶ所には、板石積石室墓も混在している。

対岸の2km北には、弥生時代中期末～古墳時代中期、推定300～400軒の竪穴住居がある内小野遺跡(12)が立地し、当墳墓群を造営した集団のうちの一つの居住地である可能性が高い。その東には、5～6世紀代の竪穴住居41軒を検出した妙見遺跡<sup>36)</sup>(16)が、3km西には、弥生時代中期末～古墳時代後期の竪穴住居200軒余りを検出した天神免遺跡が、その東には28軒の竪穴住居を検出した岡松遺跡が立地する。

段丘下の氾濫源は遺跡が少ないが、徳永牟田遺跡(40)では弥生時代後期の壺や甕数10個体が潰れた状態で出土し<sup>37)</sup>、微高地には遺跡が包蔵していることを立証している。0.6～0.7km南には、古代の官道が走り、中世には、左岸段丘の突出部や右岸丘陵の先端部には幾つもの山城が築城され、肥沃な盆地の覇権が争われた。三古城西隣の独立小丘陵頂部(35)には、経塚3基があると思われ、うち1基は掘り返されて、軽石製外容器が出土している。

幅1～2kmの山塊を南へ抜けると、広さ57haの圃場を有する岡元地区に入る。昭和54年、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査を岡元遺跡内のA地点において県文化課が前畑遺跡として実施し、縄文時代早期・前期・後期の遺物を報告している<sup>38)</sup>。今回の調査(B地点)も字前畑地内で、同・微高地の東端にあたり、岡元遺跡の調査としては第2次となる。背後(南)は、陸上自衛隊演習場～標高846mの飯盛山(霧島山系の西端の山)へと上昇する。

霧島山系から派生するなだらかな丘陵は遺跡が多く、長江川流域の圃場整備事業に伴って調査した役所田遺跡(27)と馬場田遺跡(31)で10万点以上の縄文土器が出土している<sup>39)</sup>。自然堤防に立地する草刈田遺跡(22)は、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居21軒を検出している<sup>40)</sup>。

#### 註

- (1) えびの市教育委員会「f66kv 大霧えびの線新設並びに関連工事に伴う埋蔵文化財確認調査報告書」2008
- (2) えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群」2001
- (3) えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群Ⅱ」2010
- (4) えびの市教育委員会「松山遺跡」『田代地区遺跡群・妙見遺跡』1997
- (5) えびの市教育委員会「内小野遺跡」2000
- (6) えびの市教育委員会「北岡松地区遺跡群」2010
- (7) 同上
- (8) (4)と同じ
- (9) 宮崎県教育委員会「野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡」1994
- (10) 同上
- (11) 未発表である。
- (12) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」1979
- (13) えびの市教育委員会「長江浦地区遺跡群」2002
- (14) えびの市教育委員会「草刈田遺跡」2004

## 第3章 島内地下式横穴墓群No.80地点の調査

### 第1節 はじめに

鉄塔建替用地だけでなく、作業用地や作業用道路も調査対象となり、面的な調査が実施できた。過去の調査例が無い畑地であり、天井が全て崩落しているか玄室が深い位置にあるかいつれかであろうと推定していた。結果的には後者であったが、天井がかなり崩落しているものが多く、陥没の通報が来るのは間近であったと思われる。

### 第2節 基本的層序

層序は上から、Ⅰ層：畑耕作土、Ⅱ層：旧耕作土・床土・客土、Ⅲ層：黒灰～黒褐色土、Ⅳ層：アカホヤ火山灰（BP7,300）、Ⅴ層：暗茶褐色＋黒褐色土、Ⅵ層：淡黒褐色土、Ⅶ層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土～細砂質土、Ⅷ層：段丘砂礫層（BC13,000）に分別した。Ⅶ・Ⅷ層には、小林軽石（BC13,000、黄白色～黄橙色降下軽石）を含む。Ⅷ層は、数10m間隔で起伏し、地形の原型を形成している。Ⅲ層はa・bに分別され、厚さ10～20cmのb層上面が古墳時代の遺構面である。

### 第3節 発掘調査

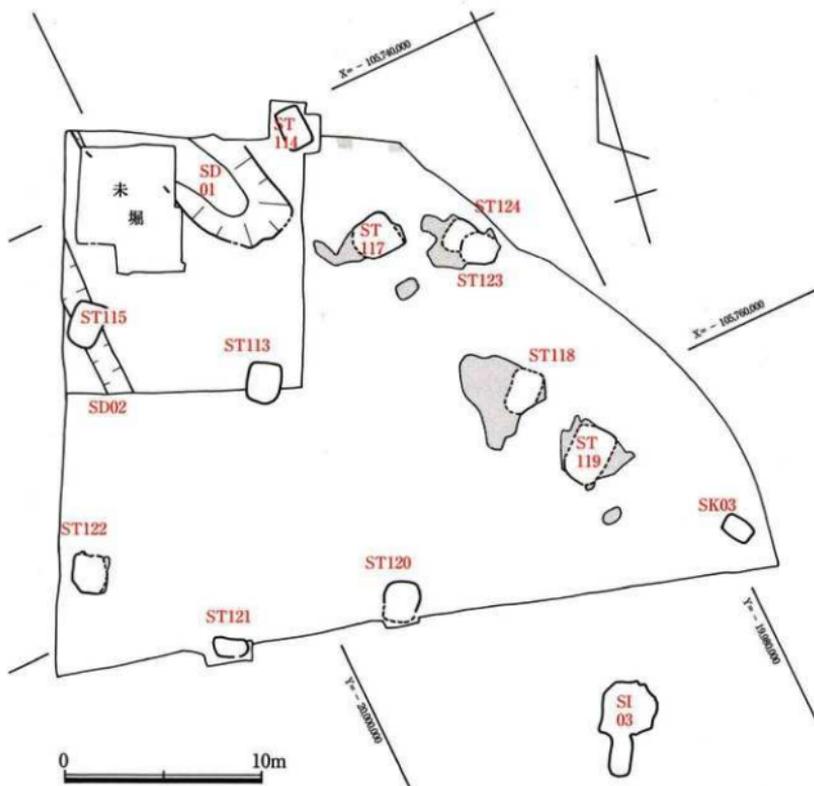
#### 1. 遺構面の状況と遺構の分布状態（第3図）

北西の鉄塔建替用地内の表土下においては、幾筋もの近現代の溝状遺構が走り、厚さ15cm前後の天地返しもあったことから遺構面に達するまでに時間を要したが、地下式横穴墓3基と溝状遺構1条を検出した。作業用地については砂礫混じりの墓坑掘削排土検出上面で精査し、地下式横穴墓8基と馬墓1基を検出した。119号墓以西はⅡ層が残ったままであるが、地下式横穴墓は全て検出したと確信する。113号墓の周囲（北西部以外）には01号溝の様な凹みや馬墓等が包蔵しているかもしれないが、削平されたり、陥没することは無いので、あえて検出していない。

地下式横穴墓の竪坑は隅円長方形を呈するものが多く、主軸を北にとる114・117号墓の2基、北東寄りの113・115・118～122・124号墓の8基、さらには東向き123号墓1基の3方向に分けられる。123号墓の竪坑は、124号墓の竪坑を切る稀な事例である。

114号墓の東側1mと4mの地点や117号墓の南2m、119号墓の南2mにも砂礫混じりの土が分布していたが、遺構ではなかった。墓坑掘削土を墳丘へ運搬した時に零れたものと推定される。01号溝は、調査区外の形状が不明であるが、直線的であり、墳丘の周溝ではない。

作業用道路の排土地内で検出した板石積石室墓は、地権者の話では、45年位前に開墾した際、大量の板石を台地の縁辺まで運んだらしく、側石の一部も抜かれ、天蓋の石も小さめの板石を残す程度であった。



第3図 遺構分布図 アミ目は墓墳掘削土の広がり

## 2. ST-113 (第4図)

試掘調査の段階で、攪乱と思ひこみ、スコップで掘り下げてしまったので、竪坑の南北断面が検討できていないが、平面的には追葬坑は認められなかった。

竪坑は、長さ2.76m・幅1.6~1.7mの長D字形を呈する。検出面からの深さは1.28~1.32m、途中で12cm下がり、羨門部では1.54mの深さがある。南側両壁と南壁上位2ヶ所にはステップ（足掛け）が設けられている。

羨門は、幅50~62cm・高さ94cmを測り、長さ74cm・幅27~37cmと長さ1.3m・幅42~58cmの板石2枚で塞がれている。羨道は、幅54cm・長さ44cmを測り、右壁中位には銅鈴1点(26)が置かれていた(?)いた。

玄室は平入り両裾の隅台形タイプで、寄棟の家型である。高さは1.03mを測り、壁面下部は砂礫が崩れ、廂の有無が不明である。幅は2.0~2.66m、奥行き1.7~1.75mを測る。主軸方位はN

32° Eである。

被葬者は5体で、右側に4体（1～4号）、左側に1体（5号）が、南頭位で埋葬されている。1号人骨は壮年の男性で、唯一、顔面に赤色顔料が塗布されている。右の壁際に直刀（1）と鎌状鉄製品（3）・鍬子（2）を、足先に鉄鎌1本（5）を伴う。2号人骨は7歳と推定される小児で、鉄鎌2本（6・7）を伴う可能性がある。3号人骨は老年の女性で、若下の赤色顔料が認められ、足先～左先に鉄鎌15本（8～22）と骨鎌2本（24・25）を伴う可能性がある。4号人骨は3～4歳の幼児で、頭頂部に刀子1点（4）を伴う。なお、5～7と13・14の鉄鎌は床面よりも2～6cm浮いた（奥壁崩落砂礫の上に置かれた）状態で出土しており、大きくは移動していない。

5号人骨は壮年の男性で、赤色顔料は認められない。頭部右に鉄鎌1本（22）、右大腿骨下部寄りに骨鎌1点（23）が副葬されている。

3号人骨の右側腹部から右前腕にかけては、ハエの蛹殻が多数遺存しており、少なくとも3号人骨が骨化するまでは閉塞されていなかったことを示す。

#### 出土遺物

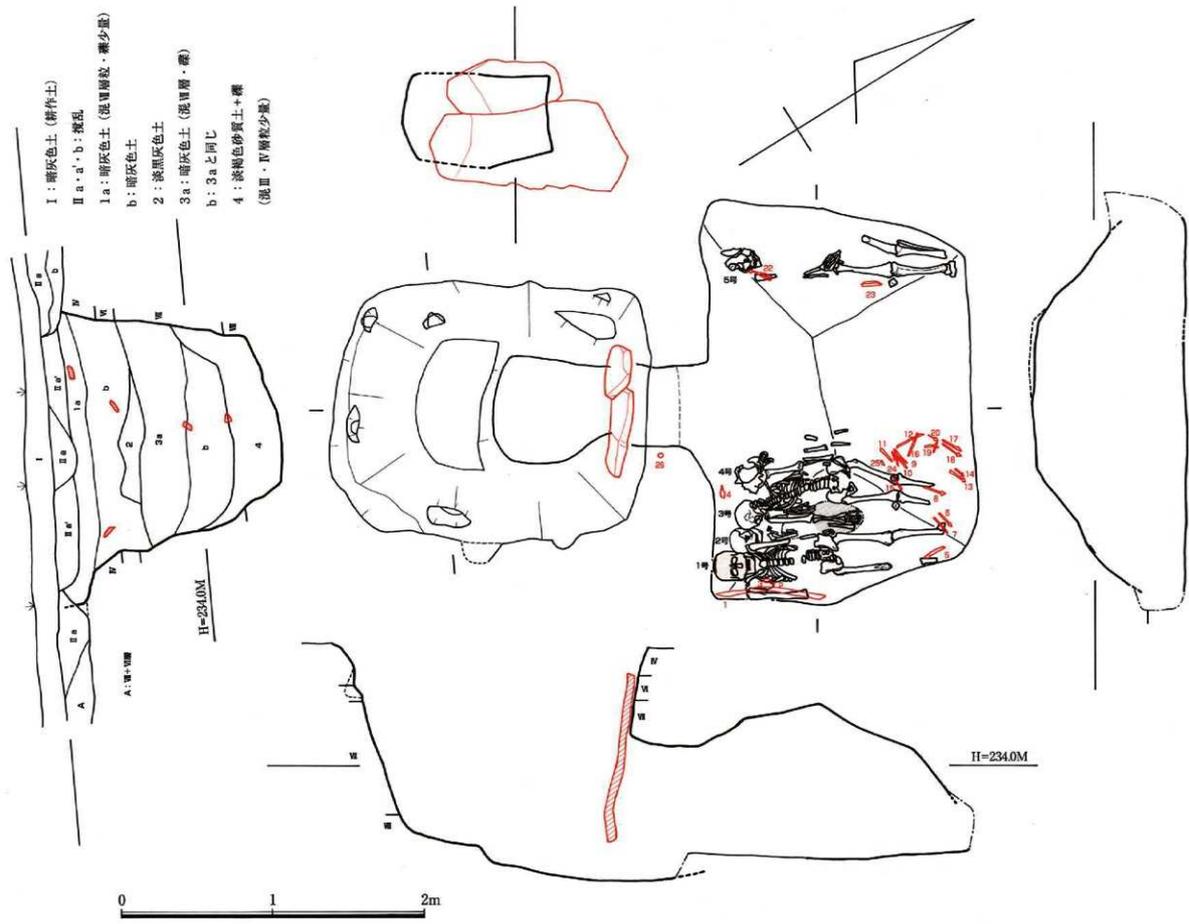
鉄刀の鋒と把端は欠損か、腐蝕消滅かは判定困難である。鍬子は長さ11.3cmで、幅6～8mm・厚さ3～4mmの鉄板材を幅2.7cm程のピンセット状に整形している。片方は銹彫れによって曲折し、中程と端部に皮および皮紐状の有機物が銹着している。上部には楕円形の環2個と皮紐状有機物2本が銹着している。鉄鎌は全て長頸鎌であり、出土状態は一括性が無いものの、鋒が南向きの5と北東向きの8は単独で、東向きの6と7、13と14、17と18は2本一組で手向けられ、9・10と24（骨鎌）11と25（骨鎌）も複数組が想定され、15と併に鋒は西を向く。

銅鈴は、直径20.0～21.5mmの球体に、外径10mm・内径4mm・厚さ2mmの半円形の鈕を有する。紋様は無く、径4～6mmの角礫が入っている。骨鎌23は両端が消失し、乾燥時に湾曲している。24と25は溶解が進み、形状も不明になっている。

表1 ST-113出土遺物計測表

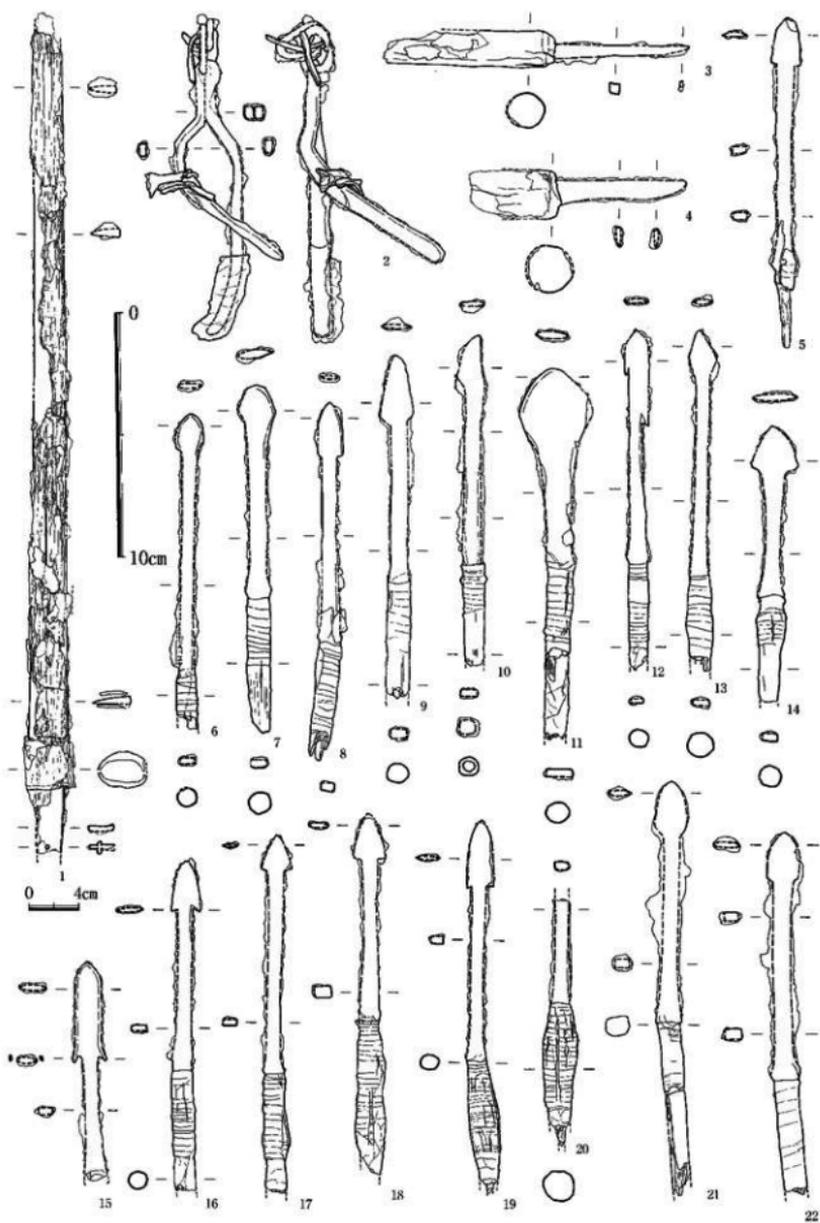
No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
1	大刀	(683)	(611)	(32)	
3	鎌	123	-	-	鹿角柄
4	刀子	87	52	9	鹿角柄
5	鉄鎌	135	20	11	
6	鉄鎌	125	15	11	
7	鉄鎌	(142)	10	15	
8	鉄鎌	147	21	10	
9	鉄鎌	140	24	13	
10	鉄鎌	(135)	17	11	
11	鉄鎌	(152)	20	(27)	
12	鉄鎌	(140)	39	10	
13	鉄鎌	135	11	12	

No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
14	鉄鎌	(113)	17	19	
15	鉄鎌	(89)	40	13	
16	鉄鎌	(135)	21	11	
17	鉄鎌	(146)	14	13	
18	鉄鎌	(147)	18	13	
19	鉄鎌	152	28	11	
20	鉄鎌	(100)	-	-	
21	鉄鎌	(169)	22	13	
22	鉄鎌	(149)	19	12	
23	骨鎌	(115)	-	10	
24	骨鎌	(23)	-	-	
25	骨鎌	(59)	-	-	

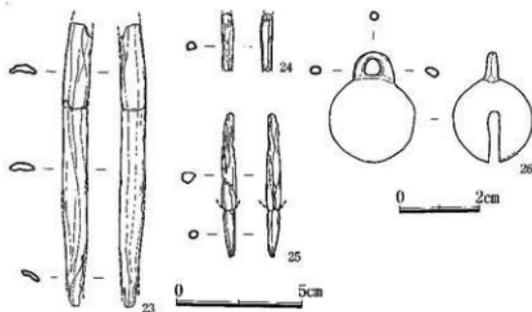


第4図 ST-113 遺構実測図

アミ目はハエ蛹殻



第5图 ST-113 出土遺物実測図(1)



第6図 ST-113 出土遺物実測図(2)

構面下40・61cmの2ヶ所と、西側の深さ37・66・89・108cmの4ヶ所、北側の深さ70・98cmの2ヶ所にステップが設けられている。

羨門は、大きな板石3枚と狭長な板石2枚・楕円磔2個で丁寧に塞がれていた。板石の下底は竪坑の下底から53cm上に位置している。羨門は板石除去と同時に崩落したが、高さは67cmであった。羨道の幅は40cm前後で、狭い。

玄室は平入り両楯の隅円台形タイプ(D字型)で南側が広く、幅2.48m・奥行き1.60~1.84mを測る。天井はかなり崩落していたが、寄棟の家型である。高さは96cmを測り、西壁中位に廂の痕跡(7cmの垂直面)がある。棟のラインは、幅6cm・深さ2~4cmの2段に深く刻まれている。壁の下半は砂礫が崩れ、傾壁の形状が不明である。主軸方位は、N1°Eである。

被葬者は5体で、右側に3体(1~3号)、左側に2体(4・5号)が南頭位で埋葬されている。1号人骨は頭蓋から上半身およびその周囲に赤色顔料が施された熟年の男性で、左側に大刀(69)と小刀(63)、鉈(62)、足先の鉄鎌25本(30~54)+1本(55)が副葬されている。2号人骨は10歳の小児で、全身で赤色顔料が検出されているが、遺存度が悪い。頭頂部の刀子1点(60)が伴うと推定される。3号人骨は熟年であるが、性別不明で、赤色顔料も使用されている。右頭部の刀子(61)のほか鉄剣(68)、鉄鎌3点(27~29)、刀子(59)、足先の鉄鎌2点(55・56)が副葬品と推定される。64は鉄剣の把部で、天井崩落の風圧で移動したと思われる。

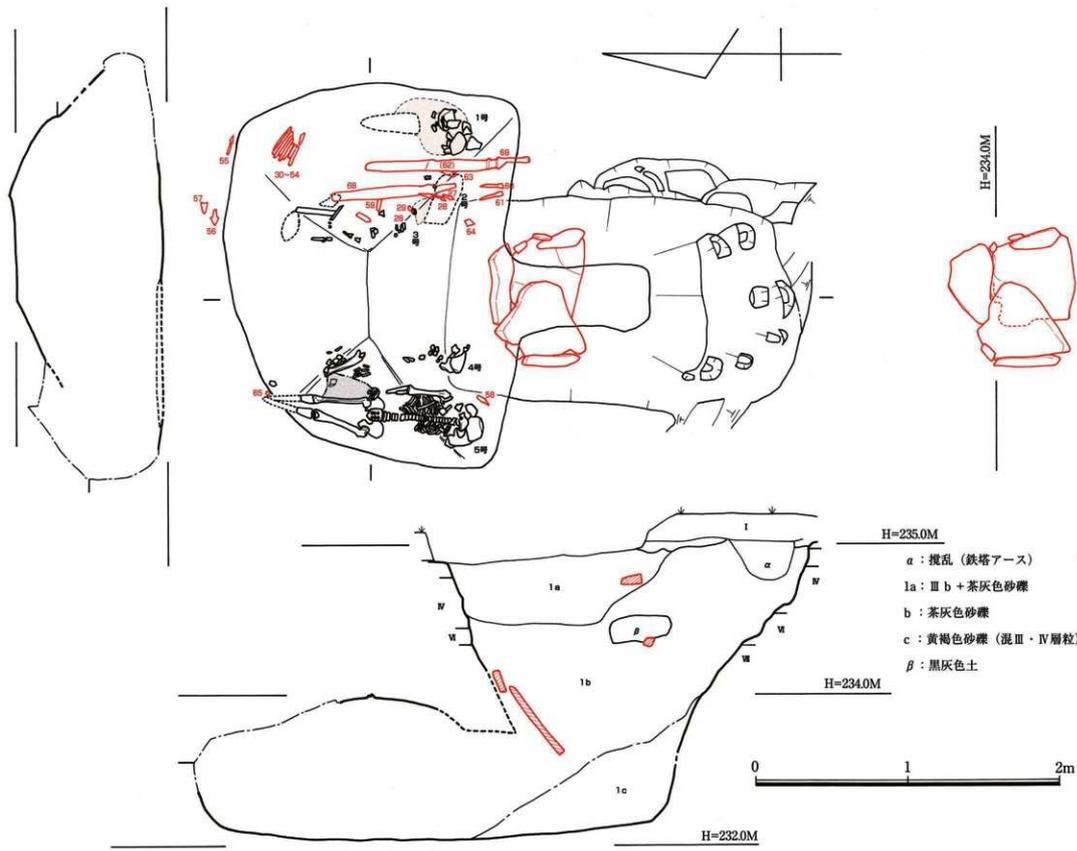
4号人骨は8~9歳の小児で、赤色顔料は塗布されていない。5号人骨は壮年の女性で、顔面と胸部・骨盤部・下腿に赤色顔料が塗布されている。頭頂部右側には刀子1点(58)が、頸部と仙骨付近で水晶製切子玉各1点(66・67)が出土している(取り上げ人骨分析中に検出)。右寛骨から4号人骨にかけて大量のハエの蛹殻と植物質が遺存しており、骨化するまでは閉塞されていなかったことを示す。なお、1・2号人骨は同時埋葬で、小刀は2号人骨に伴う可能性がある。

#### 出土遺物

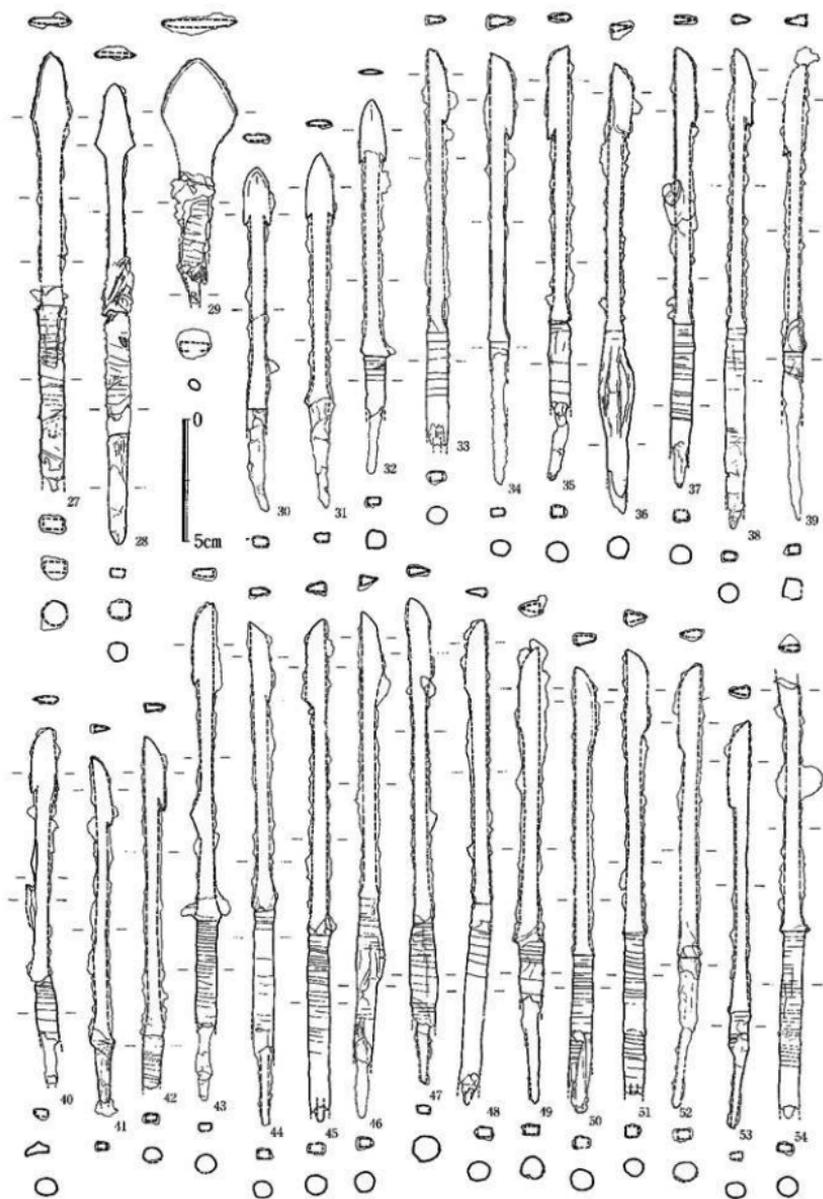
鉄鎌の東(30~54)は全て長頭鎌であり、両逆刺の長三角形3点と片刃22点が混じる。2本一組の27・28と、単独の55も長頭鎌で、無茎鎌(56)と圭頭鎌(29・57)は初葬ではない。短刀(63)

### 3. ST-114 (第7図)

旧鉄塔のアース埋設によって竪坑掘形の南側が若干削られていたが、影響は無い。竪坑は、長さ2.40m・幅1.24~1.40mの隅円長D字型を呈し、深さ1.83~1.92mを測る。底面は緩やかに下降し羨道からフラットになる。竪坑の南壁には、中軸ラインの造



第7図 ST-114 遺構実測図 アミ目はハエ籠殻

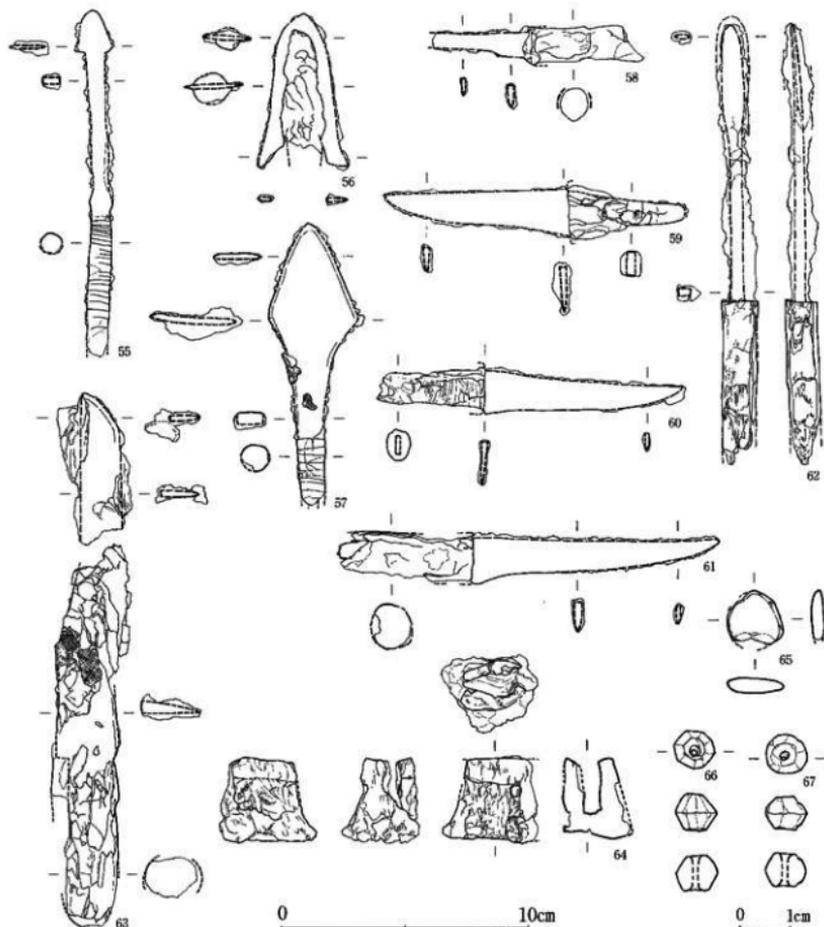


第8图 ST-114 出土遗物尖测图(1)

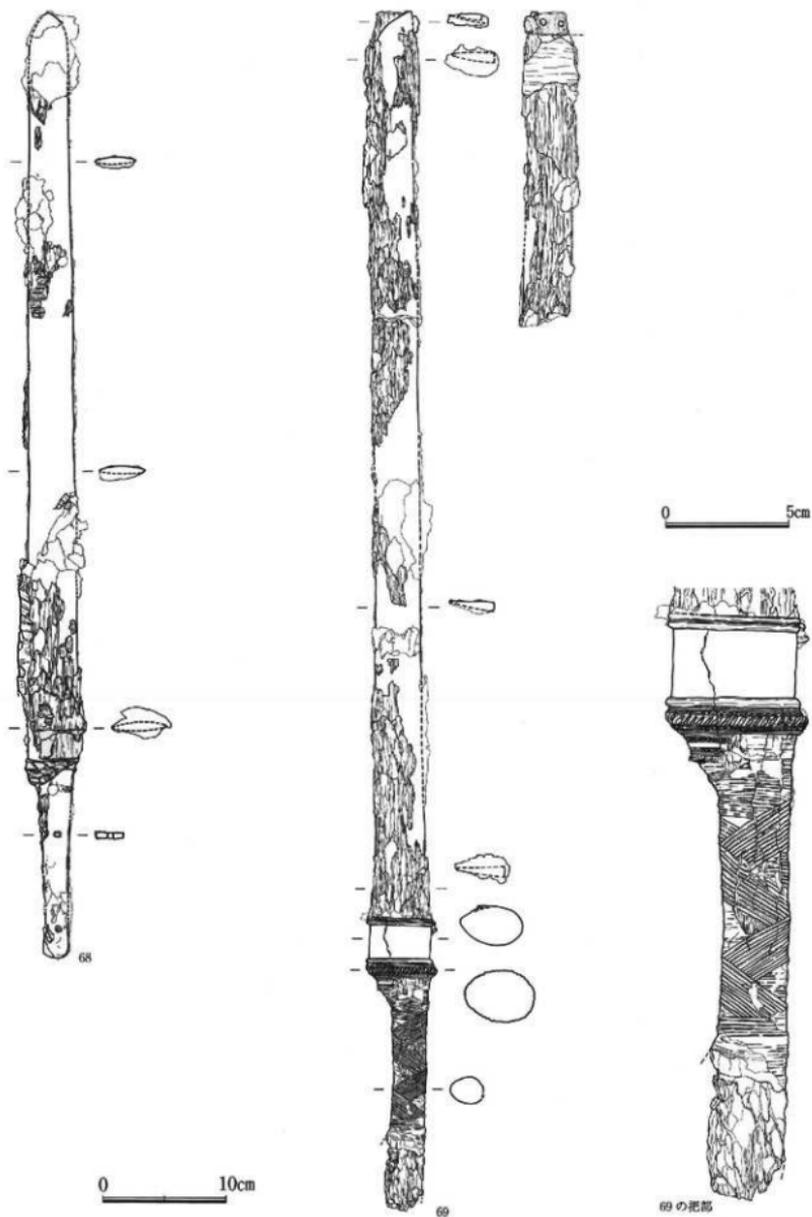
の鋒と、剣（68）の鹿角製把頭（64）は離れて出土したが、崩落土塊の影響とみられる。

69の大刀は、短刀と鉋の上に乗り、把頭は風化して木質が露出している。把間は幅16mmの緒で葛纏にして、銀製の鞘口金具と刻み目の入った木製の鐔を有し、刀身には龍と日輪・虎と口輪の銀象嵌が施され、鞘尻は鹿角装である（表紙・巻頭図版2・第41図）。

水晶製切子玉は市内遺跡では初例であるが、取り上げ人骨に混在して発見されたため、出土位置は正確に表示できない。仙骨部で出土した66は18面体で、最大径8mm・高さ7.5mmを測る。67は丸みのある14面体で、最大径8mm・高さ7mmを測る。朱玉（65）は、長径24mm・短径21mmの不整楕円形



第9図 ST-114 出土遺物実測図(2)



第10図 ST-114 出土遺物実測図(3)

表2 ST-114出土遺物計測表(1)

No	種類	法量(mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
27	鉄鏃	(181)	26	16	
28	鉄鏃	188	24	16	
29	鉄鏃	(100)	22	30	
30	鉄鏃	141	24	10	
31	鉄鏃	145	27	11	
32	鉄鏃	152	26	10	
33	鉄鏃	(162)	31	9	
34	鉄鏃	176	36	9	
35	鉄鏃	178	39	8	
36	鉄鏃	(184)	31	9	
37	鉄鏃	179	31	8	
38	鉄鏃	196	32	8	
39	鉄鏃	194	33	7	
40	鉄鏃	(146)	27	10	
41	鉄鏃	147	28	7	
42	鉄鏃	(144)	31	8	
43	鉄鏃	203	33	8	
44	鉄鏃	206	27	8	
45	鉄鏃	205	34	8	
46	鉄鏃	207	22	8	
47	鉄鏃	199	34	9	
48	鉄鏃	198	34	9	
49	鉄鏃	189	32	9	

No	種類	法量(mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
50	鉄鏃	181	31	8	
51	鉄鏃	181	33	9	
52	鉄鏃	180	23	8	
53	鉄鏃	165	35	8	
54	鉄鏃	(180)	-	-	
55	鉄鏃	141	16	14	
56	鉄鏃	(65)	65	36	
57	鉄鏃	(115)	40	35	
58	刀子	(85)	(38)	(10)	鹿角柄
59	刀子	121	79	19	鹿角柄
60	刀子	(124)	79	17	鹿角柄
61	刀子	(154)	99	19	鹿角柄
62	鉈	180	45	10	鹿角柄
63	小刀	(155)+(60)	(82)+(57)	(16)	
68	剣	744	586	44	
69	大刀	982	780	36	象眼

表3 ST-114出土遺物計測表(2)

No	種類	法量(mm)				材質
		外径	内径	幅	厚さ	
66	切子玉	8	1	-	4	水晶
67	切子玉	8	1	-	4	水晶

を呈し、厚さ5～6mmに整形され、淡赤紫色を呈する。

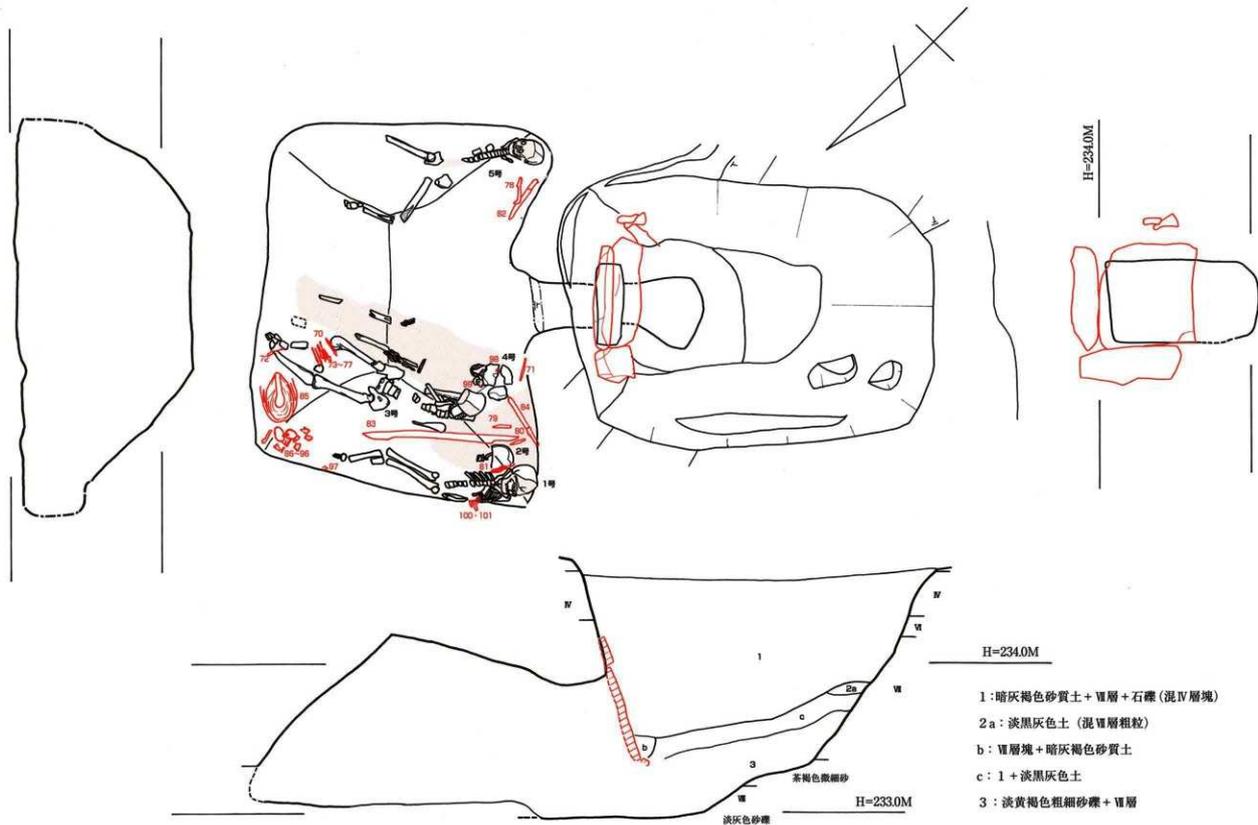
#### 4. ST-115 (第11図)

竪坑は、長さ2.0～2.46m・幅1.54～1.98mの隅円台形を呈し、北東側の斜めの短辺に羨門を設けている。深さは1.3mから底面中程で下降し、1.6mになる。西壁の遺構面下28cmには、長さ1.12mのテラスを、南西隅には深さ57cmと90cmの位置にステップが設けられている。

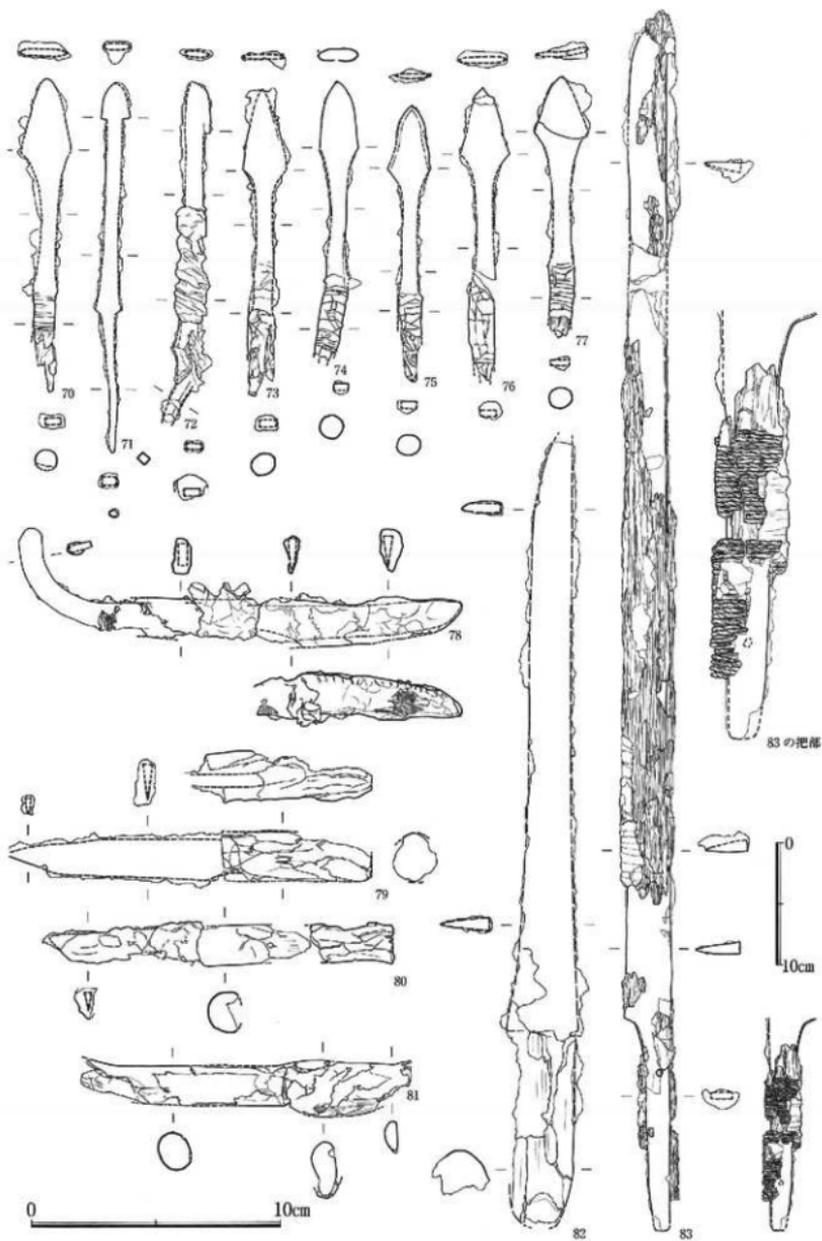
羨門は、高さ90～98cm・幅50～56cmを測り、板石3枚で閉塞される。板石下底は竪坑底面から40cm上にあるが、追葬坑は確認されない。羨道の天井は長さ30cm程、底面は長さ70cm程、高さ89～94cmを測るが、閉塞時では、高さ60cm程しかない。

玄室は、半入り両掘の隅円台形タイプで、南西側が広く幅2.20～2.54m・奥行き1.60～1.88m・高さ1.13mの寄棟の家型を呈する。廂相当部以下は砂礫層が崩れ、形状が不明である。底面中央付近から南側は、貼り床的に水平に整地されている。主軸方位は、N46°Eである。

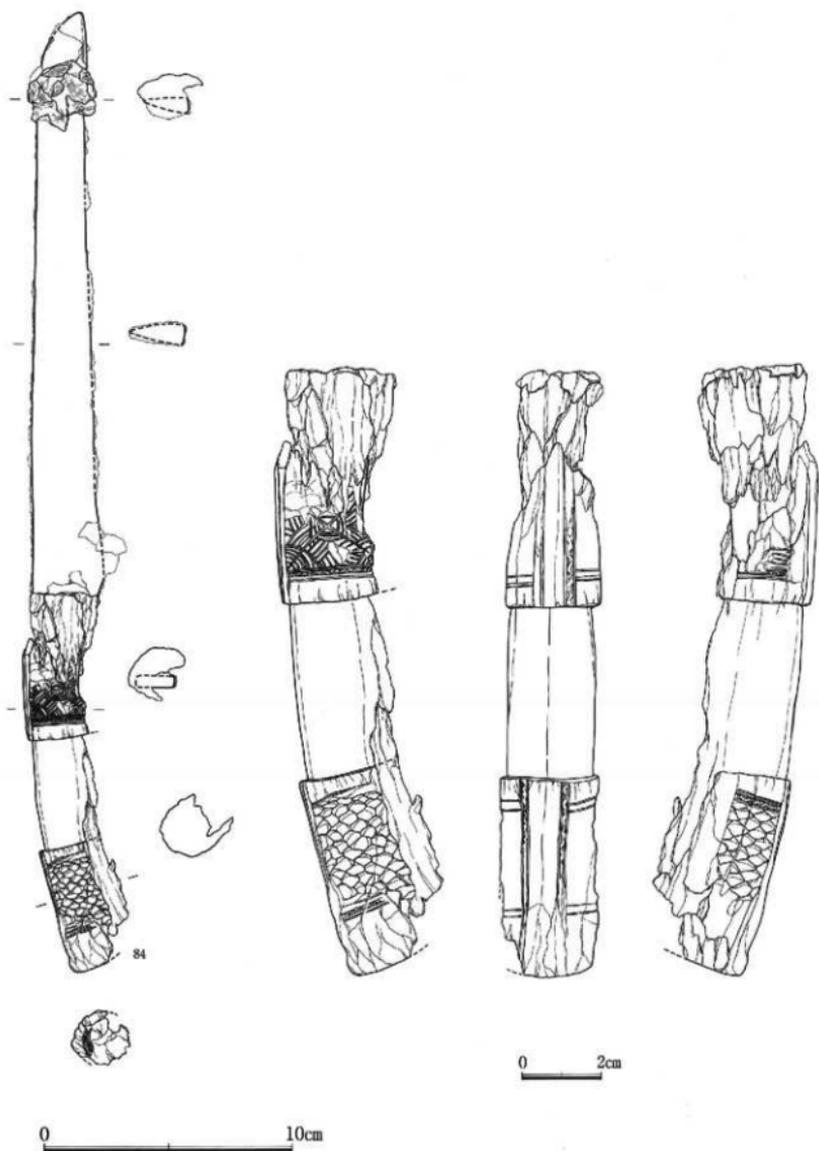
被葬者は5体で、右側に1体(5号)、左側に4体(1～4号)が南頭頂で埋葬されている。1号人骨は壮年の女性で、顔面～上半身に赤色顔料が塗布されている。左腕にイモガイ製貝鋼2個(100・101)を着け、頭頂下に刀子(81)を副葬されている。2号人骨は6歳の小児で、上半身が遺存する。3号人骨は熟年の男性で、全身に赤色顔料が塗布されている。大刀(83)と小刀(84)、右膝部の鉄鏃6本(70・73～77)が副葬されている。下股左には小札銀留銜角付冑(84)と轡(86)・辻金具3点等(87～96)や鉸具(97)がある。配置的には、大刀と小刀は2号人骨に、冑と轡・辻金具は1号人骨に伴う可能性もあるが、年齢的に3号人骨の所有と考えるのが妥当と思われる。



第11圖 ST-115 遺構実測図



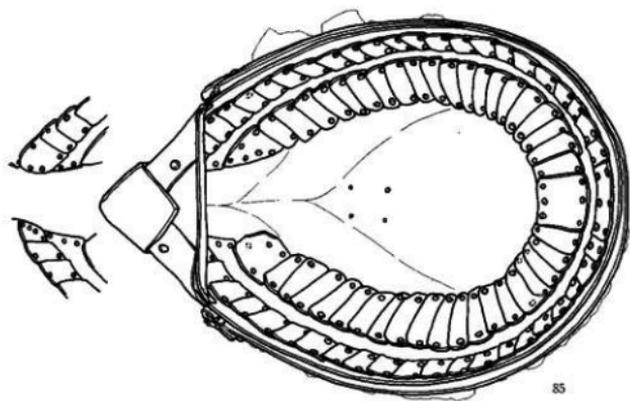
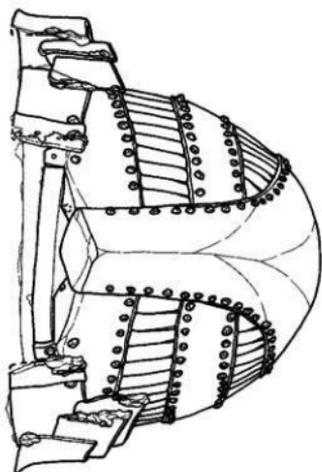
第12図 ST-115 出土遺物実測図(1)



第13图 ST-115 出土遺物実測図(2)

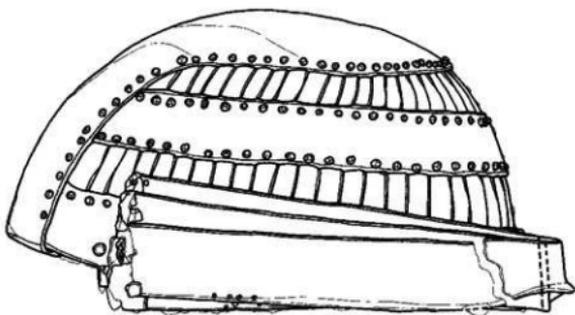
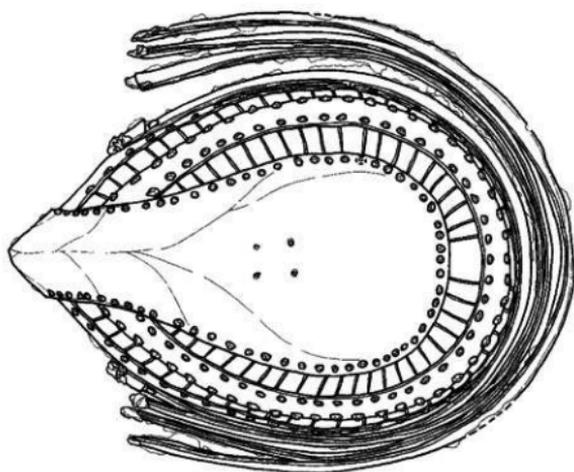
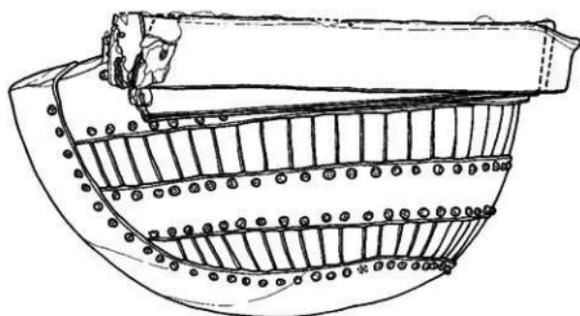


正面



内面

第14図 ST-115 出土遺物実測図(3)-1

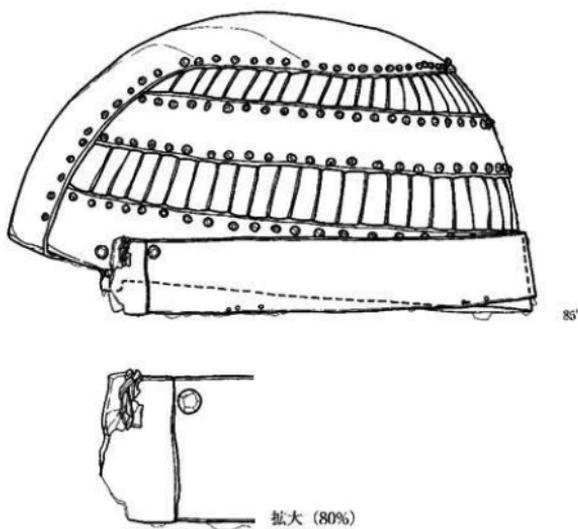
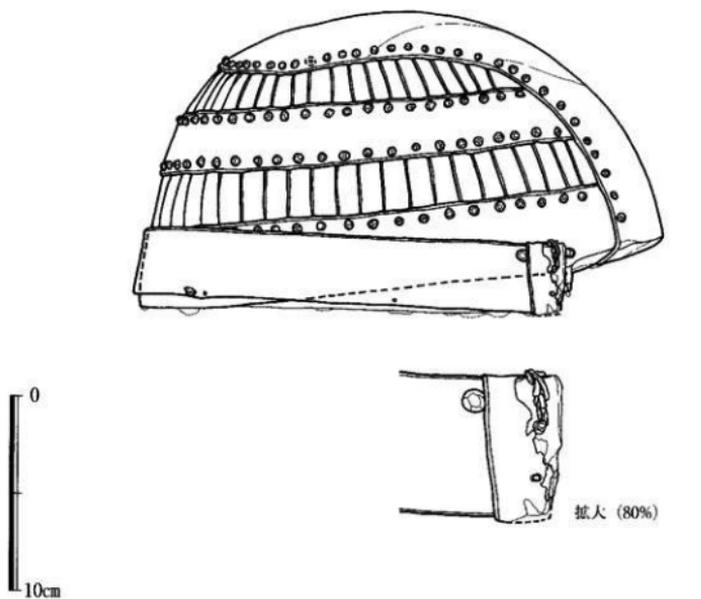


4段目の綴



85

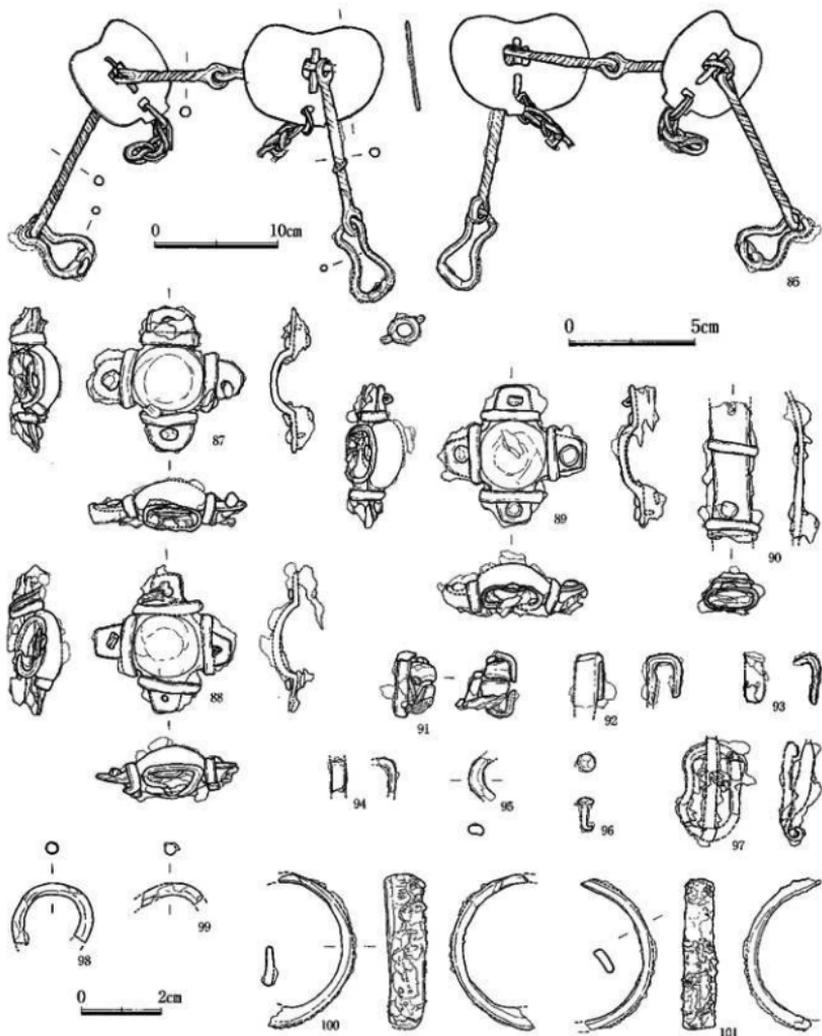
第15図 ST-115 出土遺物実測図(3)-2



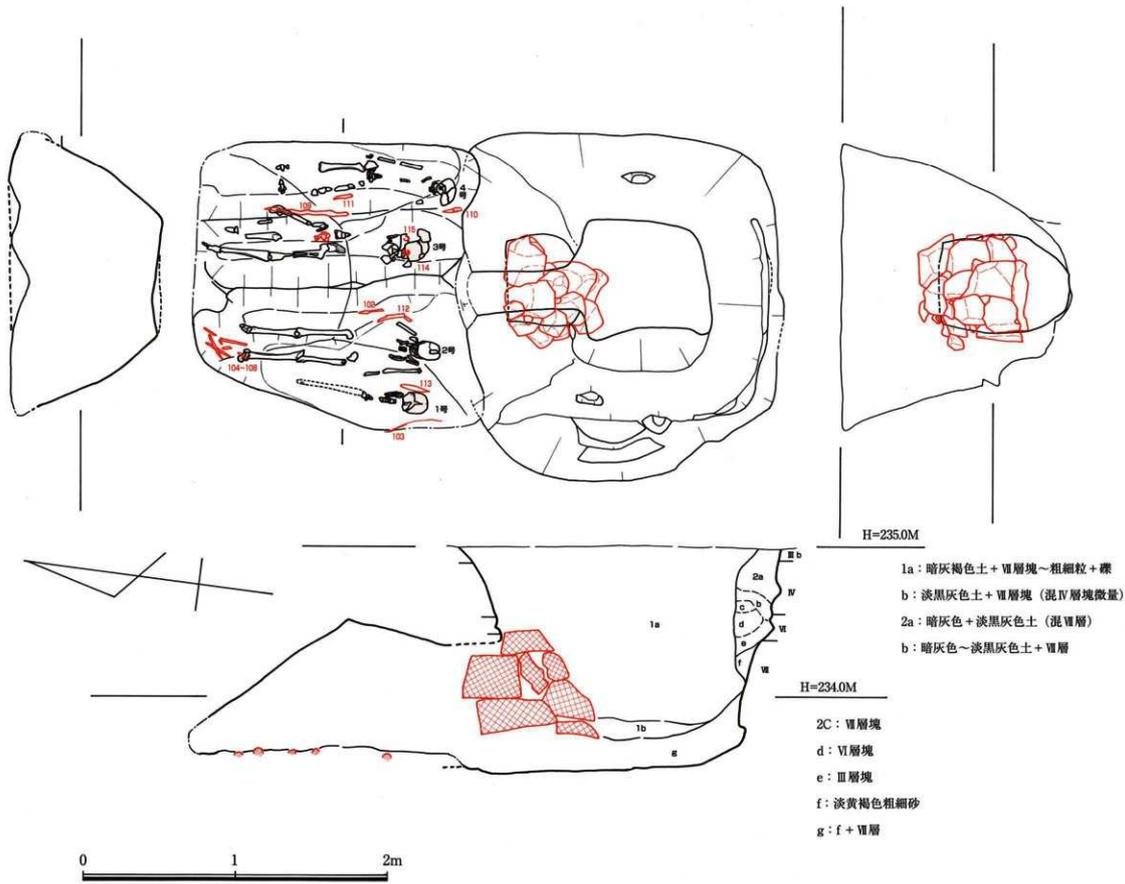
第16図 ST-115 出土遺物実測図(3)-3 鑄着した縦1段目と覆輪の紐

4号人骨は15~16歳の若年で、錫製の耳環(98・99)を着装し、遺存状態が悪い。埋葬範囲(幅30~34cm・長さ1.9m)全体に赤色顔料が塗布されており、頭頂部に鉄鏝(71)が副葬される。

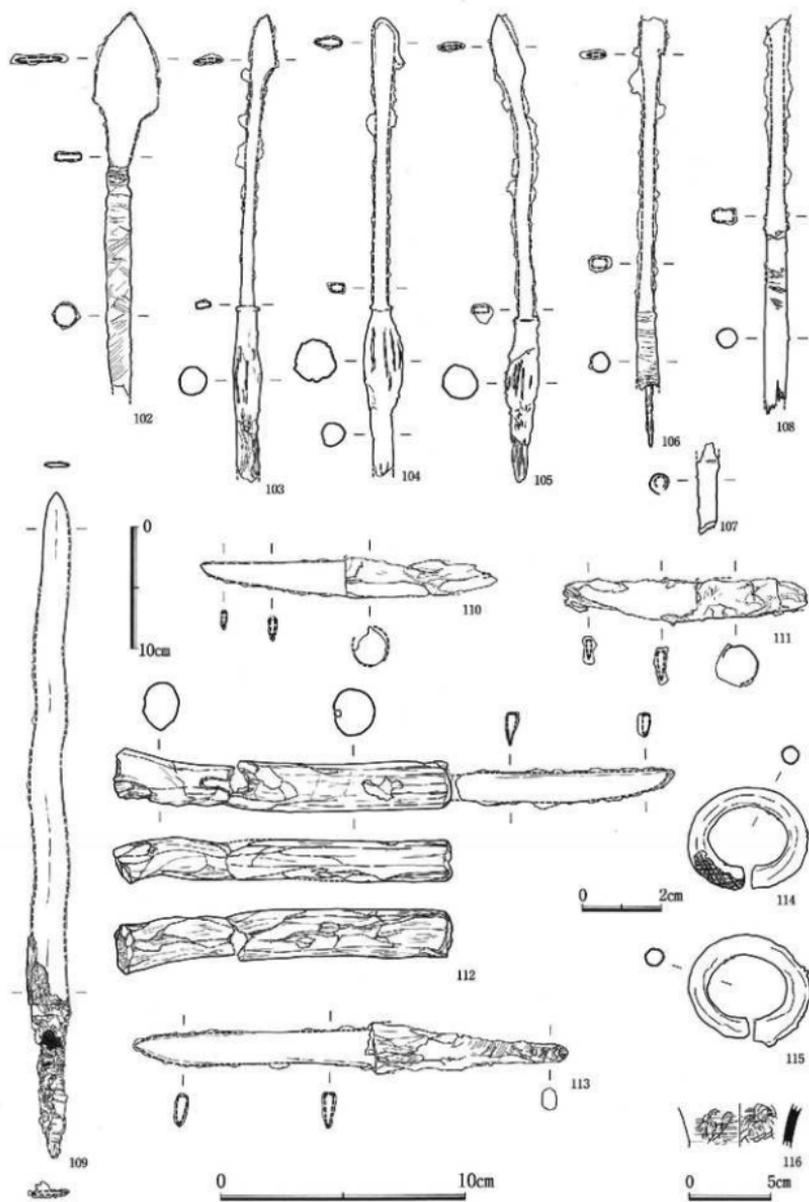
5号人骨は熟年の女性で、顔面~上半身に赤色顔料が塗布されている。頭部左側に小刀(82)と刀子(78)が副葬されている。



第17図 ST-115 出土遺物実測図(4)



第18圖 ST-117 遺構實測圖



第19图 ST-117 出土遺物実測図

## 出土遺物

小刀と併に出土した刀子(78)には皮製鞘が遺存し、縫目も見える。鉄鏃は少なく、唯一の長頸鏃は、最終埋葬と推定される4号人骨に伴う。小刀(84)の鹿角把部には直弧文と鱗状の彫刻があり、朱の痕跡がある。

楕円形鏡板付轡(86)の銜と引手には振りがある。辻金具と付属品は全て鉄製で、有襷物(皮)が鑄着している。鋭具(97)は、20cm離れて出土している。

冑は、帯金2枚、小札2段を伏板で結合して鋲留され、鏃4枚が伴う。1段目の小札は42枚で、2段目は46枚である。鏃には、覆輪と装着用革紐が遺存する。鏃を除く長さは26.3cm・幅18.3cm・高さ15.0cmを測る。轡の上には漆膜が散在し、辻金具と共に木箱に入っていたことが推定される。

表4 ST-115 出土遺物計測表(1)

No	種類	法京(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
70	鉄鏃	128	30	20	
71	鉄鏃	160	15	12	
72	鉄鏃 (139)	21	10		
73	鉄鏃	125	33	17	
74	鉄鏃	(114)	22	16	
75	鉄鏃	112	25	17	
76	鉄鏃	(118)	27	20	
77	鉄鏃	(106)	22	22	
78	刀子	178	(65)	13	革製鞘
79	刀子	148	88	16	鹿角柄
80	刀子	137	62	15	鹿角柄

No	種類	法京(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
81	刀子	132	80	16	鹿角柄
82	小刀	319	245	28	
83	人刀	(902)	(802)	(37)	
84	小刀	390	233	24	鹿角柄

表5 ST-115出土遺物計測表(2)

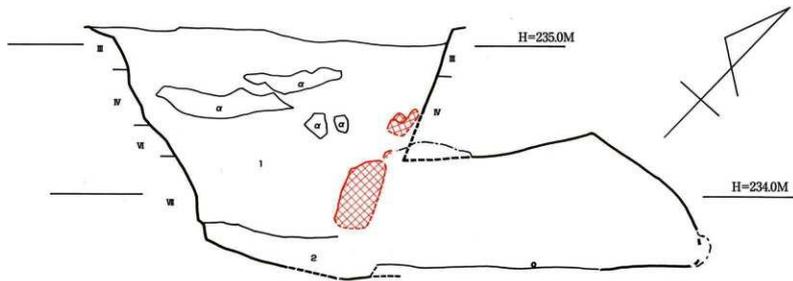
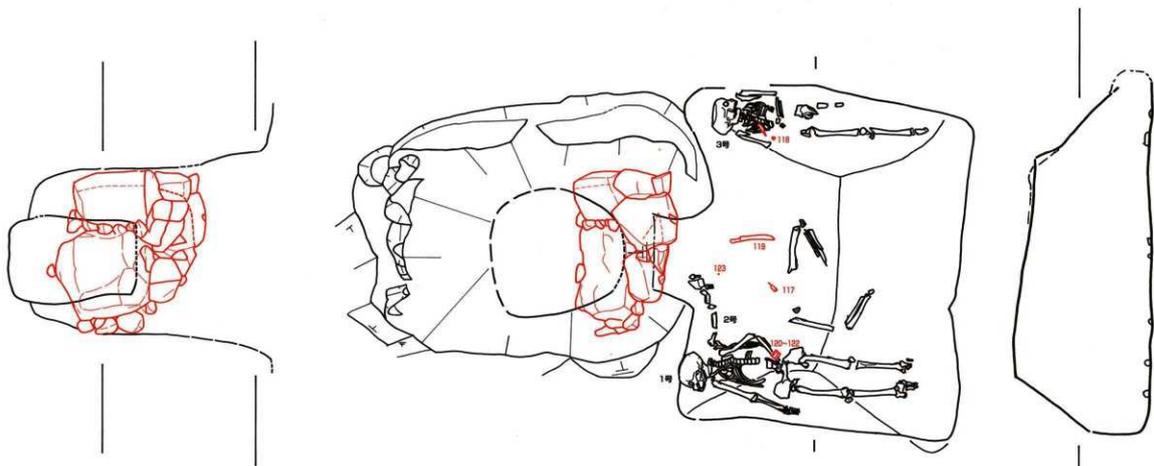
No	種類	法京(mm)				材質
		外径	内径	幅	厚さ	
98	耳環	19×22	13×17	-	3	銅
99	耳環	-	-	-	2~3	鍍
100	貝鏢	62	53	14~15	3	イモガイ
101	貝鏢	65	54	11~13	3	イモガイ

## 5. ST-117 (第18回)

114号墓の5m南に位置する。竪坑は、東西2.34m・南北2.10mのD字型を呈し、深さ1.44~1.50mを測る。西壁中央には、検出面下16・36・88cmのレベルに、南壁には深さ56~59cmレベルに長く、東壁中央には、深さ90cmのレベルにステップが掘り込まれている。断面の土層では、追葬が確認できる。羨門は北側に付き、大小16個のアカホヤ塊で密閉されている。覆土から須恵器片(116)が出土している。

羨門の規模は、幅24~55cm・最大幅65cm・高さ86cmを測る。閉塞材を除去すると、湯気が吹き出てきた。玄室内は湿度100%の飽和状態である。

玄室は、平入り両裾の不整隅円形タイプで、南側が広い。幅1.50~1.88m・奥行き1.74~1.80mを測り、廂は無い。壁面下部は砂礫が崩落し、形状不明である。主軸方位は、N8°Wである。屍床は長軸方向に、高さ8~14cm・幅40~60cmで断面長三角形に砂礫混土を盛って仕切り、右側に2体(3・4号)、左側に2体(1・2号)が南頭位で埋葬されている。1・2号人骨の上半身部分には仕切りが無く、下半部は、1号人骨が若干低い。1号人骨は遺存の悪い8歳の小児で、顔面~胸椎にかけて赤色顔料が塗布されている。左側頭部に矢柄の痕跡を有する鉄鏃(103)が、右側頭部に

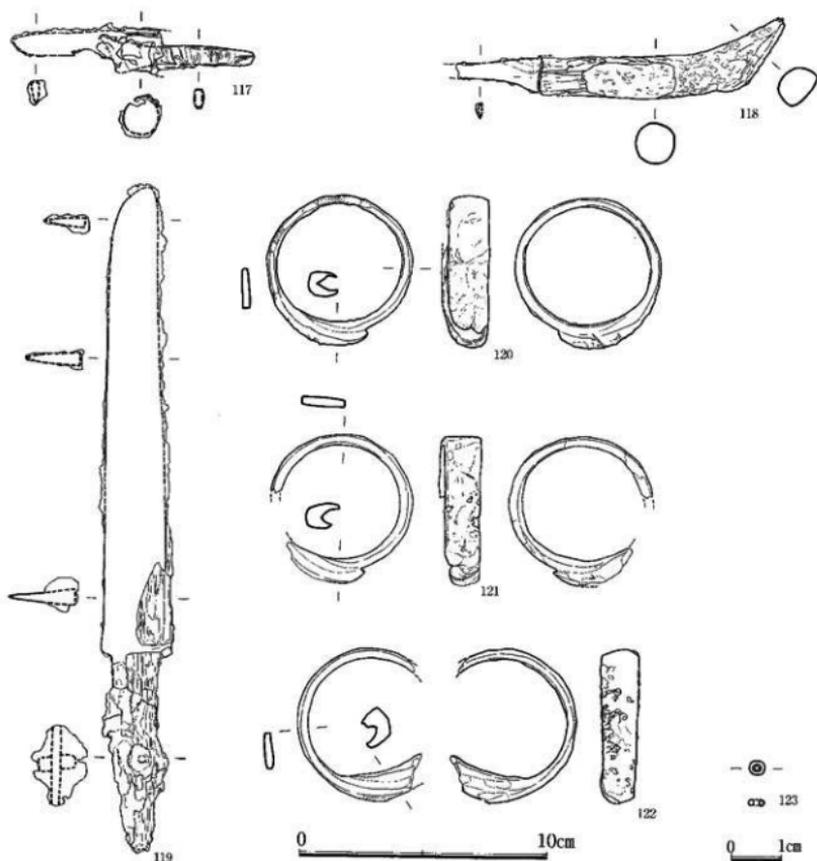


0 1 2m

- 1: VI層+灰褐色土 (混IV層塊~粗細粒微量)
- 2: VII層+粗細砂 (混III層粒微量)
- α: III層塊

第20図 ST-118 遺構実測図

刀子 (113) が副葬されている。2号人骨は10~11歳の小児で、胸部~腰部までの遺存が悪い。右腕部に鉄鏃 (102) と刀子 (112) が、足先に鉄鏃4本 (104~108) が副葬されている。3号人骨は壮年の男性で、頭部に赤色顔料が塗布されている。耳環 (114・115) を着装し、右側に蛇行剣 (109) と刀子 (111) が副葬されている。股間には、白色化した球形の糞石5個が塊になっていた。4号人骨は8~9歳の小児で、遺存状態が悪い。顔面には、微量の赤色顔料が認められ、左側頭部に刀子 (110) が副葬されている。蛇行剣と刀子の帰属も可能性があるが、成人男性である3号人骨のほうが可能性は高いと思われる。埋葬順は、4号→3号→1号→2号と思われる。



第21図 ST-118 出土遺物実測図

## 出土遺物

3号人骨に伴う鉄鏃(102)は三角形鏃で、他の5本は長頭鏃である。

表6 ST-117出土遺物計測表(1)

No	種類	法量(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
102	鉄鏃	(152)	37	25	
103	鉄鏃	170	22	10	
104	鉄鏃	187	18	11	
105	鉄鏃	190	25	10	
106	鉄鏃	(175)	(15)	10	107と同一個体
107	鉄鏃	(35)	-	-	106と同一個体
108	鉄鏃	(161)	-	-	
109	鉋行刺	542	418	21	
110	刀子	122	59	8	鹿角柄

No	種類	法量(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
111	刀子	99	54	15	鹿角柄
112	刀子	230	(89)	12	鹿角柄
113	刀子	178	98	12	鹿角柄

表7 ST-117出土遺物計測表(2)

No	種類	法量(mm)				材質
		外径	内径	幅	厚さ	
114	耳環	26×30	16×20	-	4	銅
115	耳環	27×30	17×20	-	4	銅

## 6. ST-118 (第20図)

長さと同幅が4.6m程のⅦ・Ⅷ層混じり土が広がる北東部に堅坑を検出した。堅坑は、長さ2.10～2.30m・幅1.50～1.80mの不整隅円台形を呈し、北東側に羨門が付く。深さは1.42～1.68mを測り、羨門に向かって下降する。南西壁上位～中位には、ステップが掘られている。

羨門は、高さ85cm・幅40～48cm・最大幅60cmを測り、最大60×70×24cmのアカホヤ塊の他、人頭大～2個分の塊4個と拳大の塊15個で密封されている。追葬坑は無い。羨道の天井は、水平に近い。

玄室は平入りの隅円長方形を呈し、幅2.18～2.27m・奥行き1.73～1.83mを測る寄棟の家型である。左側壁～奥壁下部は砂礫が崩落し、形状不明である。廂は無い。主軸方位は、N52°Eである。

被葬者は3体で、右側に2体(1・2号)、左側に1体(3号)が南西頭位で埋葬されている。1号人骨は熟年の女性で、主として顔面から上半身にかけて赤色顔料が塗布されている。左腕には、イモガイ製貝銅を3点(120～122)着装している。2号人骨は壮年で、遺存状態が悪い。左腕付近に短刀(119)が、右腰付近に刀子(117)が副葬されている。3号人骨は15～16歳の若年で、左足以外は遺存する。顔面には赤色顔料が塗布され、右胸に刀子(118)が置かれている。なお、取り上げ人骨に混じってガラス小玉1点が出土している。

## 出土遺物

玄室は大型であるが、副葬品は僅かである。刀子(118)の刀は小さく細長く擦り減っている。117の基部は、錆彫れによって軸がズレている。

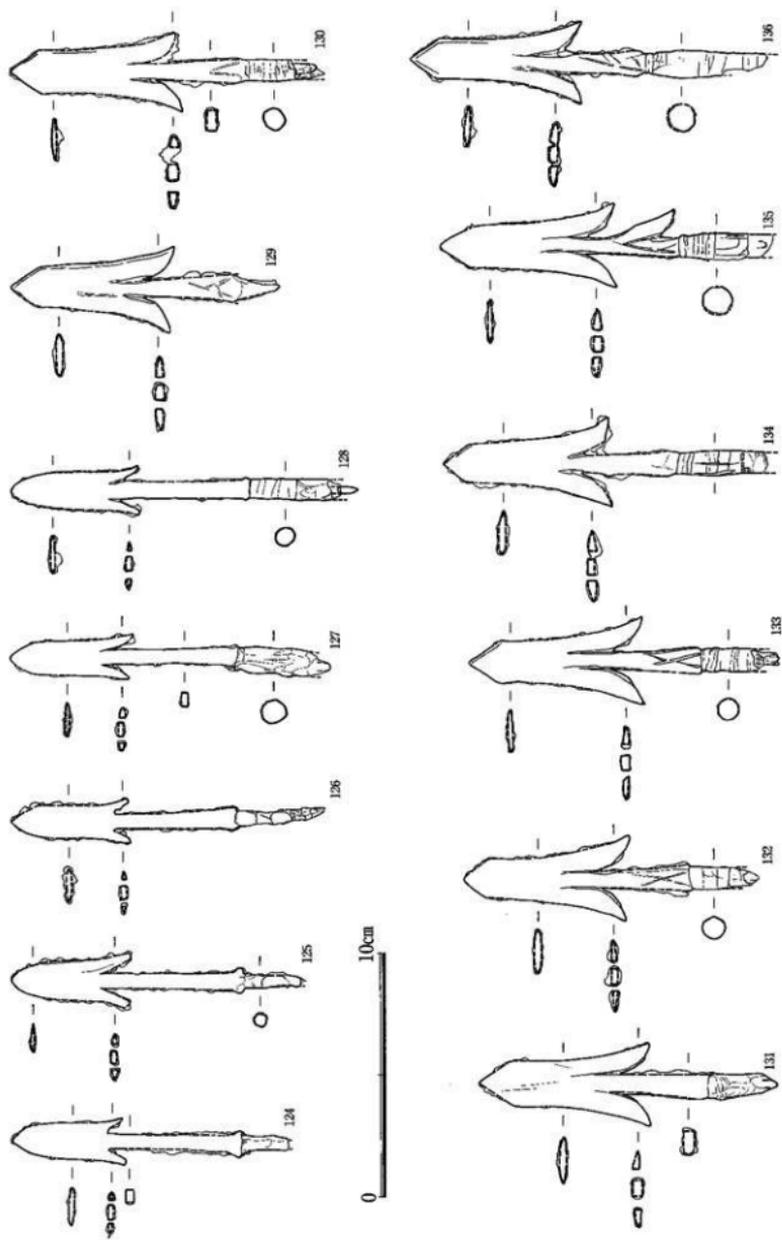
表8 ST-118出土遺物計測表(1)

No	種類	法量(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
117	刀子	33	45	7	
118	刀子	(130)	(32)	(14)	
119	小刀	271	193	25	

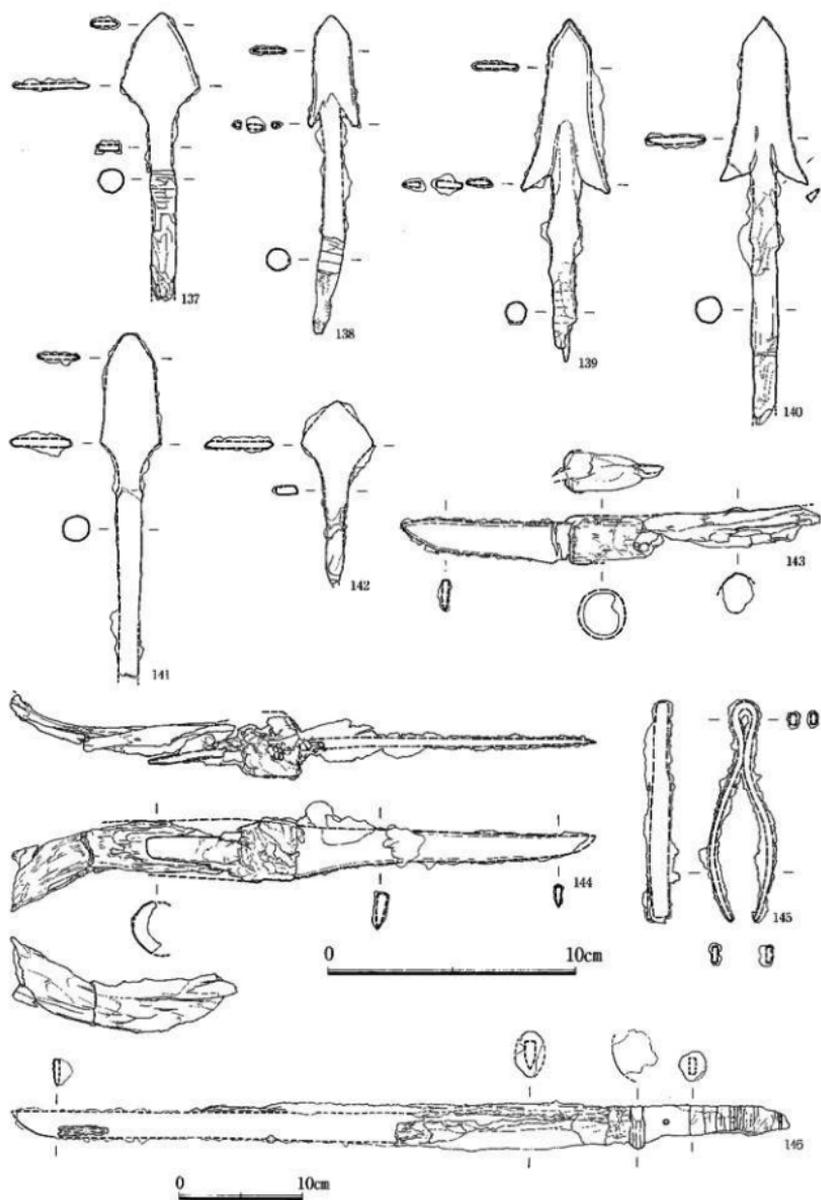
表9 ST-118出土遺物計測表(2)

No	種類	法量(mm)				材質・色調
		外径	内径	幅	厚さ	
120	貝銅	59	51	16～18	2～3	イモガイ
121	貝銅	58	48	14～15	3	イモガイ
122	貝銅	62	50	13～15	2～3	イモガイ
123	ガラス小玉	3	1	-	-	濃青色

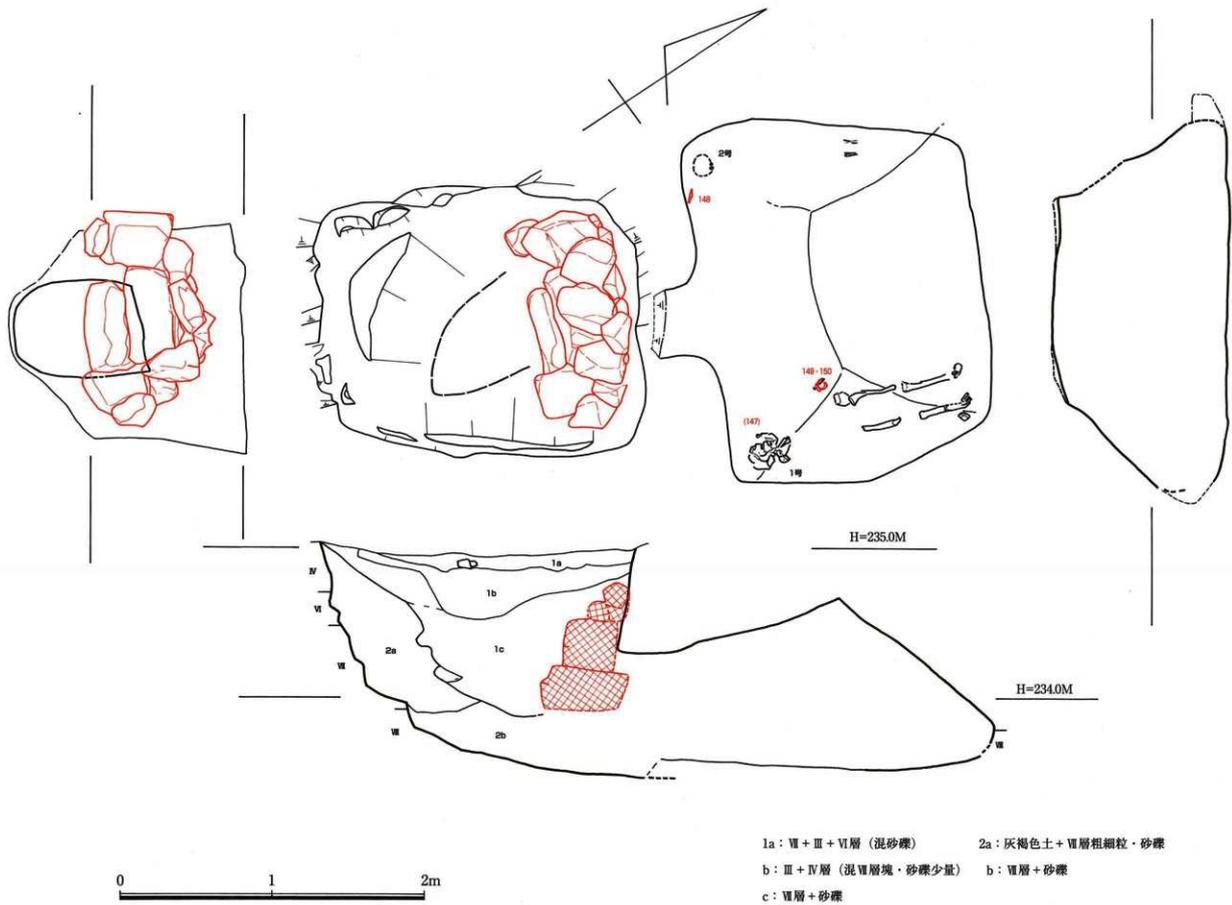




第23图 ST-119 出土器物实图(1)



第24图 ST-119 出土遗物实测图(2)



第25圖 ST-120 遺構実測図

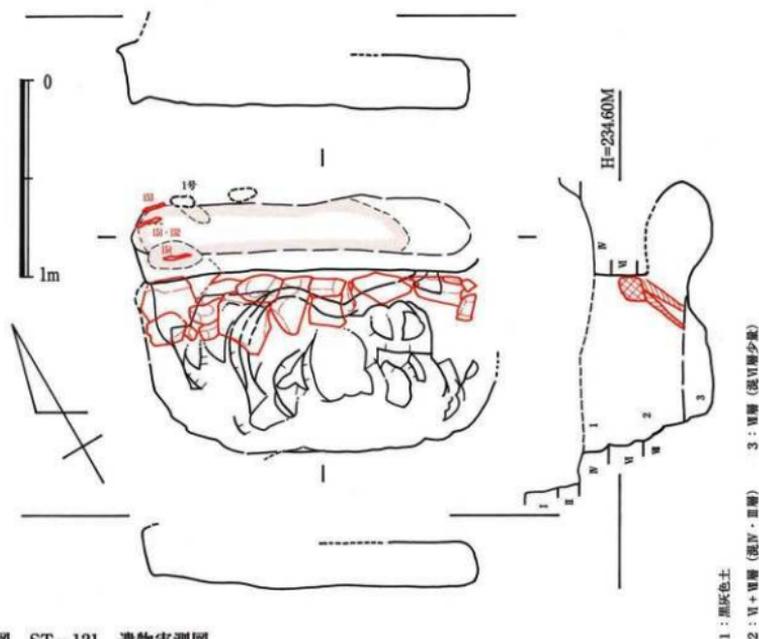
## 7. ST-119 (第22図)

118号墓の2.6m南東に位置し、長さ4m・幅3mのⅦ・Ⅷ層混じり土が広がっていた。竪坑は長さ2.40~2.80m・幅1.63~2.14mの隅円台形を呈し、深さ1.20~1.80mの2段掘りである。断面では追葬坑が認められる。南西隅の検出面下35cmと53cmのレベルおよび南東隅の深さ30・35・38cmのレベルにはステップが掘られている。

羨門は、幅32~64cm・最大幅73cmを測り、板石1枚で閉塞される。竪坑検出時には閉塞部が陥没し、閉塞石が動いてしまったことから、半截時に除去した。

玄室は、平入り両裾の隅円長方形タイプで、寄棟の家型である。幅は1.94~2.10m・奥行き1.77~1.87m・高さ0.97~1.05mを測る。壁面下部は砂礫が崩落し、形状不明である。廂の有無も不明である。寄棟タイプの中では傾斜が緩く、棟が低い。主軸方位は、N56°Eである。

被葬者は4体で、右側に2体(3a・b号)、左側に2体(1・2号)が南西頭位で埋葬されている。1号人骨は壮年の女性で、大腿骨までの右側の部位が遺存し、赤色顔料が塗布されている。左側に大刀(146)と鐮子(145)が、足先に鉄鏃13本(124~136)が副葬されている。2号人骨は、8~9歳の小児で、遺存度が悪い。腰椎仙骨にかけてはハエの蛹殻が検出され、頭部~左前腕上には白色化した植物質(矢柄か)が載っていた。右足先には、鉄鏃4本(137~140)がある。3a号は8~9歳の小児で、上半身に僅かに赤色顔料が塗布されている。3b号は2~3歳の幼児で、上



第26図 ST-121 遺物実測図

へ頭のみ遺存していた。頭部右には刀子(143)が副葬されている。左足先と推定される位置には鉄鏃2本(141・142)がある。

中位に位置する刀子(144)は帰属不明であり、141と142も含めて、もう1体埋葬されていた可能性もある。最終的には、2号人骨の骨化後に追葬坑が閉塞されている。

#### 出土遺物

鉄鏃に長頸鏃は含まず、脇袂柳葉鏃には、幅広で大型・頸が短いタイプ(129~136・139・140)と細身に頸がやや長いタイプ(124~128・138)があり、頸部にX字状の刻印を有するもの(132・133)もある。鏃子には、ハエの蛹殻が5個以上付着している。

表10 ST-119出土遺物計測表

No	種類	法量(mm) ( )は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
124	鉄鏃	(111)	44	12~19	
125	鉄鏃	(117)	48	14~22	
126	鉄鏃	126	47	13~18	
127	鉄鏃	127	47	13~18	
128	鉄鏃	140	52	15~20	
129	鉄鏃	108	59	17~34	
130	鉄鏃	122	69	18~33	
131	鉄鏃	120	69	19~34	
132	鉄鏃	118	65	16~35	刷印
133	鉄鏃	125	70	18~36	刷印
134	鉄鏃	(130)	67	16~36	
135	鉄鏃	131	71	16~34	

No	種類	法量(mm) ( )は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
136	鉄鏃	(143)	70	17~34	
137	鉄鏃	111	30	31	
138	鉄鏃	130	46	14~20	
139	鉄鏃	140	70	17~36	
140	鉄鏃	(167)	78	17~35	
141	鉄鏃	(141)	45	19~24	
142	鉄鏃	(75)	18	28	
143	刀子	168	60	16	鹿角柄
144	刀子	180	119	21	鹿角柄、ハエ蛹殻
145	鏃子	90	-	-	ハエ蛹殻
146	刀	612	495	22	

#### 8. ST-120 (第25図)

調査区の南縁中央部に位置する。竪坑は、長さ2.02~2.12m・幅1.40~1.82mの隅円台形を呈し、20cm程の削失が推定される。深さは、検出面から1.15~1.52mを測り、羨門部に向かって下降する。南西~南東部の深さ46・80・106cmレベルには、ステップが掘り込まれている。

羨門は、高さ76~82cm・幅34~58cm・最大幅65cmで、IV~VII層の塊15個で閉塞されている。断面では、追葬坑が確認された。羨道は長さ38cmで、追葬時には高さ70cmになっている。

玄室は、平入り両楯の隅円台形タイプで、幅1.80~2.43m、奥行き1.84m、高さ1.12~1.16mを測る奇棟の家型である。壁面下部は砂礫が崩落し、形状が不明瞭である。主軸方位は、N27Eである。天井には縦横に亀裂が走り、崩落寸前の状態であった。

被葬者は南頭位の2体で、右側の1号人骨は熟年の女性で、頭部以外の上半身が遺存しない。頭部には赤色顔料が塗布され、頭部左側で刀子(147)が副葬され(清掃時に動いたため、正確な位置が不明)、左腕部にはイモガイ製貝鋼2個(149・150)が着装されている。左側の2号人骨は7~9歳の小児で、頭骨には赤色顔料が塗布され、頭頂右側に刀子(148)が副葬されている。

人骨の遺存度からみると初葬は2号と思われるが、右側奥の初葬が規範であり、小児の骨は遺存しにくいことから、1号→2号の順に埋葬されたと推定する。

表11 ST-120出土遺物計測表(1)

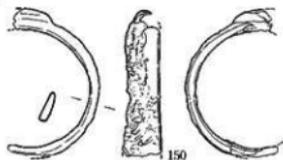
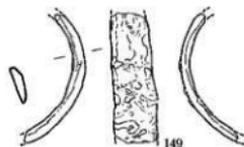
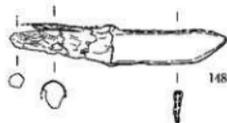
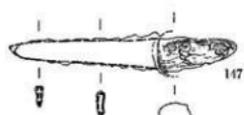
No	種類	法量(mm)			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
147	刀子	90	58	11	
148	刀子	88	47	12	

表12 ST-120出土遺物計測表(2)

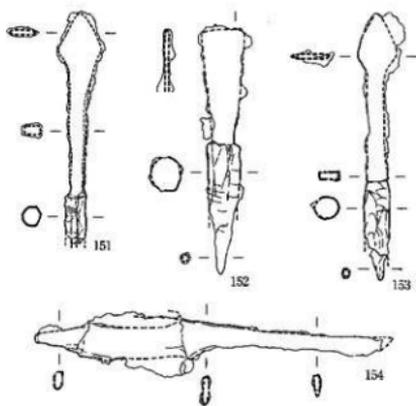
No	種類	法量(mm)				材質
		外径	内径	幅	厚さ	
149	貝鋼	59	67	15~18	2~4	イモガイ
150	貝鋼	50	56	14	2~3	イモガイ



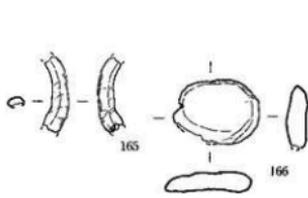
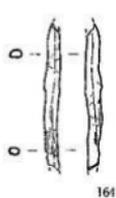
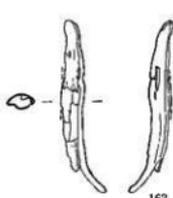
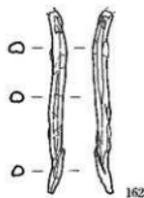
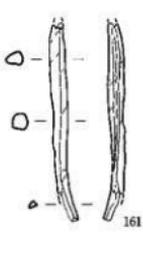
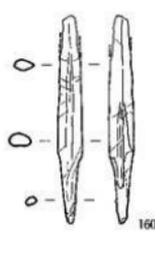
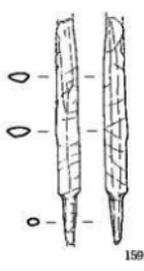
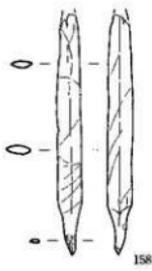
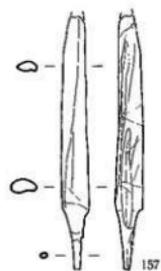
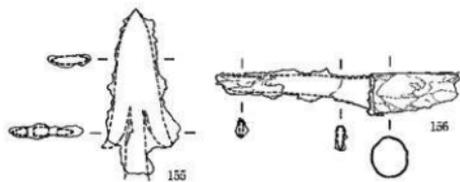
第27図 ST-122 遺構実測図 アミ目は赤色顔料



ST-120



ST-121



第28图 ST-120~122 出土遺物実測図

## 9. ST-121 (第26図)

120号墓の西9mに位置する。竪坑は、長さ1.40～2.02m・幅0.80～0.90mの隅田D字型を呈し、長辺に羨門がある。深さは90cmが遺存し、上部30～40cmが削失している。底面は鋤状工具による粗掘りのままで、羨門に向かって14cm上昇する。

羨門は、幅1.62～1.68m・高さ22～24cmを測り、板石7枚とⅣ～Ⅶ解塊12個で閉塞される。

玄室は平入りで、幅1.74m・奥行き24～30cmの、成人1体分のスペースしか無い。中央～西側の天井は崩落している。西壁には幅3cmの廂があり、寄棟の痕跡があるが、東側は平天井である。高さは25～32cmを測る。屍床は断面U字型で、西側3/4に赤色顔料が塗布されている。主軸方位は、N30°Eである。

被葬者は北西頭位の1体で、年齢不詳の子供の頭骨片が遺存し、奥壁寄りに鉄鏃3本(151～153)が、手前に刀子1本(154)が副葬されている。埋葬時は、副葬品の間に頭があったと推定される。

表13 ST-121出土遺物計測表

No	種類	法長 (mm)			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
151	鉄鏃	95	12	15	
152	鉄鏃	100	—	15	

No	種類	法長 (mm) ( )は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
153	鉄鏃	119	18	13	
154	刀子	(146)	60	13	直角物

## 10. ST-122 (第27図)

121号墓の北西7mに位置する。竪坑は、長さ2.02m・幅1.55～1.84mの不整長D字型を呈し、深さ0.88～1.10mを測り、羨門下底へ下降する。南西隅の検出面下23cmと66cmのレベルには、ステップがある。

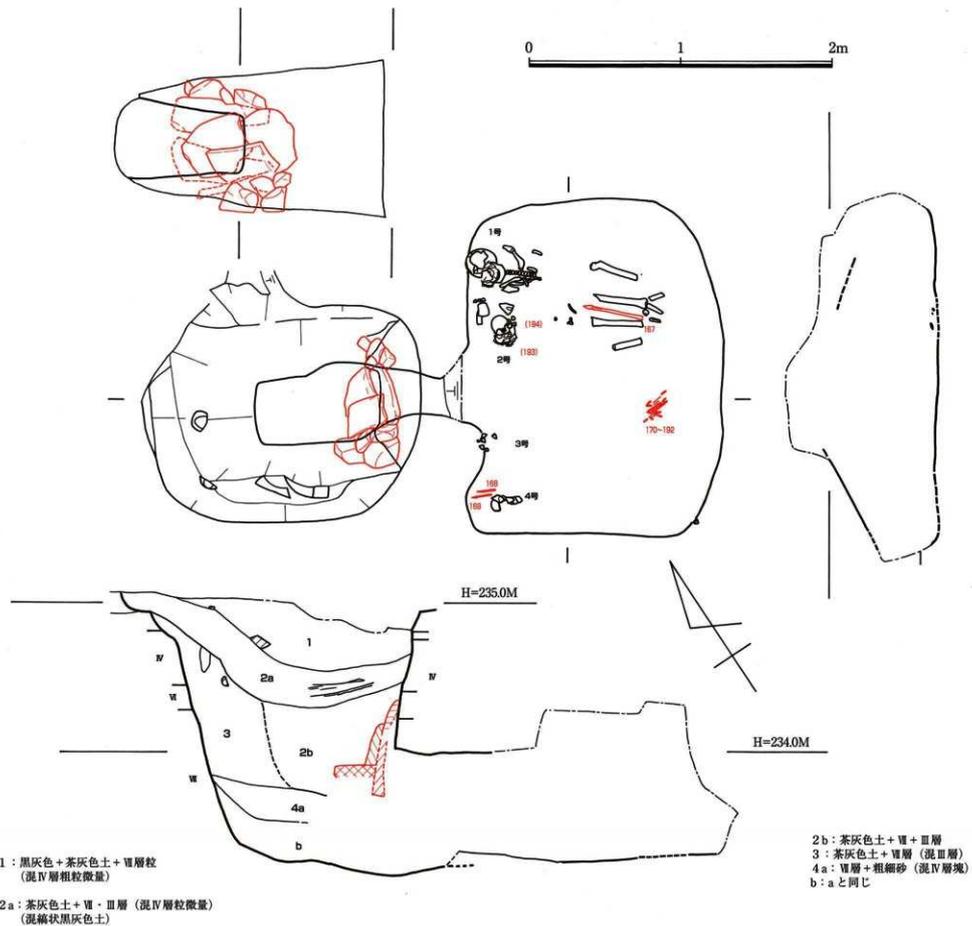
羨門は、高さ74cm・幅55～65cmを測り、板石3枚とアカホヤ塊20個で密閉している。羨道の長さは40cm程であるが、天井が崩落している。板石を除去すると若干の湯気が出てきた。

玄室は、平入り両裾の隅田長方形タイプで、右奥が弧状になる。最大幅2.70m・奥行き1.90mを測る寄棟の家型である。天井の殆どは崩落しているが、高さ95cm内外と推定される。主軸方位は、N23°Eである。

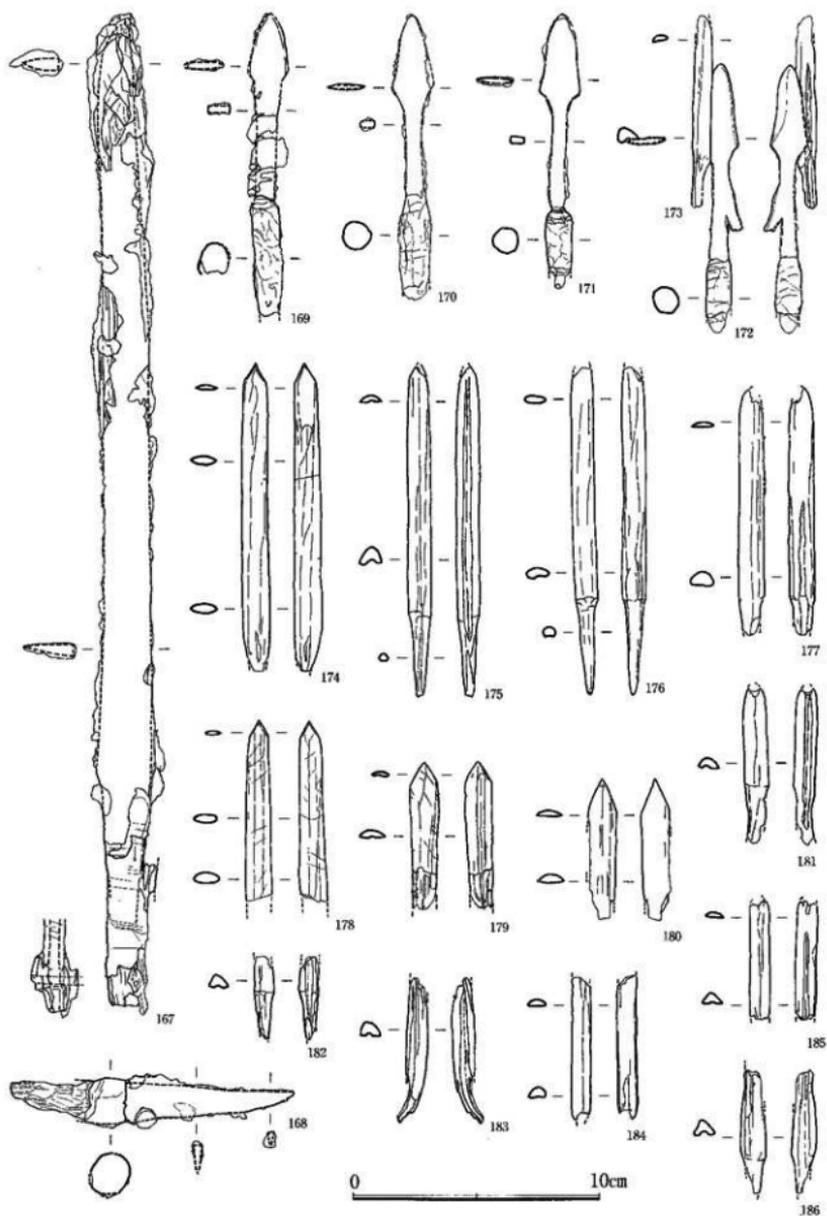
被葬者は3体で、左側に南頭位の1体(1号)、奥壁に東頭位の2体(2・3号)が埋葬されている。1号人骨は壮年の男性で、全身に赤色顔料が塗布されている。右側頭部に刀子(156)が、右寛骨部に鉄鏃(155)とその矢筈が頭部にかけて遺存し、右足先には骨鏃9本の束(157～165)が副葬されている。2号人骨は9歳の小児で、膝を軽く曲げ、頭部に赤色顔料が塗布されている。右側頭部で朱玉1点(166)が出土している。3号人骨は壮年の女性で、頭～胸部に赤色顔料が塗布されている。124号墓の埋葬順に従えば、2号→3号→1号の順に埋葬されたと推定される。

### 出土遺物

朱玉以外は、1号人骨が保有する。朱玉は、長径35mm、短径26mmの楕円形を呈し、厚さ5～8mmで橙褐色～朱色を呈する。鉄鏃は、莖部が欠損している。骨鏃は全長11cm前後の短いタイプで、幅の広いタイプと狭いタイプがある。特に後者の刃部は角度が鈍い。



第29図 ST-123 遺構実測図



第30图 ST-123 出土器物实测图(1)

表14 ST-122出土遺物計測表

No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
155	鉄鏃	(67)	(58)	(25)	
156	刀子	(100)	63	13	
157	骨鏃	(103)	(78)	11	
158	骨鏃	(98)	(79)	9	
159	骨鏃	(92)	(71)	9	
160	骨鏃	(85)	(56)	10	

No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
161	骨鏃	(82)	-	(6)	
162	骨鏃	(75)	(56)	6	
163	骨鏃	70	-	9	
164	骨鏃	(60)	-	(6)	
165	骨鏃	(31)	-	(7)	

## 11. ST-123 (第29図)

124号墓の竪坑を切る。竪坑は小さめで、長径1.84m・短径1.45mの不整楕円形を呈し、深さ1.66~1.78mを測る。

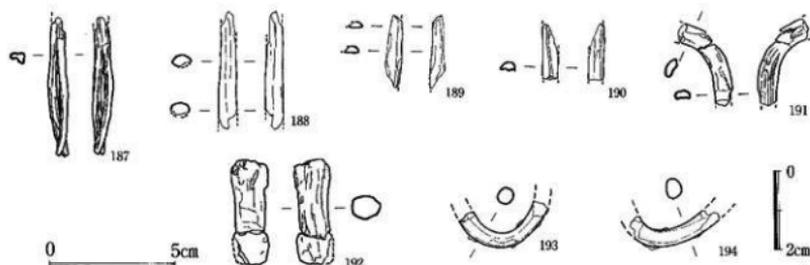
羨門は、幅38~54cm・高さ84cmを測り、板石5枚と角礫1個、Ⅳ~Ⅴ層塊8個で閉塞されている。

玄室は、平入り両裾の隅隅長方形を呈し、幅2.12~2.27m・奥行き1.50~1.68mを測る。天井と壁底部の殆どは崩落しているが、寄棟の家型を呈し、高さ90cm程であったと推測される。主軸方位は、N117Eである。

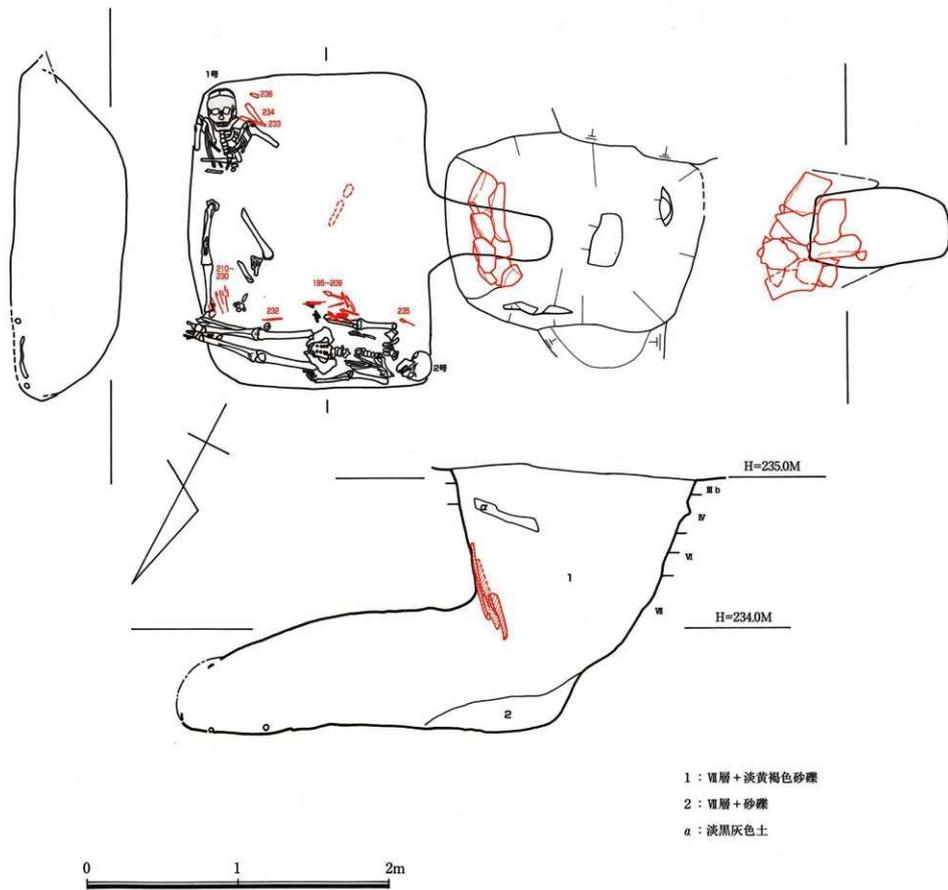
被葬者は4体で、西(羨門側)頭位である。1号人骨は熟年の男性で、頭部に赤色顔料が塗布されている。大腿骨右側に、小刀(167)が副葬されている。2号人骨は熟年の女性で、頭蓋に赤色顔料が塗布され、耳環(193・194)が装着されていた。3号人骨は4号人骨の一部の可能性もあるが、未成年で、左足先部に鋒を手前に向けた鉄鏃3本(170~172)と骨鏃の束(173~191)が副葬されている。4号人骨は6~12歳の小児で、左頭頂部に鉄鏃(169)と刀子(168)が副葬されている。埋葬順は、4号→3号→1号→2号と考えられる。

## 出土遺物

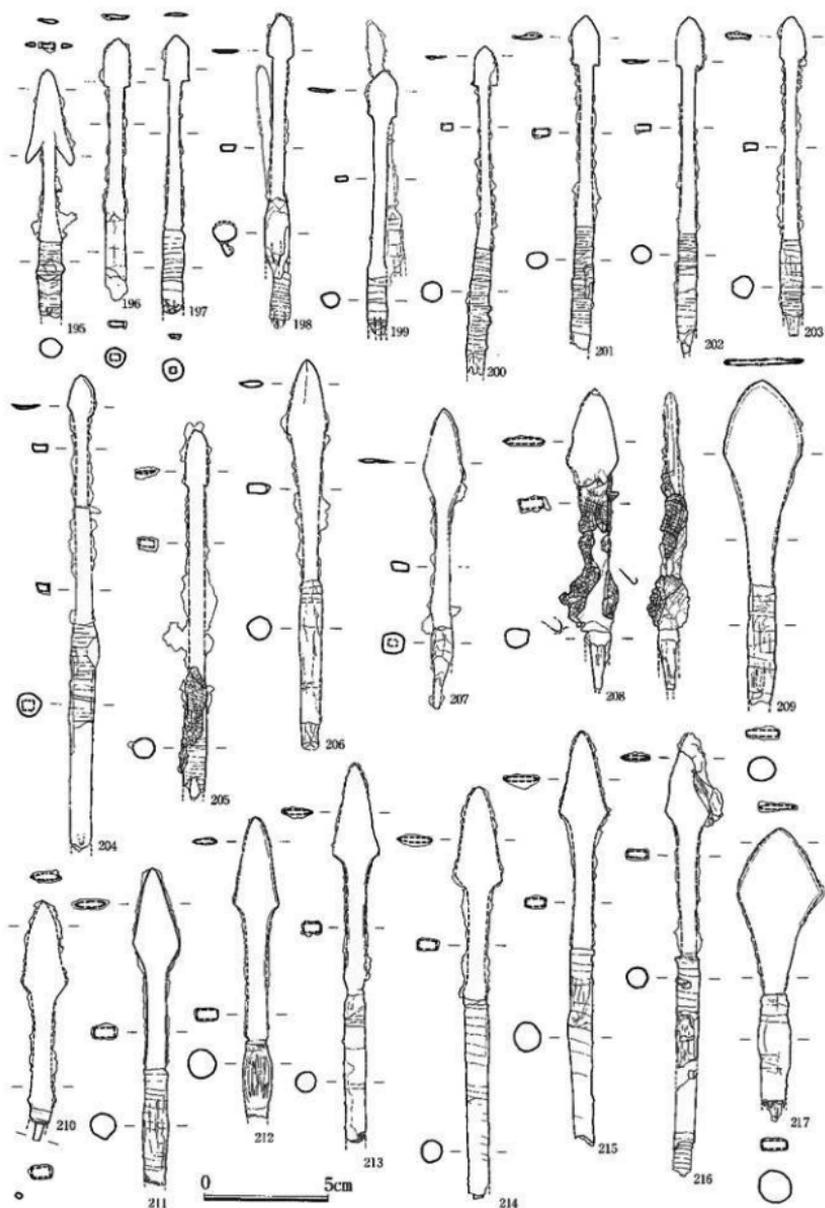
骨鏃が束になって出土したが、鋒に特徴がある。通常先端部はふくらみがあるが、当墳墓出土品はV字型に鋭く切られており、副葬時に再加工したものが、当初からの形状なのかは確証がない。耳環一对は、取り上げ人骨の中に混入したもので、115号墓出土品と同質の色と風化状態である。



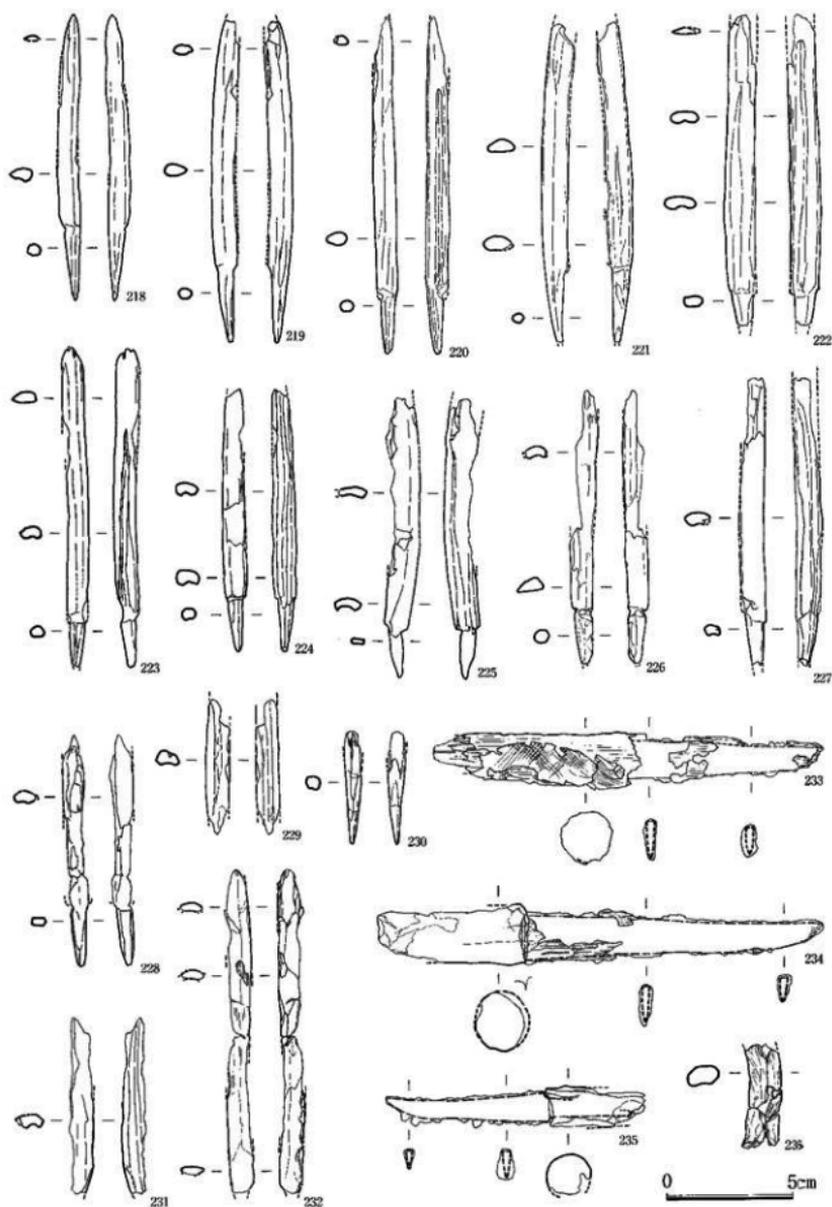
第31図 ST-123 出土遺物実測図(2)



第32圖 ST-124 遺構実測図



第33図 ST-124 出土遺物実測図(1)



第34图 ST-124 出土遗物实测图(2)

表15 ST-123出土遺物計測表(1)

No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
167	小刀	411	336	21	
168	刀子	114	68	16	鹿角柄
169	鉄鏃	(123)	24	15	
170	鉄鏃	(116)	30	16	
171	鉄鏃	111	30	17	
172	鉄鏃	109	33	15	
173	骨鏃	(78)	(78)	7~8	
174	骨鏃	(125)	113	9~11	
175	骨鏃	(135)	(101)	7~9	
176	骨鏃	(134)	95	8~9	
177	骨鏃	(101)	88	9~10	
178	骨鏃	(74)	(74)	8~11	
179	骨鏃	(60)	(60)	10~11	
180	骨鏃	(57)	(57)	11~12	
181	骨鏃	(63)	(63)	9	
182	骨鏃	(34)	(14)	8	

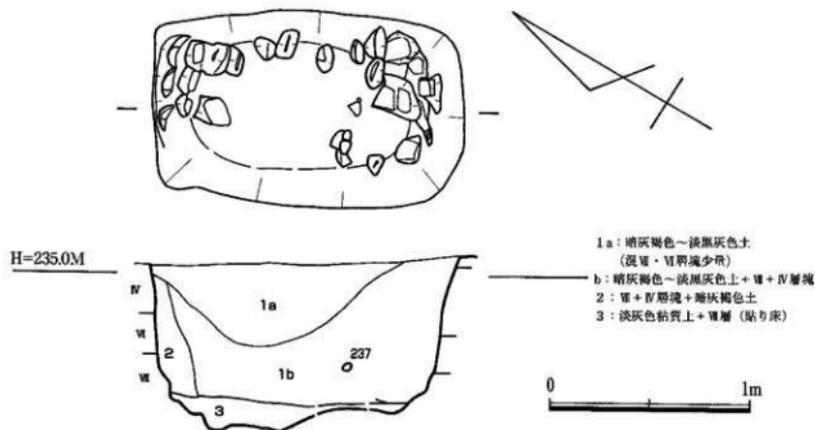
No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
183	骨鏃	(60)	(39)	8~9	
184	骨鏃	(58)	(55)	7~8	
185	骨鏃	(48)	(48)	8	
186	骨鏃	(50)	(31)	9~10	
187	骨鏃	(56)	-	-	
188	骨鏃	(48)	(48)	6~8	
189	骨鏃	(30)	-	-	
190	骨鏃	(24)	(24)	6	
191	骨鏃	(39)	(39)	7~8	
192	刀子 <small>の</small> 柄	(43)	-	-	鹿角柄

表16 ST-123出土遺物計測表(2)

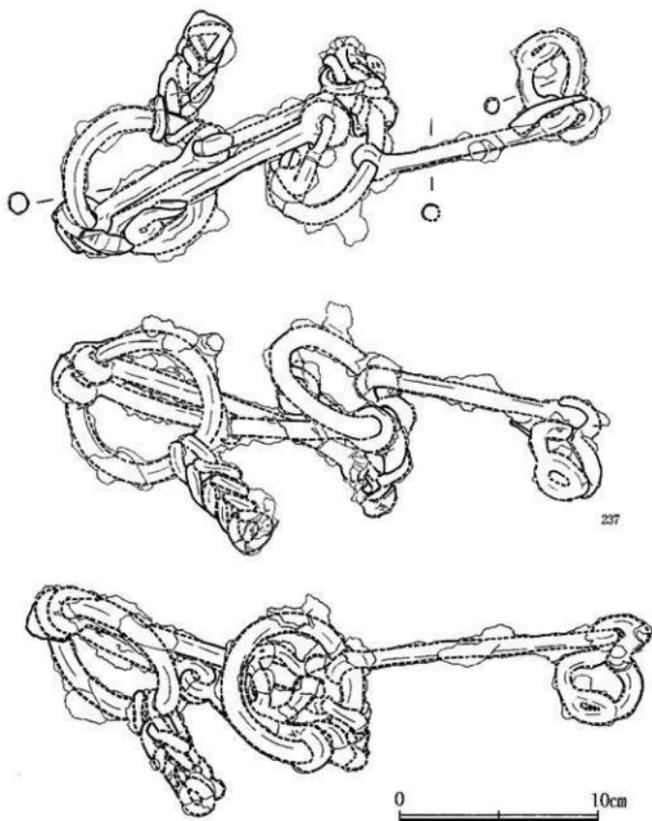
No	種類	法量 (mm) ( ) は現存			材質
		外径	内径	直径	
193	耳環	(20×23)	(13×17)	3	銅
194	耳環	(24×27)	(16×20)	3×4	銅

## 12. ST-124 (第32図)

縦横3mの掘削排土が広がり、堅坑の南東部を123号墓に切られる。堅坑は、長さ1.40~1.52m・幅1.32mの隅円台形を呈し、最深部は1.94mを測る。西側の遺構面下46cm・北西部の深さ23・37cmのレベルにはステップが掘削されている。



第35図 SK-03 遺物実測図



第36図 SK-03 出土遺物実測図

羨門は、幅36～39cm・最大幅53cm・高さ82～92cmを測り、小さめの板石11枚で閉塞される。

玄室は、平入り両扉の隅門長方形タイプで、明瞭な屋根型ではない。壁面底部は砂礫が崩落して形状不明であるが、幅2.04～2.08m・奥行き1.44～1.60m・高さ0.74mを測る。主軸方位は、N62°Eである。

被葬者は2体で、奥壁沿いに南頭位の1体(1号)が、西壁沿いに西頭位の1体(2号)が埋葬されている。1号人骨は壮年の男性で、全身に赤色顔料が塗布されている。左肩部に刀子2本(233・234)が、左側頭部に鹿角(236)が、両足首の間に鉄鏃8本(210～217)と骨鏃13～14本(218～230)の束が剛葬されている。2号人骨は壮年の男性で、頭から右胸部に赤色顔料が塗布されている。右肩上部に刀子(235)が、右腕横に鉄鏃15本(195～209)が、右膝横に骨鏃1本(232)が剛葬され

ている。足先は1号人骨の足先に乗っていることから、初葬は1号人骨と断定できる。中央付近には、矢柄と思われる植物質がある。

#### 出土遺物

長頸鎌を含まない鉄鎌と骨鎌の束(210~230)を保有する1号人骨が初葬であるが、追葬鉄鎌の中にも同様(206~208)がみられ、時期差は殆ど無いと思われる。205と208には布が錆着しており、布で束ねられていたことが推定される。骨鎌は先細りの大型タイプが多く、220~222等は長さ15cm程と推定される。236の鹿角は、233か234の把部破片と思われる。

表17 ST-124出土遺物計測表

No	種類	法量(mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
195	鉄鎌	100	39	19	
196	鉄鎌	(107)	20	10	
197	鉄鎌	114	19	10	
198	鉄鎌	103	17	10	
199	鉄鎌	108	18	11	
200	鉄鎌	(134)	(16)	(7)	
201	鉄鎌	(136)	20	11	
202	鉄鎌	137	20	11	
203	鉄鎌	130	17	10	
204	鉄鎌	191	13	11	
205	鉄鎌	154	23	9	
206	鉄鎌	160	30	16	
207	鉄鎌	122	25	17	
208	鉄鎌	120	29	21	布付者
209	鉄鎌	127	30	32	
210	鉄鎌	(97)	34	17	
211	鉄鎌	(130)	31	18	
212	鉄鎌	(122)	35	19	
213	鉄鎌	(155)	37	19	
214	鉄鎌	(169)	38	19	
215	鉄鎌	(169)	34	20	

No	種類	法量(mm) ( ) は現存			備考
		全長	刃部長	刃部幅	
216	鉄鎌	(172)	32	19	
217	鉄鎌	120	25	33	
218	骨鎌	117	85	7~8	
219	骨鎌	(132)	(100)	8~10	長さ139mm
220	骨鎌	(137)	(113)	7~9	
221	骨鎌	(131)	(99)	10~11	
222	骨鎌	(127)	(112)	11~12	
223	骨鎌	(130)	(112)	9	
224	骨鎌	(107)	(85)	8~10	
225	骨鎌	(114)	(94)	10~13	
226	骨鎌	(112)	(89)	8~11	
227	骨鎌	(117)	(100)	10	
228	骨鎌	(93)	(69)	-	
229	骨鎌	(55)	(55)	9~10	
230	骨鎌	(46)	-	-	
231	骨鎌	(72)	(61)	(9)	
232	骨鎌	(132)	(128)	10	
233	刀子	(155)	76	15	鹿角柄・布痕
234	刀子	(179)	118	17	鹿角柄
235	刀子	(105)	66	12	鹿角柄
236	刀子の柄	(41)	-	-	鹿角

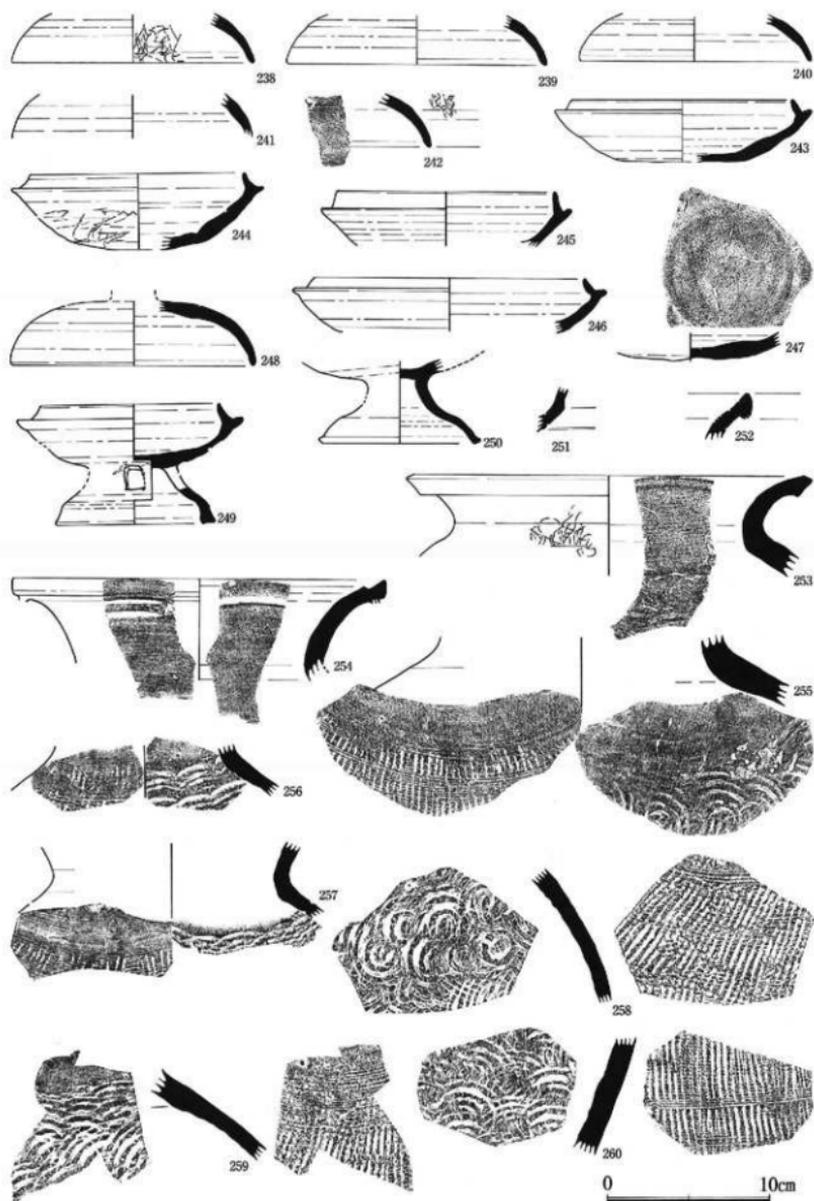
### 13. SK-03 (第36図)

調査区の東南端で検出した、長さ1.57m・幅0.85~1.0mの隅円長方形~楕円形を呈するブランで、深さは78~87cmを測る。削失は、10~20cmである。底面は鋤状工具の刃型を残し、厚さ3~17cmの貼り床が施される。主軸方位は、N29°Wである。

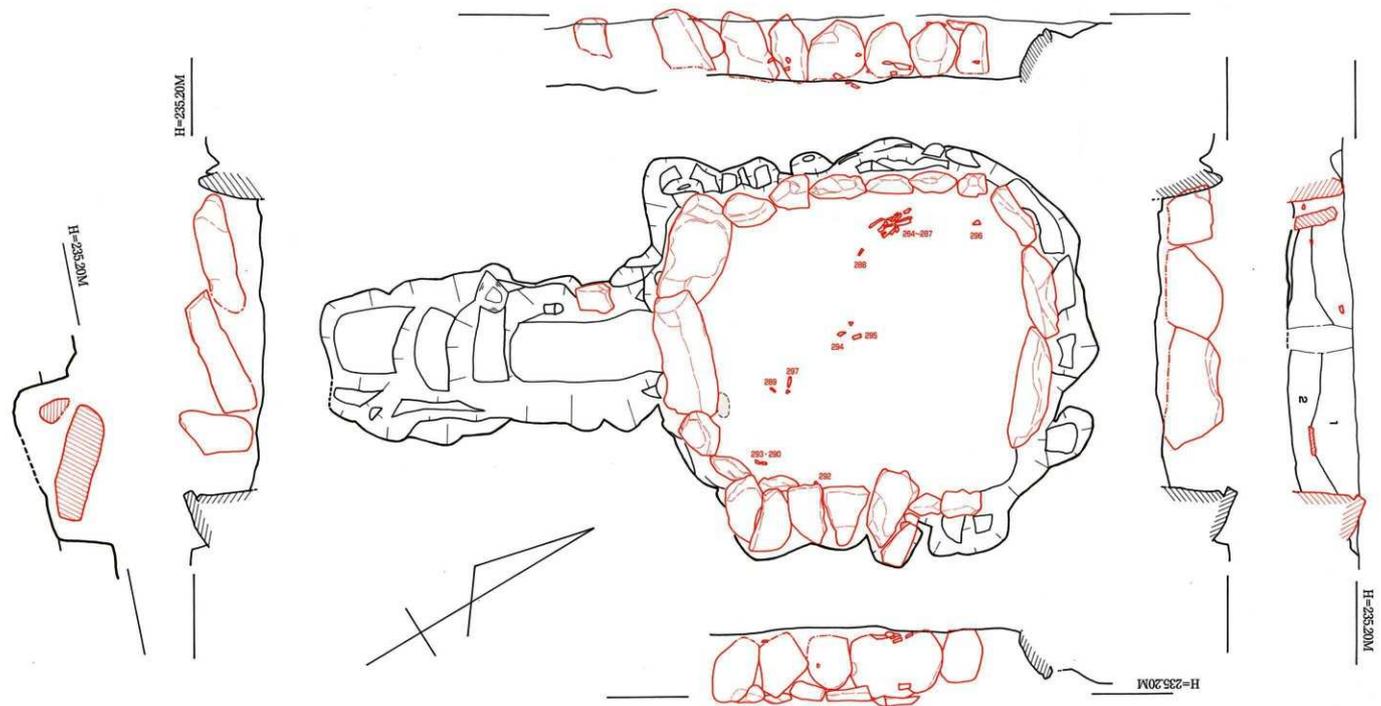
屍床面の土18cmにおいて、環状鏡板付轡(237)が出土したほか骨片等は出土していないが、馬墓と推定される。

### 14. SD-01 (第3図)

114号墓の西1.8mに位置し、幅4.4m・長さ8m以上、深さ30cm程に掘り込まれている。覆土は淡黒灰色土のみで、ゆっくりと埋没している。主軸方位は、N29°Eである。出土遺物は東端部にやや集中しており、殆どは須恵器で、坏身(243~245)・坏蓋(238~242)や高坏(249・250)の他、甕片が混じる。

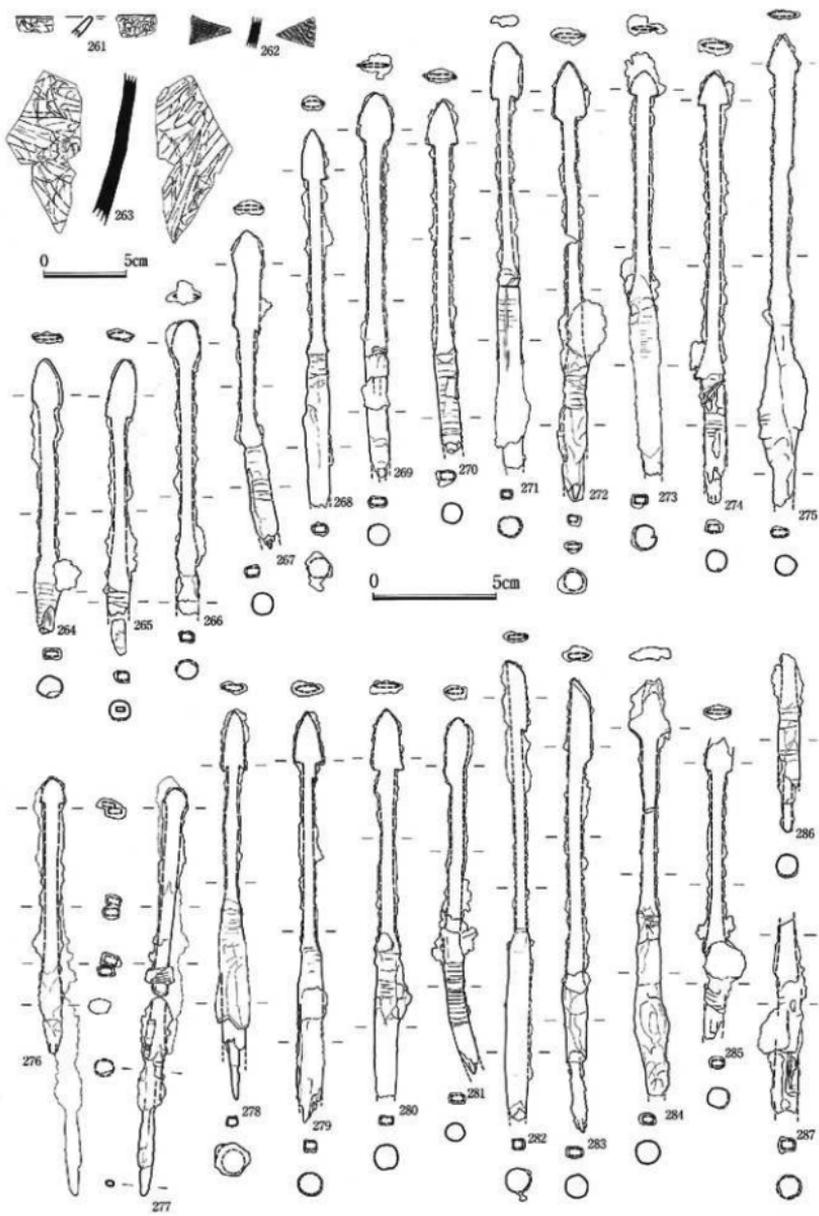


第37图 SD-01 出土物实测图

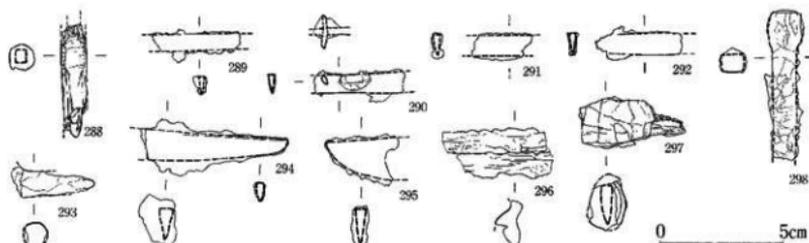


- 7: 淡黑灰色土 (瘦孔隙)
- 2: 淡黑灰色土 (混IV、V層粗粒少量)
- 1: 淡黑灰色土 (混IV層粗粒少量)
- 3: 粗細砂・IV・V層 (粘土灰)

第38圖 SI-03 遺構実測図



第39图 SI-03 出土物実測図(1)



第40図 SI-03 出土遺物実測図(2)

表18 SD-01出土須恵器観察表

No	器種	法差 (mm)			測整		胎土	焼成	色調		備考
		口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
228	坏蓋	185	-	-	工具ナデ	工具ナデ・ナデ	焼締砂少量	良	暗灰青～灰青	灰黒～淡灰青	
229	坏蓋	158	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	良	良	暗灰青	灰青～灰	
240	坏蓋	141	-	-	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・ナデ	良	良	暗茶灰～淡灰黒	淡灰黒～淡灰	外面：若干灰被り
241	坏蓋	-	-	-	工具ナデ	ナデ	良	良	暗茶灰	淡灰黒	
242	坏蓋	-	-	-	ハケ・工具ナデ	工具ナデ～ナデ	片巻殻・粗織砂少量	良	暗灰黒～暗灰青	灰黒～淡灰青	
243	坏身	135	70	38	ナデ～ケズリ	ナデ	灰黒粒少量・小黒塵量	良好	暗灰黒～淡灰	灰青	受部径：150mm
244	坏身	131	82	47	ナデ・器口ナデ	ナデ	良	あまり	淡灰～灰	淡灰～淡黒	受部径：155mm
245	坏身	133	-	-	ナデ	ナデ	白色砂・黒褐色粒少量	良	淡灰黒～淡灰	淡灰黒	受部径：154mm
246	坏身	166	-	-	ナデ～ケズリ	ナデ	白色粒少量	良	淡灰黒	淡灰黒	受部径：194mm
247	坏身	-	-	-	ケズリ	ハケ	良	良	淡灰黒	淡灰黒	245と同・個体小
248	蓋	147	-	-	ケズリ～ナデ	ナデ	良	ややあまい	暗灰黒～灰青	淡灰～淡灰黒	外面：若干灰被り
249	高坏	109	90	74	ナデ・ケズリ～ナデ	ナデ	焼締砂微量	良	灰～暗灰青	灰～灰黒	三方スリ・受部径：140mm
250	高坏	-	94	-	ケズリ～ナデ	ナデ	良	良	暗灰黒	淡灰青～淡灰	外面：若干灰被り
251	皿小皿	-	-	-	ナデ	ナデ	良	良	暗灰黒～灰	淡灰	
252	皿	約150	-	-	ナデ	ナデ	良	良	淡灰青	薄灰	内面：若干灰被り
253	皿	240	-	-	ナデ	同心円タタキ ナデ消し	灰黒粒微量 黒褐色粒少量	良	暗灰青～淡灰	灰黒～淡灰	内面：若干灰被り
254	皿	228	-	-	ハケ	工具ナデ	黒褐色粒少量	良	暗灰～淡灰	淡灰～淡灰青	内面：若干灰被り
255	皿	-	-	-	平行タタキ～ハケ	ナデ・ナデ消し 同心円タタキ	良	良	暗灰～淡灰	淡灰～灰黒	外面：若干灰被り
256	皿	-	-	-	平行タタキ～ハケ	工具ナデ 同心円タタキ	黒褐色粒やや多い	良	淡灰	灰黒～淡灰黒	内面：灰被り
257	皿	-	-	-	平行タタキ～ハケ	同心円タタキ	黒褐色粒少量	良	淡灰	淡灰黒	
258	皿	-	-	-	平行タタキ～ハケ	同心円タタキ	良	良	淡灰	淡灰黒	
259	皿	-	-	-	ハケ～平行タタキ	ナデ・同心円タタキ	黒褐色粒少量	良	淡灰青	淡灰黒	
260	皿	-	-	-	平行タタキ	同心円タタキ	黒褐色粒少量	良	灰	灰黒	

15. S I-03 (第38図)

掘形は、半円半方形を呈し、南辺中央にスロープと通路が付設された板石積石室墓である。天蓋板石の多くは開掘時に除去され、小片等が上面を覆っていた。その石材の片面には赤色顔料(丹)がみとめられ、天蓋内面全面に塗布されていたと推定される。土師器片(261)と須恵器片(262・263)は、上面～上層出土である。

側石は左右各6枚の板石を縦列し、4隅は斜めに配置され(北東隅は抜かれている)、奥壁(北側)は2枚の大きな石を鏡石風に並べ、南は2個の大きな重角柱の石が倒れた状態で検出された。この石は玄門に相当し、築造当初は立っていたであろうことは明白である。玄門には、赤色顔料が塗布

されていないように見える。羨道のスロープは、長さ1.20m・幅0.80～1.12m・深さ8～43cmを測り、底面平坦部は長さ1.3m程と推定され、左側に板石1枚が遺存している。玄室側石の外側には、持ち送り1段目の掘形が掘削されている。

玄室内は、幅1.70～1.97mで奥壁側がやや広く、奥行き1.8～2.0m、高さ33～42cmが遺存し、全体的には10～20cmの削失が推定される。人骨は遺存していないが、右玄門の脇に赤色顔料が認められ、鉄鍬24本の東(264～287)以外は小刀(295)や刀子(289～294・297)、鉈(298)の破片が散在している。副葬品の平面的分布をみると、被葬者は2～3体で南西頭位と推定される。

当遺構の構造は、横穴式石室と板石積石室墓の折衷型であり、埋葬方法は周囲の地下式横穴墓と同様である。周囲は精査していないが、少なくとも北東～東方6mの範囲において周溝は無い。

なお、屍床面には若干の貼り床が施されているが、地権者および耕作者が保存の意向を快諾されたことから完掘せずに土糞で埋め戻した。このため、側壁や奥壁の下部、玄門の下面は未調査である。

## 出土遺物

土器片の出土は、墳丘祭祀と推定されるが、詳細不明である。鉄鍬は長頸鍬24本が東で出土した。基本形は三角形と長三角形・片刃鍬である。

表19 SI-03出土遺物観察表

No	種類	器種	法量(mm)			調整		胎土	焼成	色調		備考
			口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
261	土師器	鉢	-	-	-	ミガキ	(マメツ)	良	ややあまい	橙褐	茶	上層
262	須恵器	甕	-	-	-	工具ナデ	平行タタキ	良	良	暗灰褐	淡灰褐	上層
263	須恵器	甕	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ(半ミガキ)	白色粒微塵	暗緑	灰褐～暗灰	淡灰褐	上層

表20 SI-03出土遺物計測表

No	種類	法量(mm)は現存			備考
		全長	刃部長	刃幅	
264	鉄鍬	112	16	11	
265	鉄鍬	(121)	23	11	
266	鉄鍬	(122)	13	11	
267	鉄鍬	132	42	10	
268	鉄鍬	(155)	20	9	
269	鉄鍬	(152)	17	15	
270	鉄鍬	(145)	18	11	
271	鉄鍬	(175)	23	(13)	
272	鉄鍬	(154)	23	12	
273	鉄鍬	(175)	(10)	(11)	
274	鉄鍬	177	13	11	
275	鉄鍬	(193)	15	11	
276	鉄鍬	112	9	9	
277	鉄鍬	(170)	(5)	(7)	
278	鉄鍬	160	25	13	
279	鉄鍬	168	21	10	
280	鉄鍬	(159)	25	11	
281	鉄鍬	147	22	9	
282	鉄鍬	(187)	28	12	
283	鉄鍬	185	33	(8)	
284	鉄鍬	(170)	(20)	-	
285	鉄鍬	(120)	(13)	11	
286	鉄鍬	(73)	-	-	
287	鉄鍬	(79)	-	-	
288	鉄鍬	(45)	-	-	
289	刀子	(36)	(36)	7	
290	刀子	(37)	(37)	8～9	
291	刀子	(24)	(24)	9	
292	刀子	(35)	(35)	9	
293	刀子	(34)	-	-	
294	刀子	(60)	(57)	(13)	
295	小刀か	(30)	(23)	(18)	
296	鉈	(41)	-	-	
297	刀子	(40)	-	16	
298	鉈か	(62)	-	-	

## 第4節 まとめ

今回、新たに11基の地下式横穴墓と馬墓1基、横穴式石室石板石積石室墓1基を検出し、多くの新知見を得ることができた。中でも横穴式石室と板石積石室墓の折衷型は類を見ない遺構であり、様々な文化が入り交じる当地域を代表する様なものと言える。ただし、5世紀末頃の横穴式石室は近隣には無く、系譜が不明であるが、宮崎平野部からの影響であろう。また、大刀や甲冑が副葬されておらず、上位階層の墳墓とは断言できないが、戦後、点在する墳丘が相当盗掘にあったという話もあり、構造的にも墳丘を有していたことは想定され、刀子等の破砕状況から、盗掘も十分考えられ、甲冑や大刀等が持ち出された可能性も否定できない。

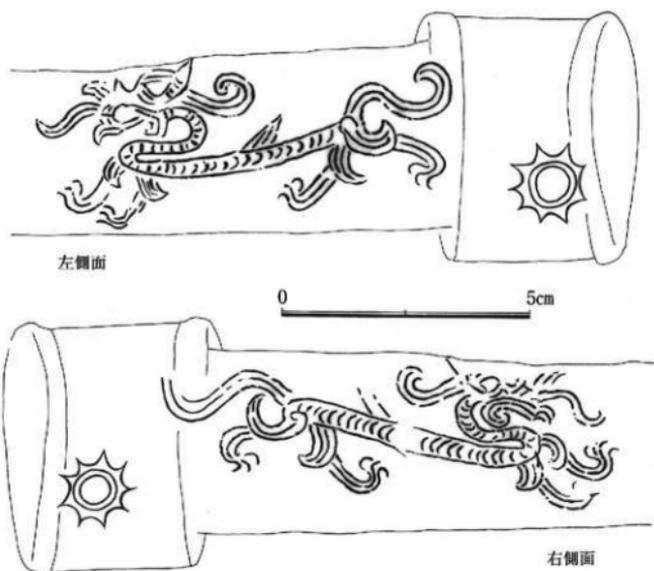
地下式横穴墓は、全て羨門閉塞タイプで、閉塞材が板石(A)、アカホヤ塊(B)、板石+アカホヤ塊(C)に分けられる。Aタイプには、大きい板石2~3枚で塞ぐもの(113~115号墓等)と小さい板石8枚程度で塞ぐもの(124号墓)があり、前者のほうが副葬品の質が高い。121号墓は異質で、通常閉塞材の板石数でありながら、幅広い羨門と奥行き狭い玄室で、追葬を考慮した広さが無い。

113号墓の銅鈴は装飾が全く無いが、中に小礫が入っており、市内初出土でもある。114号墓出土例のような鞘口金具を有する大刀は市内で2例目であるが、さらに保存処理を委託し、X線撮影において、象嵌が確認された<sup>(11)</sup>。刀身関寄りに龍虎と日輪が銀で象嵌しており、6世紀前半の地方豪族の首長の所持品としては相応しいが、家族と共に埋葬された均質的集団の極みと言える。龍虎と日輪は新沢千塚327号例に類似する。第41図は、X線写真と脱塩後に鞘をはずした段階での写真(巻頭図版2)を合わせて実測したものである。龍虎ともに全長8.5cmほどで、背鱗のある細長い胴部に前足・後足・尾が付き、頸部はS字に曲がっている。頭部の下半分のみ表現が異なり、左側面では下顎が開き、右側面では舌を巻いたようになっており、どちらが龍か虎かという判断は困難である。日輪は、直径6~8mmの二重円の外側に8個の半円が連なる。西南部の大型土坑から出土した須恵器は、7世紀前葉まで続く象嵌大刀副葬者への祭祀遺構と推定される。また耳環は錫製であり、3.5km東に位置する天神免遺跡74号住居<sup>(12)</sup>出土の高杯内付着物も錫が主成分であることは、泉落と墓域との関連を想定させる根拠の一つになる。錫製耳環は、九州では北部の円墳や熊本県カミノハナ3・6号墳、豊岡宮本横穴群3・5・8号墓等で出土しており、宮崎県内においても、1~2例推定される。

鏝子は、113・119号墓では大刀の中央付近に接して置かれ、過去の調査においても、82号墓例は剣の中央付近に、42号例は単独で出土していることから、馬具としての可能性は低いと思われる。

初葬の顔面には赤色顔料が塗布されるか撒かれるのが一般的であり、ハエ蝨殻も4体に大量に遺存していたように、埋葬後、骨化して赤色顔料が塗布されるまで羨門は開口していたようである。

被葬者は東頭位(右側壁側)が古く、南頭位(羨門側)へと変遷することはゆるぎないが、南頭位が5世紀後半には成立していることが明確になった。



第41図 ST-114 出土大刀 象嵌 実測図

註

- (1) 馬頭9号地下式横穴墓から銅製の鞘口金具を有する大刀が出土している。  
宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(1)」1972
- (2) 株式会社吉田生物研究所の提供による。  
このほか、九州では、横田義章「古墳時代の象嵌文様」『九州歴史資料館研究論集』10 九州歴史資料館1984 において5遺跡6例が報告されているほか、熊本県木柑子古墳の内塚から大刀の鐔が出土している。  
阿南亨編『木柑子遺跡群』菊池市教育委員会2003
- (3) 西山要一「古墳時代の象嵌——刀装具について——」日本考古学会『考古学雑誌』第72巻第1号 1986  
西山要一「象嵌——古墳時代の金工技術(2)——」千賀久・村上恭通編『考古資料大観7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』2003  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総合案内」1988
- (4) えびの市教育委員会『北岡松地区遺跡群』2010
- (5) 比佐陽一郎「錫、鉛製耳環に関する基礎的検討」九州古文化研究会『古文化談義』第50集発刊記念編集(下) 2004
- (6) 杉井健「第5章まとめ」杉井健編『八代海沿岸地域における古墳時代在地制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学文学部 2009

表21 地下式横穴墓被葬者一覽

号	陪葬 陪葬材	主軸方位	被葬者	埋葬 期位	性別・年齢	遺存 状態	頭位	赤色顔料			陪葬品・備考	
								頭部	上半身	下半身		
113	浪門 板石	N 32° E	1号	1	男	壮年	○	南西	○	×	×	大刀1、骨子1、簪? 1
			2号	2	不明	7歳	△	南西	×	×	×	鉄鍬2
			3号	3	女	老年	○	南西	○	×	×	鉄鍬15、骨鏝2、ハ工鑿股
			4号	4	不明	3~4歳	△	南西	×	×	×	刀子1
			5号	5	男	壮年	△	南西	×	×	×	鉄鍬1、骨鏝1
114	浪門 板石	N 1° E	1号	1	男	熟年	△	南	○	○	×	大刀1、小刀1、鉄鍬1+25、鹿1
			2号	2	不明	10歳	×	南	○	○	○	刀子1
			3号	3	不明	熟年	×	南	○	×	×	鉄鍬1、鉄鍬3、刀子2
			4号	5	不明	8~9歳	×	南	×	×	×	
			5号	4	女	壮年	○	南	○	○	△	刀子1、刀子2、ハ工鑿股
115	浪門 板石	N 46° E	1号	2か	女	壮年	○	南西	○	○	×	刀子1、貝鏝2
			2号	3か	不明	6歳	×	南西	×	×	×	刀子1
			3号	4か	男	熟年	×	南西	○	○	○	大刀1、小刀1、鉄鍬2、骨1、骨1、土金具3
			4号	5か	不明	15~16歳	○	南西	○	○	○	鉄鍬1、耳環1対
			5号	1か	女	熟年	△	南西	○	○	×	小刀1、刀子1
117	浪門 アカホヤ塊	N 8° W	1号	3	不明	8歳	△	南	○	×	×	鉄鍬1、刀子1
			2号	4	不明	10~11歳	△	南	×	×	×	刀子1、鉄鍬5
			3号	2	男	壮年	△	南	○	×	×	蛇行筒1、刀子1、耳環1対、墓石
			4号	1	不明	8~9歳	△	南	△	×	×	刀子1
118	浪門 アカホヤ塊	N 52° E	1号	1	女	熟年	○	南西	○	○	×	貝鏝3
			2号	2	不明	壮年	○	南西	×	×	×	短刀1、刀子1
			3号	3	不明	15~16歳	×	南西	○	×	×	刀子1、ガラス小玉1
119	浪門 板石	N 56° E	1号	2	女	壮年	△	南西	○	○	×	大刀1、鹿子1、鉄鍬13、ハ工鑿股
			2号	3	不明	8~9歳	△	南西	×	×	×	鉄鍬4、ハ工鑿股
			3a号	1	不明	8~9歳	△	南西	△	△	×	
			3b号	1	不明	2~3歳	×	南西	×	×	×	鉄鍬2、刀子1
120	浪門 アカホヤ塊	N 27° E	1号	1	女	熟年	△	南	○	×	×	刀子1、貝鏝2
			2号	2	不明	7~9歳	×	南西	○	×	×	刀子1
121	浪門 板石・アカホヤ塊	N 30° E	1号	-	不明	若年小	×	北西	○	×	×	鉄鍬3、刀子1
122	浪門 板石・アカホヤ塊	N 23° E	1号	3	男	壮年	○	南	○	○	○	鉄鍬1、骨鏝9、刀子1
			2号	1	不明	9歳	△	東	○	×	×	朱玉1
			3号	2	女	壮年	△	東	○	×	×	
123	浪門 板石・アカホヤ塊	N 117° E	1号	3	男	熟年	△	西	○	×	×	小刀1
			2号	4	女	熟年	△	西	○	×	×	耳環1対
			3号	2	不明	未成年	×	西	×	×	×	鉄鍬3、骨鏝15~19
			4号	1	不明	6~12歳	×	西	×	×	×	鉄鍬1、刀子1
124	浪門 板石	N 62° E	1号	1	男	壮年	△	南東	○	○	○	鉄鍬8、骨鏝13~14、刀子2
			2号	2	男	壮年	○	南西	○	○	×	鉄鍬15、骨鏝1、刀子1

## 第4章 岡元遺跡

### 第1節 はじめに

調査対象地は、東西4kmの高位段丘の西端に位置し、昭和54年の県文化課による調査地の南東100mに位置する。圃場は57haで周知の遺跡であるが、水源に乏しく、多くの溜池が近現代に掘削されている。溜池は、標高273~274mの水田域に散在し、長さ10~20m・幅6~7m・深さ2m程のものが多い。1.5m掘れば、底面は粘質土になり、水が浸み出てくる。調査地の標高は、277mであり、畑作としての使用度が高い。

### 第2節 基本的層序(第2図)



第1図 調査地点と周辺の地形(1:5,000)

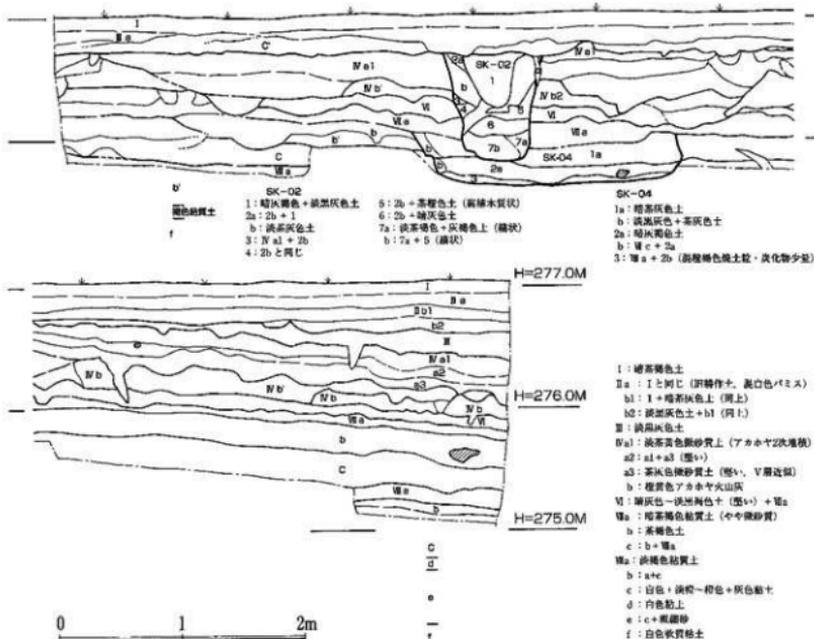
層序は上から、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：旧耕作土・近世以降の上層、Ⅲ層：淡黒灰色土、Ⅳa層：アカホヤ火山灰2次堆積層、Ⅳb層：アカホヤ火山灰、Ⅴ層：茶褐色+黒褐色土（極少量の塊が部分的にみられる）、Ⅵ層：暗灰色～淡黒褐色土（通常の縄文時代早期の文化層）、Ⅶ層：暗茶褐色～茶褐色土、Ⅷ層：白色主体の粘質土に分別した。

遺構面は、Ⅳa層とⅦb層上面で、Ⅳa層とⅥ～Ⅶc層が遺物包含層である。Ⅱ地形は、調査区の北西部が最も高く、東南方向へ下降する。Ⅳb層は、通常の段丘面では40cm程の厚さであるが、斜面での搅拌・流下により、プライマリーな状態ではなく、層厚も20cm程しかない。

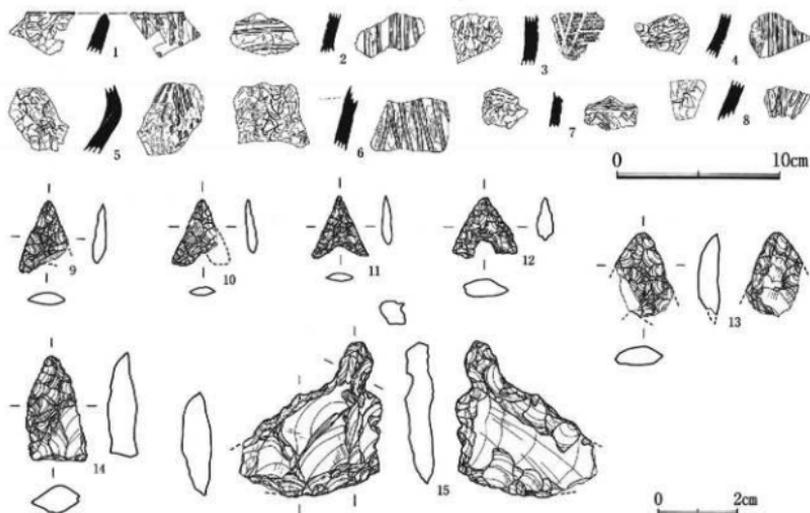
### 第3節 発掘調査

#### 1. 縄文時代前期以降

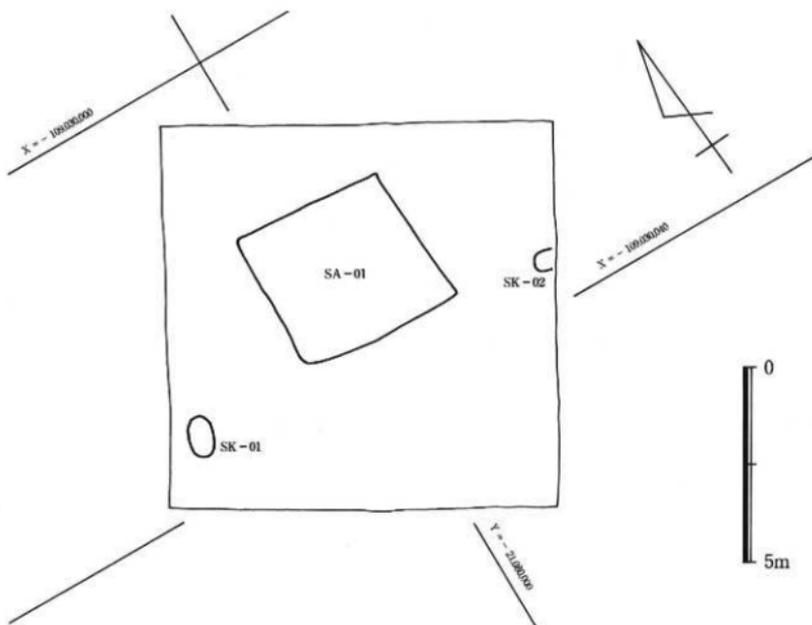
Ⅳa層上面までスコップで掘り下げ、縄文土器片33点のほか、石器や剥片・チップ149点、土師器片3点、須恵器片1点、輸入陶磁器1点、近世以降国産陶磁器105点が出土したことから、周囲には、古墳時代と中近世の遺構も包蔵することが推定される（第3図）。Ⅳa層上面においては、堅く締まった黒灰色土に覆われた竪穴住居1軒（SA-01）と、陥し穴2基を検出した。



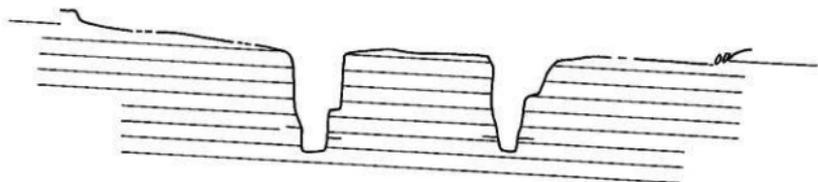
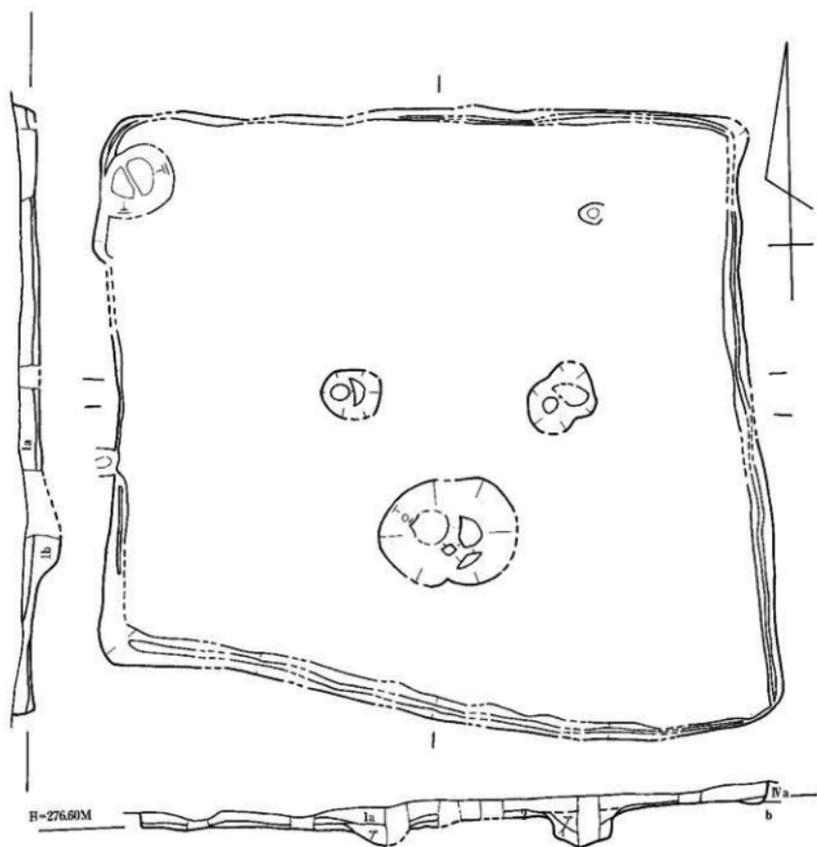
第2図 東壁層序図



第3图 I~III層出土遺物実測図



第4图 IVa層上面 遺構分布図



- 1 a: 黒灰色土
- b: 暗灰褐色土
- 2: N'b + N'a (混1b, 陸り床)
- ア: 1a + b
- イ: 暗細灰色土

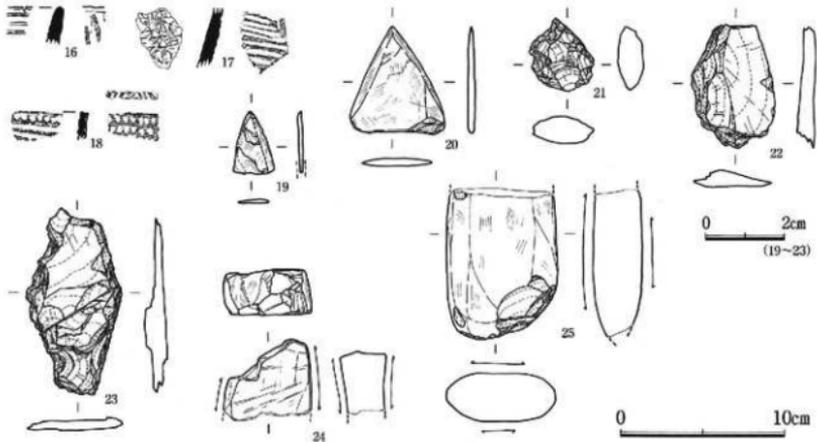


第5図 SA-01 遺構実測図

### SA-01 (第5図)

東西4.03~4.26m・南北3.44~4.03mの、西辺が短い隅門長方形を呈する。覆土は5~10cmで、堅く締まっている。上部削しは10~20cmと推定され、比較的浅い掘り込みである。2層除去後に支柱穴2基を検出、深さは64・61cmを測り、東側に抜き取り穴的な2層上面からの掘り込みを伴う。中央南寄りには、長径66cm前後・深さ12~16cmの円形土坑2基が重複している。西壁中央部のみ壁溝が途切れており、出入口の可能性が高い。貼り床は、2~4cm程しか無い。主軸方位はN86°Wである。

覆土から、縄文土器片5点(図化は16~18)のほか、弥生土器か土師器の細片3点、磨製石鏃2点(19・20)、未製品1点(23)、磨製石斧転用砥石(25)、黒曜石と淡緑色粘板岩の剥片5点が出土した。時期比定は困難であるが、4~5世紀頃と推定される。



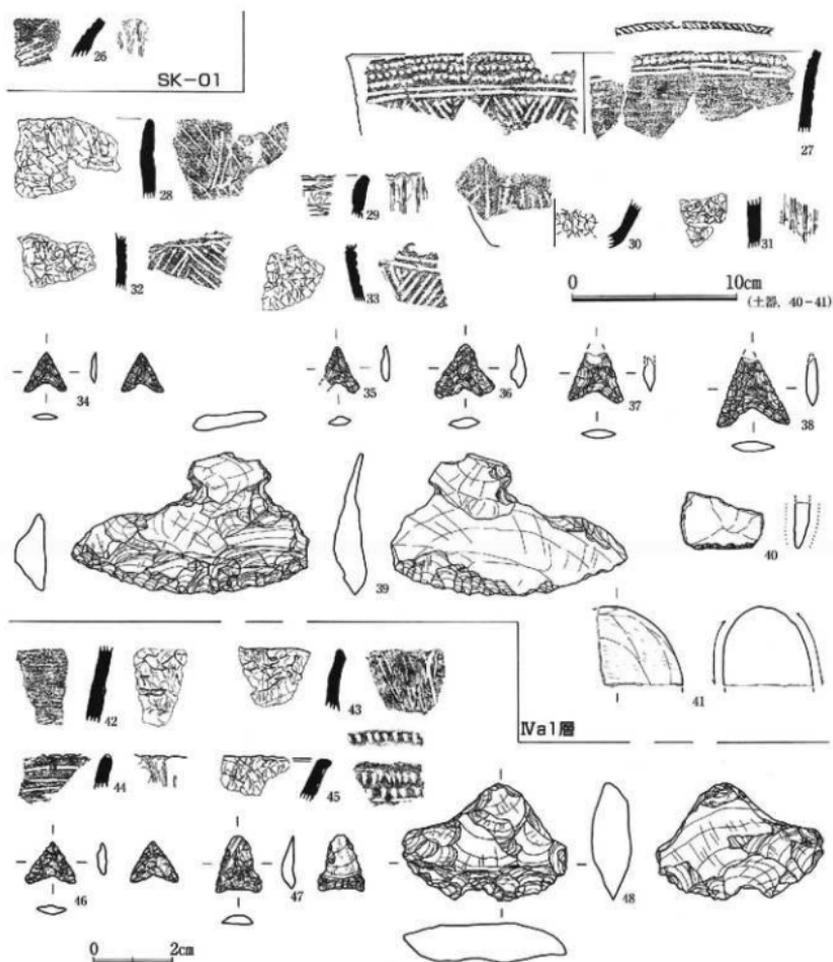
第6図 SA-01 出土遺物実測図

### SK-01 (第10図)

調査区の東南部で検出した、長径1.08m・短径0.52~0.58mの楕円形を呈し、深さは1m前後である。底面には、大小13個の小pitが不規則に、南側に片寄って付随する。IV a層上面で検出し、黒灰色土を完掘して終了していたが、VI層上面で再度検出し、陥し穴であることを確認したことから、VI層上面で調査した実測図になってしまった。覆土から、縄文土器片3点(図化は26の1点)と黒曜石の剥片3点が出土し、縄文時代前期の遺構と判断している。

### SK-02 (第10図)

調査区の東壁に半分かかった、長径50cm以上・幅80cmの長D字形のプランと推定され、深さは86cmを測る。底面隅には、深さ37・40cmの小pitがある。出土遺物は、黒曜石の剥片2点のみであるが、01号陥し穴とはほぼ同一時期と思われる。



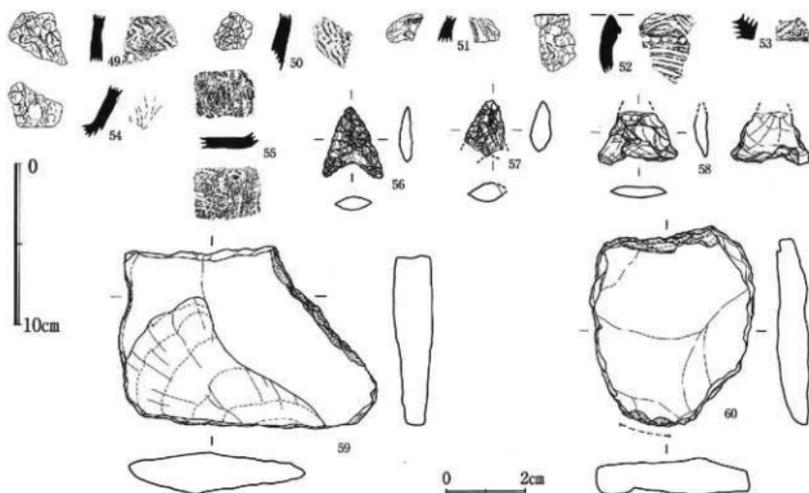
第7図 SK-01, IVa1・a2層 出土遺物実測図

IVa層の遺物 (第7図)

縄文土器片93点と、石器・剥片・チップ等が225点出土した。滑石を含む曾畑式土器(27)や森式土器(31)のほか、打製石鎌や石匙(39)とその未製品(48)に加え、剥片・チップが多数認められた。石器製作のブロックは認められなかったが、回帰的キャンプサイトの周縁部であると推定される。すり石(41)の出土は、付近に簡易住居の包蔵を想定させる。

## 2. 縄文時代早期

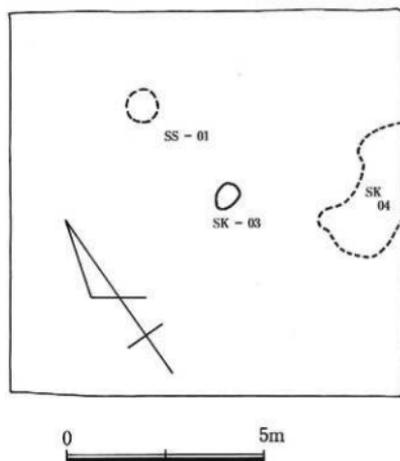
Ⅳb層をスコップで掘り下げ、Ⅵ層を手掘りで、Ⅶa層上面において集石遺構1基(SS-01)と土坑1基(SK-03)、Ⅶb層上面において焼土と炭を包蔵する土坑1基(SK-04)を検出した(第5図)。



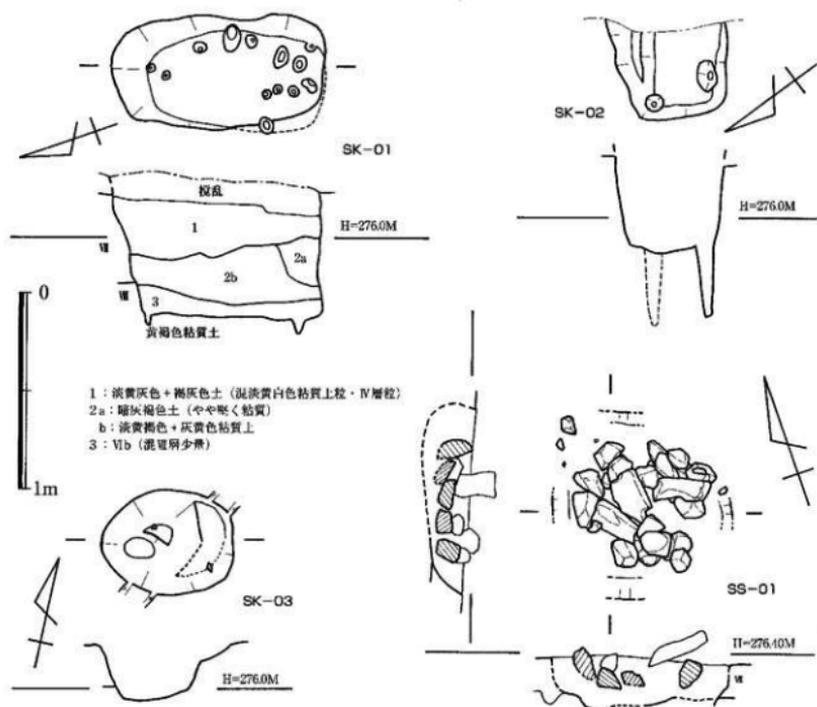
第8図 Ⅵ層 出土遺物実測図

### Ⅵ層出土遺物(第8図)

縄文土器片36点と石器・石核・剥片・チップが69点出土した。図化できたのは僅かであるが、押型土器(49・50)や平楯式土器(52)等の土器や石鏃未製品・剥片・チップの出土から数時期のキャンプサイトがあったと思われる。



第9図 Ⅶa・b層上面 遺構分布図



第10図 SK-01～03, SS-01 遺構実測図

### SS-01 (第10図)

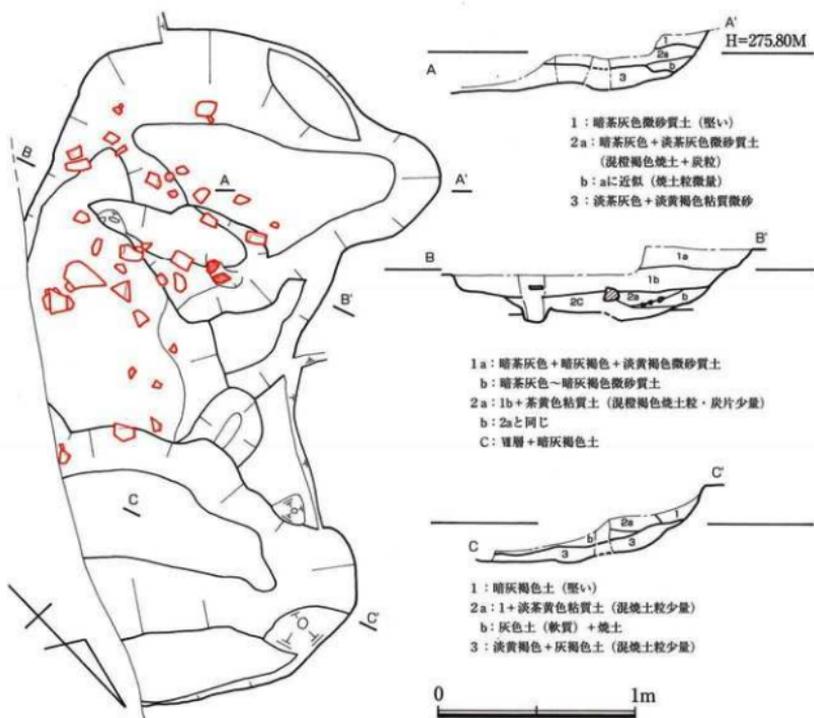
掘形は極めて不明瞭であるが、長径96cm・短径90cmの不整形で、20～28cmの深さがある。底面の北半分には、長さ20～26cmの大きめの角礫が敷かれ、周囲は角礫を立てている。炭化物等は出土していないが、礫の表面に若干の被熱が認められる。礫の半数は加久藤溶結凝灰岩で表面が粗い。河原石と共に、周辺の丘陵から運んで構築したと推定される。裏込め土から、土器片1点とチャートの剥片1点が出土している。

### SK-03 (第10図)

調査区のはほぼ中央で検出した、長径66cm・短径53cmの倒卵型を呈し、深さ28cmを測る土坑である。機能は不明である。

### SK-04 (第11図)

掘り込み炉3基が重複しているが、長軸にセクションを設定していないために新旧が不明である。東壁断面観察では切り合いは確認されなかったが、1a層の広がりと、Bの掘形の遺存度から、B→A→Cの順に構築されたと推定される。底面の被熱は不明瞭でないが、覆土には、焼土粒や炭片が



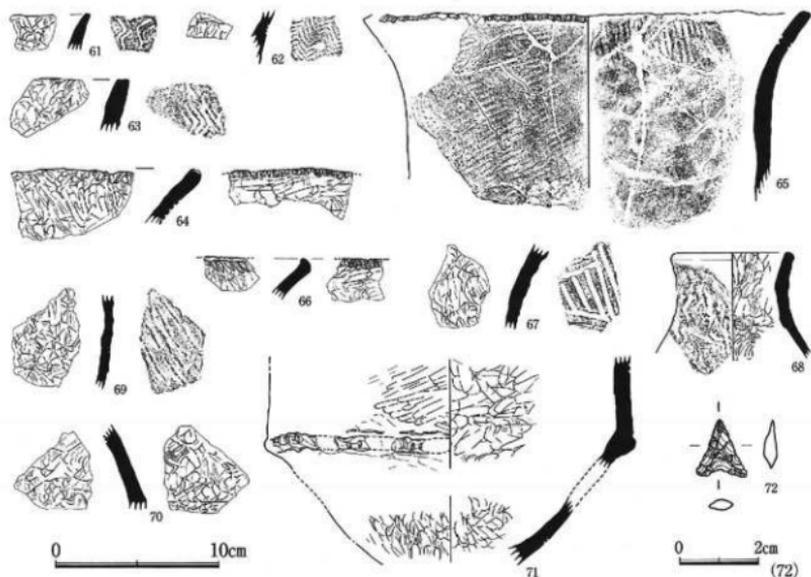
第11図 SK-04 遺構実測図

多く混じり、炉として機能したことが窺われる。

覆土から、押型紋・手向山式土器を主とする土器片34点と黒曜石の剥片8点が出土している。土器は64~66・71が同一個体と推定され、炉として使用された可能性が高い。他の土器は小片であり、覆土に混入したものである。

#### Ⅶ層出土遺物 (第13図)

縄文土器片133点と石器・石核・剥片・チップが101点出土した。土器の多くは手向山式土器の細片であり、キャンプサイトの存在が窺われる。



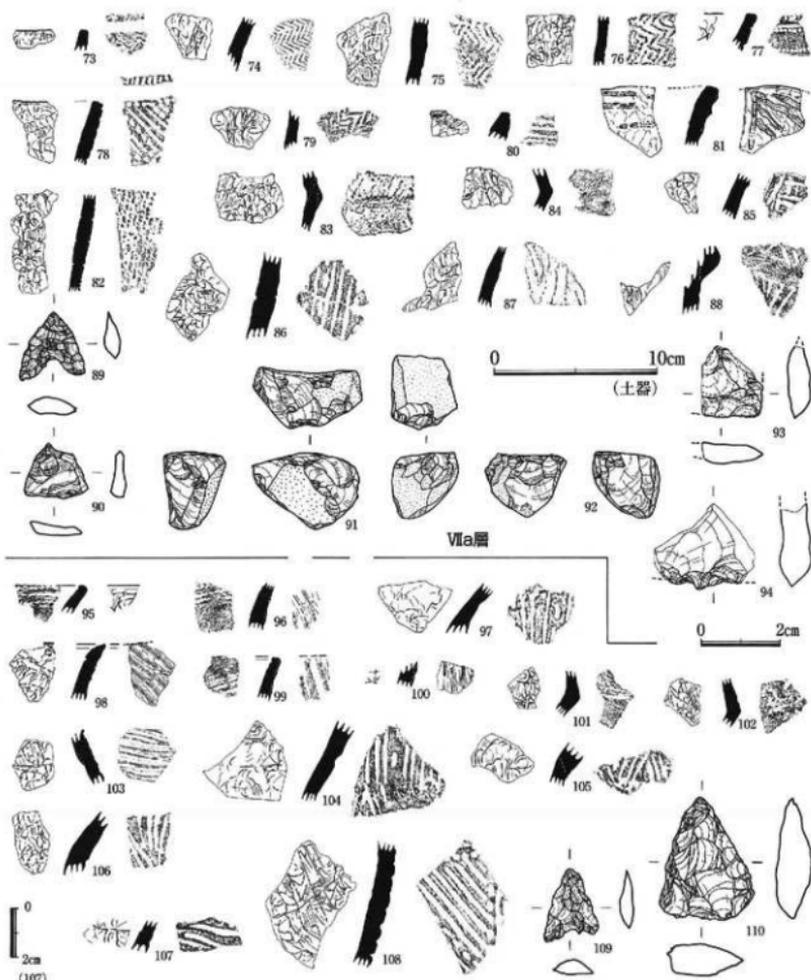
第12図 SK-04 出土遺物実測図

#### 第4節 まとめ

僅かな面積であったが、弥生後期～古墳時代中期と推定される竪穴住居1棟のほか、縄文時代前期の陥し穴2基と遺物、早期の集石遺構と灰・遺物が重層的に調査できた。

縄文時代早期と前期はキャンプサイトとして、弥生後期以降は小集落が断続的に営まれた遺跡であることが想定される。下層には良質の粘土が厚く堆積しており、将来的には採掘穴が発見される可能性がある。凹地や自然流路も多いと推定され、大型動物、特に猪を狙った陥し穴が計画的に配置されて検出されることが想定される。

当地域は、周囲を山や低丘陵に囲まれた独立した小盆地とも言える地形であり、縁辺微高地に集落があり、広大な低位面は生産の場として、主として畑作が営まれたと推定される。極く一部では、谷水を利用した水田もあった可能性があるが、大規模な水田化は、近現代の溜池掘削により水の確保ができてからであろう。



第13图 VIIa·b層 出土遺物実測图

表1 縄文土器観察表(1)

No	出土地	器種	法量(mm)	装 型		胎 土	焼 成	色 割		備 考
				外壁	内壁			外壁	内壁	
1	I-1前期	深鉢	約300	工具ナテ	工具ナテ	白色粒・赤褐色粒少量	良	暗茶褐	茶褐	外壁：スス少量
2	I-1前期	深鉢		二枚貝殻砂沈澱	工具ナテ	白色粒少量	良	暗茶褐	淡茶褐	外壁：スス少量
3	I-1前期	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微砂少量	良	淡黒褐	暗茶褐～暗茶	外壁：スス多い・沈澱
4	I-1前期	深鉢	—	沈澱	糸痕～工具ナテ	滑石や多い	良	茶褐	暗茶褐	外壁：ススや多い
5	I-1前期	深鉢少	—	工具ナテ	工具ナテ	白色粒・粗砂少量	良	淡黄灰～淡黄褐	暗茶褐～暗茶灰	外壁：スス微塵
6	I-1前期	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	白色粒少量	良	暗茶褐	茶褐～淡褐	外壁：ススや多い
7	I-1前期	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	滑石や多い	良	暗茶褐	暗茶褐～茶褐	
8	I-1前期	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	良	暗茶褐～淡茶褐	暗茶褐～暗茶	
16	S A-01	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	白色粒少量	良	淡黒褐	淡茶褐	外壁：スス少量
17	S A-01	深鉢	—	沈澱	工具ナテ	滑石や多い	良	暗茶褐～暗茶	淡茶～暗茶灰	外壁：スス少量
18	S A-01	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	滑石や多い	良	暗茶褐～茶	暗茶褐	
26	S K-01	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	良	暗茶褐	淡茶灰	外壁：スス少量
27	N a 1層	深鉢	186	工具ナテ	糸痕	滑石や多い	良	淡茶褐～暗茶褐	淡茶褐～暗茶褐	外壁：スス少量
28	N a 1層	深鉢	約300	工具ナテ	工具ナテ	微砂少量・赤褐色粒少量	良	茶褐	暗茶褐	外壁：スス少量
29	N a 1層	深鉢	約400	工具ナテ	工具ナテ	良	良	淡黒褐	淡茶褐～暗茶褐	外壁：スス少量
30	N a 1層	深鉢	—	半ミガキ	工具ナテ	良	ややあまい	淡黄灰	暗茶褐	
31	N a 1層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	白色粒少量	ややあまい	暗茶灰	淡茶褐	外壁：スス微塵・沈澱
32	N a 1層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	滑石多量	良	茶～暗茶褐	淡茶	外壁：スス少量
33	N a 1層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	滑石や多い	良	暗茶褐	茶褐	穿孔1
42	N a 2層	深鉢	—	工具ナテ	糸痕～工具ナテ	微砂・角閃石少量	良	暗茶褐	暗茶褐～淡茶褐	外壁：スス少量
43	N a 2層	深鉢	約170	工具ナテ	工具ナテ	白色粒少量	良	暗茶褐	暗茶褐～淡茶褐	外壁：スス少量
44	N a 2層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	良	暗茶褐	淡茶褐～黒灰	口部：ヤヤミ
45	N a 2層	深鉢	約300	工具ナテ	工具ナテ	白色粒・赤褐色粒	良	暗茶褐	淡黄～淡褐	外壁：スス微塵・沈澱
49	VI層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	白色粒・赤褐色粒・角閃石少量	良	淡黄～淡褐	淡黄褐	
50	VI層	深鉢	—	山型文小	工具ナテ	良	良	淡黄褐	暗茶褐～淡褐	
51	VI層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	白色粒少量	良	淡黄褐	淡黄褐	
52	VI層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	良	良	淡黄褐～淡黄灰	淡黄褐～暗茶褐	
53	VI層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	良	茶褐	暗茶褐	疑似縄文
54	VI層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	白色・赤褐色粒少量	良	黄褐	暗茶褐～淡茶褐	
55	VI層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微砂少量	良	淡黄～淡黄	黄褐	
61	S K-04	深鉢	約300	山型文	工具ナテ	白色粒少量	ややあまい	淡黄褐	淡黄褐～淡黄	
62	S K-04	深鉢	—	山型文	工具ナテ	微細砂少量	良	淡黄褐～茶褐	暗茶褐	
63	S K-04	深鉢	約400	山型文	工具ナテ	微細砂少量・小片	ややあまい	暗茶褐	茶褐～暗茶褐	
64	S K-04	深鉢	—	工具ナテ	糸痕～工具ナテ	微砂少量	良	淡黄灰～灰褐	暗茶褐～茶灰	口部：ヤヤミ 66, 65と同1個体
65	S K-04	深鉢	264	糸痕伏	糸痕～工具ナテ	微細砂・角閃石少量	良	茶褐～暗茶褐	暗茶～淡黄灰	外壁：スス多い 64, 71と同1個体
66	S K-04	深鉢	約400	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	良	淡茶褐～暗茶褐	淡茶褐～淡黄褐	外壁：ススや多い 64上同一個体
67	S K-04	深鉢	—	沈澱	工具ナテ	白色粒少量	良	暗茶褐	淡茶褐～茶灰	
68	S K-04	甕	68	山型文	山型文・工具ナテ	赤褐色粒少量	良	淡黄～淡黄灰	淡黄～淡黄灰	押型土器
69	S K-04	深鉢	—	無赤文	工具ナテ	微細砂少量	良	暗茶褐	暗茶褐	外壁：スス少量
70	S K-04	深鉢	—	半ミガキ～工具ナテ	工具ナテ	微砂・白色粒少量	良	黄褐～淡黄	暗茶褐～淡黄灰	
71	S K-04	深鉢	—	糸痕～工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量	ややあまい	暗茶褐～淡黄灰	淡黄灰～茶灰	外壁：スス少量 内壁：オコシ少量
73	VII層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	白色粒・小微塵少量	ややあまい	暗茶褐	暗茶褐	
74	VII層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	微砂少量	良	茶灰～淡黄褐	淡茶灰	
75	VII層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	白色粒・赤褐色粒少量	良	暗茶褐	淡黄灰～淡黄灰	外壁：スス少量
76	VII層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	良	良	茶褐～茶褐	暗茶褐～淡黄褐	
77	VII層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	微細砂少量・角閃石少量	良	茶褐	暗茶褐～淡黄灰	釉敷
78	VII層	深鉢	—	刺突文・沈澱	工具ナテ	微細砂少量・角閃石少量	良	淡茶褐～暗茶褐	淡茶褐～暗茶褐	
79	VII層	深鉢	—	山型文	工具ナテ	微砂・角閃石少量	良	淡黄褐～黄褐	暗茶褐～淡黄褐	
80	VII層	深鉢	—	沈澱	糸痕	微細砂少量	良	淡黄褐	茶～茶褐	
81	VII層	深鉢	約400	工具ナテ	工具ナテ	微砂少量	良	淡黄褐～暗茶褐	暗茶褐～淡黄	外壁：スス微塵
82	VII層	深鉢	—	貝殻沈澱	工具ナテ	白色粒少量	良	淡黄褐	淡茶灰～暗茶褐	
83	VII層	深鉢	約350	工具ナテ	工具ナテ	微細砂・小片・角閃石少量	良	淡黄褐～茶褐	淡黄褐～暗茶褐	外壁：スス微塵
84	VII層	深鉢	—	工具ナテ	工具ナテ	良	良	淡黄褐	暗茶褐	

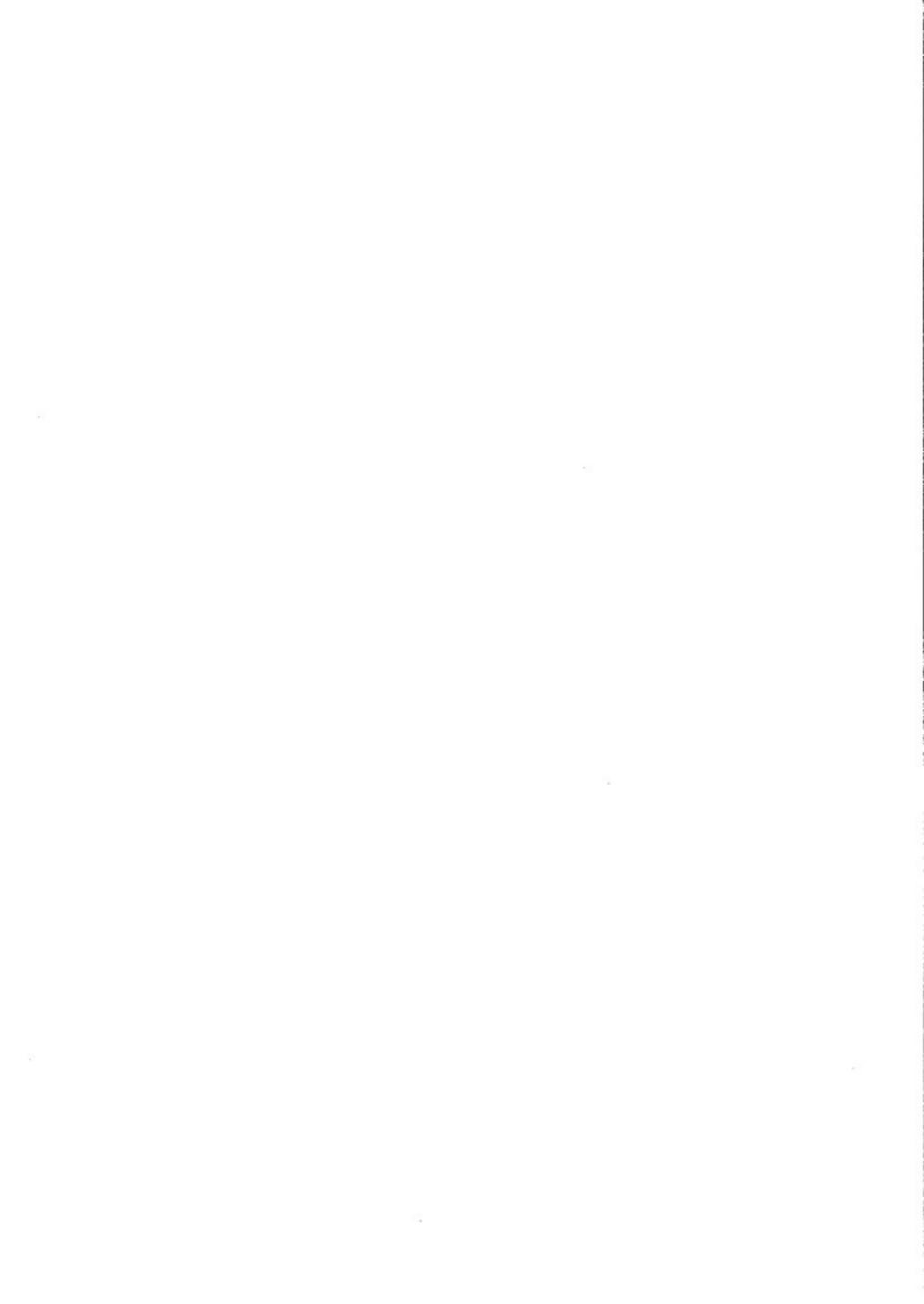
表2 縄文土器観察表(2)

No	出土地	器種	法量(mm)		調整		胎土	焼成	色		備考
			長さ	口径	外面	内面			外面	内面	
85	電層	深鉢	—	—	工具ナデ	工具ナデ	準褐色粉土質 少量	良	暗茶褐色	茶灰—炭粉	
86	電層	深鉢	—	—	沈澱	工具ナデ	黄褐色、 白色少量	良	淡褐色—淡茶褐	粉質—炭粉	
87	電層	深鉢	—	—	準赤土、工具ナデ	工具ナデ	微細砂少量 角質少量	良	茶褐	暗茶灰—淡黄褐	
88	電層	深鉢	—	—	沈澱—工具ナデ	工具ナデ	準赤土、白色少量 黒色少量	良	赤褐—淡橙褐	暗茶褐	
95	Ⅱb層	深鉢	—	—	工具ナデ	具線沈澱、 工具ナデ	微砂、角質少量	良	淡黄褐	淡黄褐	
96	Ⅱb層	深鉢	約400	—	工具ナデ	具線沈澱、 工具ナデ	微砂少量	良	淡黄褐	淡黄褐	
97	Ⅱb層	深鉢	—	—	テラ沈澱、 工具ナデ	工具ナデ	炭粉少量	良	暗茶褐—茶褐	暗茶褐	
98	Ⅱb層	深鉢	—	—	工具ナデ	工具ナデ	微砂少量	良	淡黄褐	淡黄褐	
99	Ⅱb層	深鉢	約400	—	工具ナデ	具線沈澱— 工具ナデ	微砂微量	良	淡黄	淡黄褐	
100	Ⅱb層	深鉢	—	—	工具ナデ	工具ナデ	微細砂少量	良	茶褐—茶灰	淡褐	外面：ヌス数量
101	Ⅱb層	深鉢	—	—	具線沈澱、 工具ナデ	工具ナデ	微砂、小骨、 黒色微量	良	淡橙—淡黄褐	暗茶褐—淡褐	
102	Ⅱb層	深鉢	—	—	沈澱、工具ナデ	工具ナデ	微細砂少量	良	淡茶褐—茶褐	暗茶褐—淡黄褐	
103	Ⅱb層	深鉢	—	—	具線凹線文	工具ナデ	微砂、白色粒少量	良	淡茶—暗茶褐	茶褐	
104	Ⅱb層	深鉢	—	—	テラ沈澱、 工具ナデ	工具ナデ	微砂中多量、 微細砂少量	良	暗黄褐	茶褐—淡茶褐	
105	Ⅱb層	深鉢	—	—	工具ナデ	工具ナデ	微砂少量	良	茶褐—暗茶褐	暗茶褐	106と同—個体小
106	Ⅱb層	深鉢	—	—	工具ナデ	工具ナデ	微砂少量	良	淡橙褐—淡黄褐	暗茶褐	106と同—個体小
107	Ⅱb層	深鉢	約60	—	沈澱	工具ナデ	微砂少量	良	暗茶灰	淡橙褐	
108	Ⅱb層	深鉢	—	—	刺突文、沈澱	工具ナデ	微砂、角質少量	良	微黄—黄褐	暗茶褐—暗茶灰	

表3 石器観察表

No	出土地	器種	法量(mm)			重さ	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
9	I—Ⅱ層	打製石礫	18	(14)	3	0.5	黒曜石	磨理面で折損
10	I—Ⅱ層	打製石礫	17	(15)	2	0.3	黒曜石 (準黒曜)	
11	I—Ⅱ層	打製石礫	15	14	2	0.3	チャート	
12	I—Ⅱ層	打製石礫	15	16	4.5	0.8	少骨	
13	I—Ⅱ層	打製石礫未製品	(21)	(15)	5	1.4	黒曜石	失敗品
14	I—Ⅱ層	打製石礫未製品	27	14	7	2.8	チャート	
15	I—Ⅱ層	石礫未製品	39	(34)	8	10.1	灰色チャート	
19	SA-01	磨製打礫	(16)	(10)	1	0.2	粘板岩	
20	SA-01	磨製石礫	27	23	2	1.5	粘板岩	
21	SA-01	打製石礫未製品	19	16	7	2.0	チャート	
22	SA-01	磨製石礫	31	21	4	3.1	粘板岩	素材破片
23	SA-01	磨製石礫未製品	48	24	5	4.6	粘板岩	
24	SA 01/5K	砥石	(30)	53	27	84.5	黒化ナツリン	砥石木場所小
25	SA-01	磨製石礫 粘板岩	(93)	66	30	328.2	砂岩	
31	Ⅱa-1層	打製石礫	10	10	1.5	0.1	黒曜石	
35	Ⅱa-1層	打製石礫	12	(10)	2	0.2	黒曜石	
36	Ⅱa-1層	打製石礫	13.5	(15)	2.5	0.4	黒曜石	
37	Ⅱa-1層	打製石礫	(13)	14	2	0.3	黒曜石	
38	Ⅱa-1層	打製石礫	(17)	18	3	0.6	黒曜石	
39	Ⅱa-1層	石礫	36	59	7.5	13.9	チャート	

No	出土地	器種	法量(mm)			重さ	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
40	Ⅱa-1層	石器	(35)	50	(19)	20.6	磨製黒曜石	片割れ (刃部のみ)
41	Ⅱa-1層	磨石	(48)	(47)	53	175.9	磨製黒曜石	
46	Ⅱa-2層	打製石礫	10.5	12	2.5	0.2	ハク英泥岩	
47	Ⅱa-2層	打製石礫未製品	14	11.5	3	0.4	黒曜石	
48	Ⅱa-2層	石礫未製品	30	41	10	13.7	玉髄	
56	Ⅱ層	打製石礫	18	15	3	0.6	黒曜石	
57	Ⅱ層	磨製石礫未製品	(14)	(10)	5	0.6	黒曜石	
58	Ⅱ層	打製石礫	(14)	20	3	0.7	頁岩小	失敗作小
59	Ⅱ層	石器小	113	156	26	682.7	磨製黒曜石	
60	Ⅱ層	石器	124	101	23	341.5	磨製黒曜石	刃部と基部のみ 割れ
72	SK-01	打製石礫	15	13	3	0.4	チャート	
89	Ⅱ層	打製石礫	17	16.5	4	0.8	黒曜石	白沢所小
90	Ⅱ層	打製石礫未製品	14	16	3.5	0.7	黒曜石	糸ノ木津留所
91	Ⅱ層	石礫	27	20	30	8.0	黒曜石	糸ノ木津留所
92	Ⅱ層	石礫	19	16	16	5.7	黒曜石	糸ノ木津留所
93	Ⅱ層	石礫小	18	(15)	5	1.9	ハク英泥岩	
94	Ⅱ層	石礫	(22)	(25)	8	4.5	チャート	失敗作小
109	Ⅱb層	打製石礫未製品	18	14	3.5	0.7	安山岩	
110	Ⅱb層	打製石礫未製品	31	23	9	5.5	チャート	



島内地下式横穴墓群

写 真 図 版



調査地 遠景（南東から、平成10年12月撮影、白丸が調査地）



調査地 俯瞰



調査区 近景 (南から)



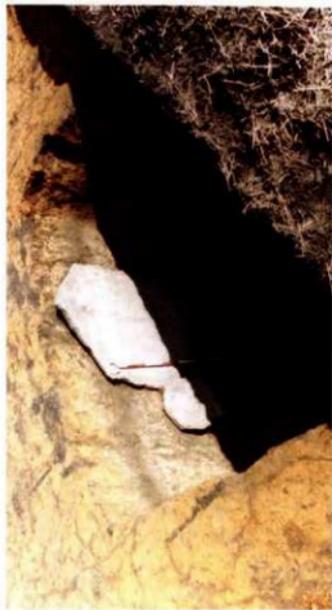
調査区 俯瞰（右が北）



同左 閉塞石除去。羨門（南から）



同左 南壁ステッピング掘込状況（北から）



ST-113 羨門 板石閉塞状態（南西から）



同 上 竪坑横断面（北から）

ST-113  
 竪坑完掘全景  
 (南から)



同 上 羨道中位出土 銅鈴 (中央部)



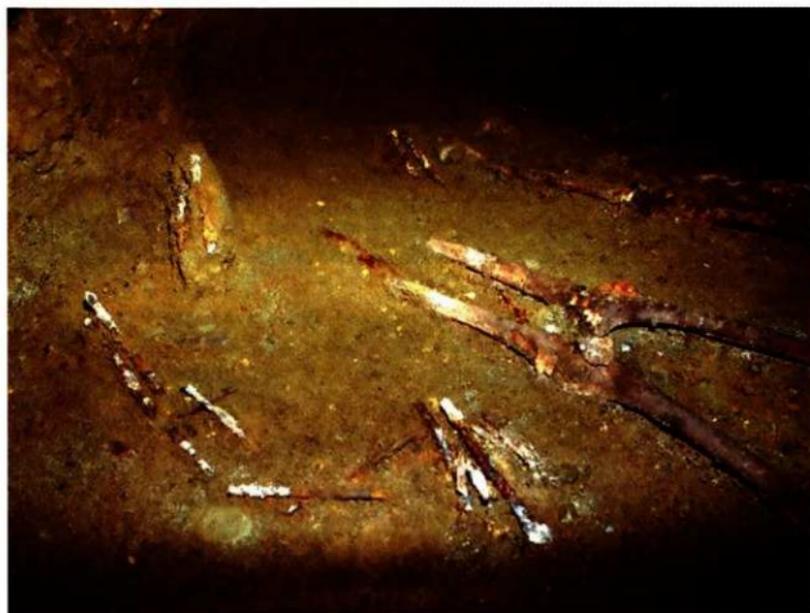
ST-113 1~4号人骨 上半



同 上 1~3号人骨 1号人骨の右に剣



ST-113 1~4号人骨 上半



同 上 下肢と副葬品



ST-113 1～4号人骨除去，鉄剣と鍬子



同 上 5号人骨 上半



同 上 下半，骨鏃1点

ST-114  
 竪坑半截  
 断面順序  
 (西から)



同上 羨門閉塞状態 (南から)



同左 完掘状態



同左 南側上部ステップ (北から)



ST-114 玄室内 右半 1～3号人骨と副葬品



同 上 頭部～上半身と副葬品



ST-114 1~3号人骨  
下肢と副葬品



同上  
足先鉄鎌束



同上 人骨除去



ST-114 1・2号人骨の副葬品 接写



同上 左半 4・5号人骨と副葬品



ST-114 4・5号人骨 上半身



同 上 下肢と朱玉



ST-115 竪坑 断面層序 (南西から)



同 上 羨門閉塞状態 (南から)

ST-115  
 閉塞石除去  
 完掘状態  
 (南西から)



同 上 豎坑 西～南壁のステップ (北東から)



ST-115 玄室内 左側 1~4号人骨と副葬品



同 上 上半身と副葬品



ST-115 3・4号人骨 胸部～膝付近と副葬品



同 上 3号人骨下肢と副葬品, 左奥の罎・辻金具と冑



ST-115 2号人骨下肢と副葬品, 奥の罎と辻金具・冑



同 上 罎と漆膜, 冑



ST-115 1~4号人骨除去, 貝鋼・刀子2点, 大刀, 短剣, 4号人骨の耳環1対 (竹串部)



同 上 刀子~貝鋼部分 接写



ST-115 玄室右側 5号人骨と副葬品



ST-117 竪坑 断面層序 (南西から)



ST-117 羨門アカホヤ塊閉塞状態 (南から)



同 上 (東から)



ST-117 竪坑 完掘 (南から、羨門の天井が一部崩落)



同 上 竪坑西壁のステップ (南東から)



ST-117 1～3号人骨（南東から）



同 上 1・2号人骨（南東から）



ST-117 2号人骨と右肩部の刀子(右下) (南東から)



同 上 2号人骨 足先の鉄鏝



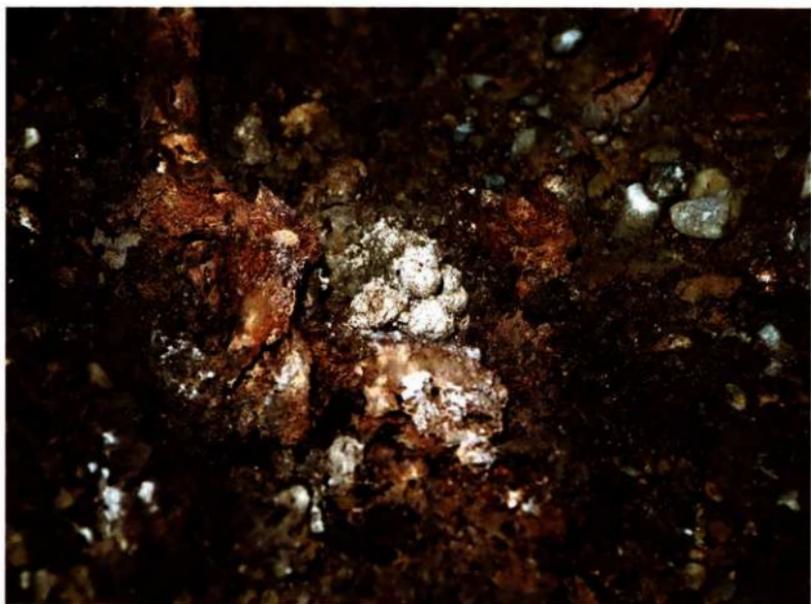
ST-117 2～4号人骨と副葬品（南から）



同 上 1号人骨と副葬品（南西から）



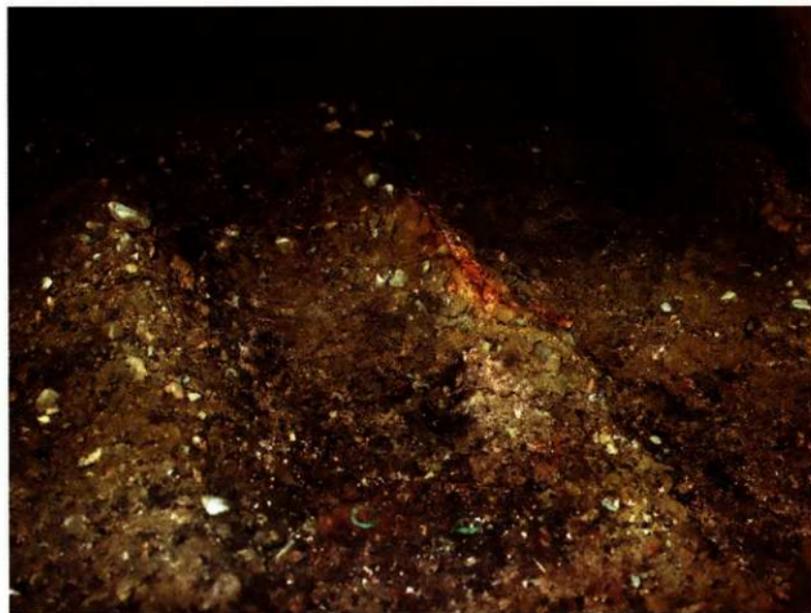
ST-117 3・4号人骨 下肢と副葬品・糞石 (南から)



同 上 3号人骨の糞石 (南から)



ST-117 1号人骨除去, 鉄鎌と矢柄・刀子(東から)



同 上 3・4号人骨除去, 蛇行剣と耳環(南から)



ST-118 竖坑 断面層序 (南から)



同 上 羨門アカホヤ塊閉塞状態 (南西から)



ST-118 竪坑完掘 (南西から)



同 上 南側のステップ (東から)



ST-118 1号人骨と2号人骨半身（北西から）



同上 1・2号人骨 上半身（北西から）



ST-118 1号人骨の着装貝鋼 (北西から)



同 上 2号人骨と副葬品 (南西から)



ST-118 2号人骨 下肢周辺 (南から)



同 上 3号人骨 (南東から)



ST-118 3号人骨 上半身と刀子(北東から)



同 上 下半身(北東から)



ST-119  
竪坑検出状態  
(南から)



上：同上  
竪坑断面層序  
(南から)  
閉塞石は崩落



左：同上  
完掘  
(南西から)



ST-119 玄室左半 1・2号人骨と副葬品 (南から)



同 上 右半 2・3号人骨と副葬品 (南西から)



ST-119 1・2号人骨と副葬品 (南から)



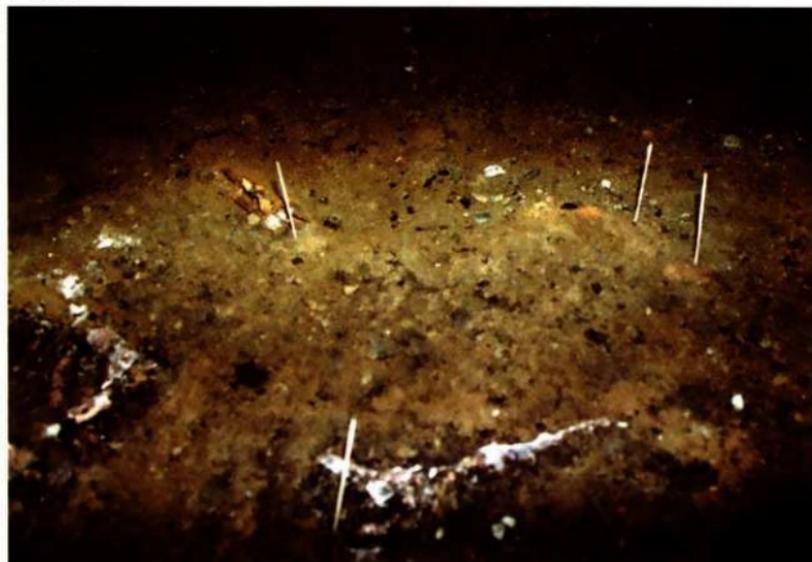
同 上 1号人骨上半と副葬品 (南から)



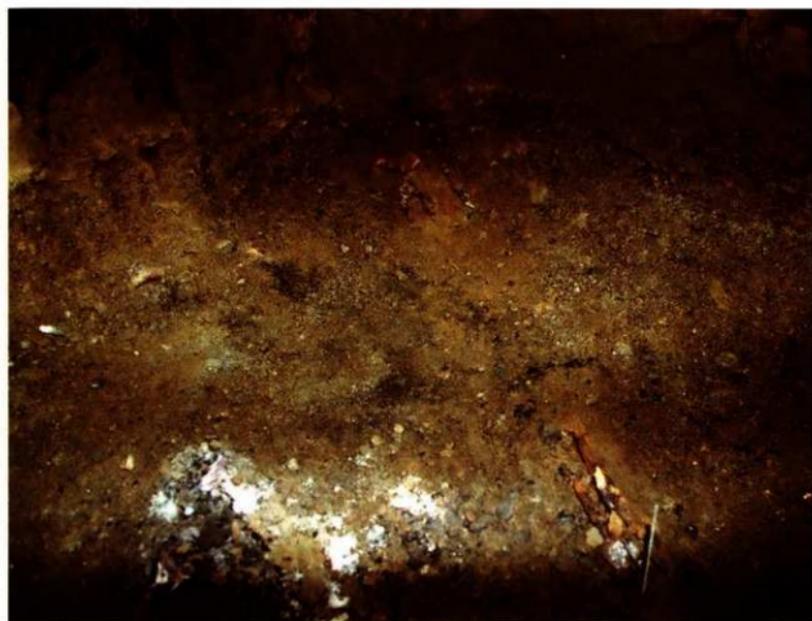
ST-119 1号人骨 右足部の漆膜 (南東から)



同 上 2号人骨 胸部～下肢 (南東から)



ST-119 2号人骨下肢周辺の副葬品（南から）



同 上 玄室左奥と2号人骨左下肢部の副葬品（南西から）

ST-119  
左奥壁部の  
副葬品  
(南から)



下：同上 3号人骨と副葬品 (北から)



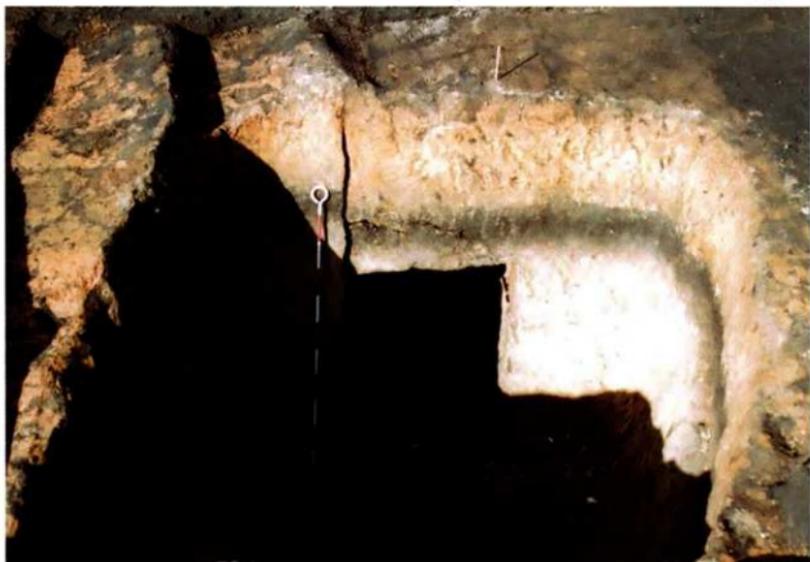
同 上 寛骨～足先 (北から)



ST-120 竖坑断面層序 (南から)



同 上 茨門アカホヤ塊閉塞状態 (南西から)



ST-120 豎坑完掘 (南西から)



同 上 1号人骨と着装具鋼 (西から)



ST-120 1号人骨 下肢 (北から)



同 上 頭骨と着装具銅 (北から)

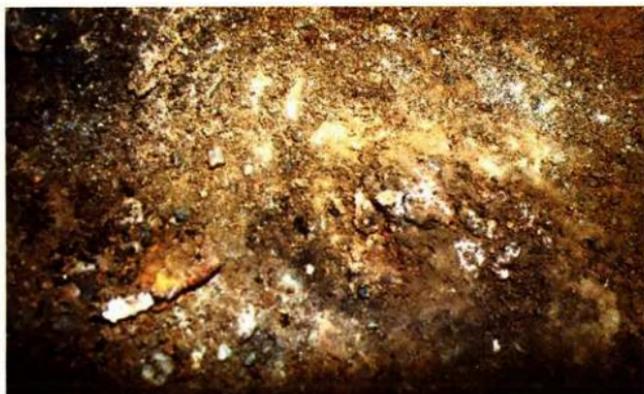
ST-120  
1号人骨  
左腕の貝剣  
(北から)



下: 2号人骨と副葬品 (東から)



同 上  
頭骨周辺と  
副葬品  
(東から)





ST-121 竖坑断面層序 (南東から)



同 上 羨門板石閉塞状態 (南東から)



ST-121 羨門板石閉塞状態 (南から)



同 上 完掘、玄室内 (南西から)



ST-121 玄室 (南西から)



同 上 1号人骨と副葬品 (南西から)



ST-122 豎坑断面層序 (西から)



同 上 羨門閉塞状態 (南東から)



ST-122 羨門閉塞状態 接写 (南西から)



同上 竪坑完掘 (南から)